ISSN　2188—2789

RITSUMEIKAN

インクルーシブ社会研究　6
Studies for Inclusive Society 6

男性介護者支援の論理と根拠
—ケアが拓くコミュニティ—
The Logic and Grounds of the Support for the Male Caregiver

編集担当：津止　正敏
Editor: Masatoshi Tsudome

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム
Translational Studies for Inclusive Society:
MEXT-Supported Program for the Strategic Research Foundation at Private Universities
Research on Escorted Support for Inclusive Society Team

2015年 3月

立命館大学人間科学研究所
Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University

刊行にあたって

本書のテーマは表題の通り男性介護者支援の正当性を問うことである。

「なぜ男性介護者の支援なのか」―この一見単純に見えるこの問い掛けに応えるのは意外に難しく、もつれた糸をほぐすかのような複雑な作業を要する。介護と「仕事・暮らし・社会」という今日的で且つ論争的なテーマ性に突き刺さるような優れたヒントが潜んでいるように思われる。限られた紙幅ではあるが少しコメントしておきたい。

少し違う視点から考えてみようと思う。

男女雇用機会均等法（1985年）が施行され、雇用における男女差別の撤廃というテーマがようやく表舞台にあがった。しかし、採用や処遇面での局地的の前進はあったものの母性保護などの支援ではむしろ極端に後退し雇用環境での男女平等にはなお道遠し、課題を山積させている。「24時間戦えますか！」とビジネスマンを鼓舞したドリンク剤のCMのように、余暇も家族も社会活動もすべてを犠牲にして仕事一筋に適合させるかのような従来の男社会で見られた働き方のスタイル。「私つくる人、僕食べる人」と性別役割分業を刷り込んだ食品CMのような働き方と暮らし方のシステム。このスタイルとシステムの是非を問い、正していくということなしに女性もただその道をなぞっていくということだけでは、男女の雇用環境の平等化や「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）」には影響することはなかったのだ。女性の働き方の男性化とでもいうようなワーク・ライフ・アンバランスな働き方の蔓延は、男女を問わず雇用と就労、生活の環境をますます窮屈なものとしているようだ。

このようなアプローチの限界が広く合意されたのだろう、「男のように働く」キャリア女性の支援という以上に、最近では働き方の多様性を強調する「ダイバーシティ推進」がキーワードとなって広がっている。24時間会社漬けのようないわゆる「男性並み」働き方を前提にすると、「仕事と生活の調和（ワークライフバランス）」にも支障がでるということだろう。男女ともに家族的責任の全うなど夢物語となる。また私たちのフィールドである男性介護者のように、従来の「男性並みに」働くことのできない人たちの存在もクローズアップされてきた。性別に関わらず多様な労働者のニーズに着目した人事政策や職場マネジメントの重要性への着目である。

こうした女性の労働環境と、全く同様の構造を男性の介護環境も抱えているようである。男女が共に介護を担う時代、というのはこれまでのように過酷な家族介護を当然視し、またこれを正当化するということではないはずである。男女が共に手を携えて、家族と自分の老後を安心して託すことが可能な、これまでとは違う新しい介護のスタイルとシステムを創造していくことに他ならない。すなわち、100万人を超える男性のこうした介護と暮らしの実態が教えていることは、働く女性たちが「男性のような働き方」に異議申し立てているように、男性もまた「(これまでの) 女性と同じように」介護しようということではないということではないか。これまでの女性たちが担ってきたように無償且つ無制限・無限定の家族介護労働によってのみ成り立ってきた介護のスタイルとシステムをただなぞっていくだけでは、いまこの社会が抱えている深刻な介護問題はけっして解決しないということではないか。男女が共に介護を担う時代ということは、介護に耐性力のある新しい社会の幕開けとなるはずだ。だとすれば、「ケアメンを生きる」という男性介護者の新しい「生き方モデル」は、上記の文脈に照らせば、インパクトの大きな創造性豊かな意味ある生き方に連なっていく。介護する／されるということを至極当たり前のように社会の五臓六腑に埋め込んでいくという、この社会の「これまで」と「これから」を画するような巨大な「未完のプロジェクト」だ。

本書は、以上の問題意識をもって開催された男性介護研究会シンポジウム「男性支援の可能性」(2014年3月9日 男性介護者と支援者の全国ネットワーク・立命館大学人間科学研究所男性介護研究会共催、公益財団法人キリン福祉財団助成) での議論をもとに編集した。当シンポジウムは、編者が参加する研究プロジェクト：文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」の一環としても行われた。男性介護者をめぐる問題において研究者と実務家・当事者が集った、まさに「＜学＝実＞連環」を体現したシンポジウムの記録である。

最後に、講演・報告内容に加筆修正の労を頂いた、伊藤公雄氏、今井まゆり氏、小林裕子氏、そして本誌への掲載を快く許可頂いた男性介護者と支援者の全国ネットワーク及び公益財団法人キリン福祉財団に対し、心から感謝申し上げたい。

2015年3月1日

立命館大学産業社会学部　津止 正敏

目　　次

刊行にあたって…… 1

Ⅰ．男性支援の可能性―介護する男性支援の視点から―
司会：津止　正敏（立命館大学）

はじめに―シンポジウム「男性支援の可能性」の開催にあたって―…… 6
津止　正敏

基調講演「なぜ、いま、男性支援なのか」…… 10
伊藤　公雄氏（京都大学）

報告１「京都における男性対象の相談事業」…… 43
今井まゆり氏（京都市男女共同参画協会）

報告２「男性介護者の集い「ほっこりサロン」の実践」…… 52
小林　裕子氏（大阪市住吉区社会福祉協議会・住吉区地域包括支援センター）

ディスカッション…… 61

Ⅱ．ケアが拓くコミュニティ
―「ケアメンサミット JAPAN」の実践から― …… 75
津止　正敏・西田　朗子

はじめに

1.「ケアメンサミット JAPAN」開催の背景と目的

2.「ケアメンサミット JAPAN」の実行体制

3.「ケアメンサミット JAPAN」のプログラム

4. ケアメングループの活動実態―プロフィールシートから―

5. ケアメングループ組織化の意義―プログラム開発とケアコミュニティ―

資料 1―ケアメンサミット参加者アンケート結果

資料 2―「ケアメンサミット JAPAN Ⅰ・Ⅱ」参加団体一覧

資料 3―プロフィールシート

Ⅰ．男性支援の可能性

―介護する男性支援の視点から―

司会：津止正敏（立命館大学）

基調講演「なぜ、いま、男性支援なのか」
　　伊藤　公雄氏（京都大学）

報告１「京都における男性対象の相談事業」
　　今井まゆり氏（京都市男女共同参画協会）

報告２「男性介護者の集い「ほっこりサロン」の実践」
　　小林　裕子氏（大阪市住吉区社会福祉協議会・
　　住吉区地域包括支援センター）

ディスカッション

・2014 年３月８日（土）

・京都キャンパスプラザ

はじめに―シンポジウム「男性支援の可能性」の開催にあたって―

津止　正敏（立命館大学／男性介護者と支援者の全国ネットワーク）

皆さん、ご苦労さまです。今日３月８日というは国連が定めた国際女性年を記念する日ですが、ちょうど５年前（2009 年）の今日に、私たち男性介護者と支援者の全国ネットワークがスタートしました。あれから、早いもので発足してまる５年になります。今年は男性介護ネットの５周年を記念して、ひとつ節目の年をみんなで祝いながら新しい課題を見つけようではないかと、準備をしてきました。それは、「ケアメンサミット JAPAN」。名前は大きいけれども、そんなに大きな団体ではありません。心を１つにして、志を大きく持って将来に向けて私たちの思いを強くアピールしていこうではないか、そんな気持ちで準備を進めてきたわけであります。男性介護ネットの会員ナンバーは、既に 800 番を超えました。十分ではない取り組みではありますけれども、多くの皆さん方が集まっていただいて、全国各地に男性介護者のグループが生まれようとしております。

昨年 2013 年に、私たちは「ケアメンサミット JAPAN（Ⅰ）」と銘打って、全国のケアメングループを主宰する皆さま方に声を掛けて、一堂に会してみませんかとのご案内を計画しました。そのためにケアメングループ探しをしたわけですが、全国で 100 カ所を超えるくらいの男性介護者の会や集いを主催する団体があって、とてもびっくりしたわけであります。こうして開催された「ケアメンサミット JAPAN（Ⅰ）―介護退職ゼロ作戦 2013」には 34 団体の皆さまに集まっていただきました。今回のサミット「（Ⅱ）」には 40 団体を超える方をお迎えすることが叶いました。その方々の経験を交流しながら、次の５年、次の 10 年に向けての私たちの課題を探してみたいと思っているわけであります。今日は、「ケアメンサミット JAPAN」全体を包括するようなイベントにしながら、男性介護ネットの５周年を祝う記念事業として、そして恒例の男性介護研究会（立命館大学人間科学研究所）のシンポジウムも重ねてということでスタートを切りたいと思っているわけであります。

今年の男性介護シンポジウムのテーマは「男性支援の可能性」にしました。

男性支援の論理と根拠を少し明らかにしようではないかと思いました。なぜ、このようなことを思ったか。私たちがスタートした当初からですけれども、次のような意見、疑問をいつも投げつけられてきたわけです。それは「どれだけ男性の介護者が増えたといっても、所詮は3割台、あとの7割は女性が介護しているではないか。やはり介護は今も昔も女性の問題、女性のテーマではないのか」こういう言い方でご意見を頂いてきました。もう一つは先ほどのご意見とは真逆かもしれませんけれども次のようなものです。「いまや男女平等参画型社会、男女が共に手を携えて新しい形をつくっていこうということを政策スローガンにした社会。男とか女とか言っているような時代じゃないのではないか。そういう時代なのに、なぜ男性を焦点化するのか」というご意見です。この二つのご意見とも、それなりに意味があって歴史がある問い掛けなのでしょうけれども、介護する男性を支援することの意味、あるいは根拠に関する説得的な説明責任を果たせという問い掛けと受け止めなければなりません。こうした状況というのは一般にもまだ広く残っていると思っています。そのために、今回はそうした状況に対置する論点を立てて本格的に議論してみようと思った次第であります。

少し話題を変えてみます。京都府南部のある市の民生児童委員協議会(民協)の研修にお招きを頂いた時の話です。民協のメンバーは全体で150人ほどいらっしゃるのですが、男性のメンバーが30人を切った。2割弱です。以前は圧倒的多数が男性で、男社会の民協だったのです。女性の民生委員は少数でした。だから、民協の中に女性部会をつくり、女性の民生委員の立場から議論をして意見を表明するような場をつくっていました。男が集まると、男社会、男文化で、会議は夜にするし、喫煙は常態化し、宴会も頻繁にある、そういった文化に少し不都合な女性の民生委員たちの気持ちを代弁する部会となりました。今やそういう時代ではなくなってというのです。女性が圧倒的多数を占めて、逆に「男性部会」をつくらなければいけないような時代となったというのです。圧倒的多数、主流を占めるようなメンバーに適合的な文化、仕組みとかがつくられ、そういった中からはじき出される周辺化された立場の方々の問題があるのだという認識だろうと思います。そういうことを考えますと、これまで女性モデルで圧倒されてきて、そして今もそうかもしれない介護の分では私

たち男性介護をテーマとする取り組みにもそれ相応の意味があるだろうなと思ったりしたわけです。皆さんとのご意見を深めながら、今日、明日の知見を深めてみたいと思っております。

今日のスケジュールは、これから4時半までシンポジウムをやらせていただきます。できれば、もう少し早めに切り上げて、今日はケアメングループの代表の皆さま方、スタッフの皆さま方も数多くいらっしゃいますので、その方々との意見交流会を、シンポジウムが終わった後、1時間程度、この場でやらせて頂こうと思います。その後、近隣のホテルで男性介護ネット5周年事業の前夜祭を盛大にやろうと思っています。これは男文化ではないかと言われればそうなのかもしれませんが、北海道や九州などわざわざ遠くからおいでいただいた方も多数いらっしゃいますので、皆さんとの交流を深めて、私たちの声を集めて、また1年皆で頑張ってみようではないかと、そういう意思表明をするための記念の日にしていてみたいなと思っております。よろしくご協力のほどを頂きたいと思っております。

それでは、「男性支援の可能性」と題する今日のシンポジウムを進めてまいります。最初に基調のご講演を頂くのは京都大学大学院の伊藤公雄先生でございます。日本のジェンダー研究の第1人者の立場で、この分野を牽引して頂いている先生です。男性学ということでは伊藤先生に随分リードして頂いていますので、多くの皆さん方が耳にしている内容だろうと思います。「なぜ、いま、男性支援か」という、私たちが本当に知りたいこと、あるいはそこに根拠を求めたいことについての貴重なご意見を伺えるのではないかと思っています。1時間の講演の後に、実践現場からの事例のご報告を頂いて、その後ディスカッションに入ります。全体を伊藤先生にコーディネートしてもらうという予定であります。

介護する人は、中高年の男性が圧倒的に多いのだけれども、私たちに先行する男性はイクメンたちもいます。イクメンたちの活動というのは積極的で、ロビー活動も盛んです。政策提案もしています。男性の新しい生き方モデルを提示しているのです。そういった若い世代から学ぶことも多いのではないかと思います。同時に、男性の支援に取り組んでいる団体も数多くあって、京都市の男女共同参画センターで男性専門の電話相談事業に参加しているメンバー、あ

るいは地域包括支援センターで介護する男性を支援しているメンバー、そういった方々と一緒に議論を深めてみたいと思っていますので、よろしくお願いしたいと思います。

それでは最初に、京都大学大学院の伊藤公雄先生から「今、なぜ、男性支援か」というテーマでご講演を頂きたいと思います。では、先生、よろしくお願いいたします。

基調講演　なぜ、いま、男性支援なのか

伊藤　公雄（京都大学大学院教授）

はじめに

- 変化する家族＝親密圏
  親密圏とは
  一定の情緒的結びつきに基礎づけられ、ケアすること／ケアされることなど相互の具体的な配慮と関与をともなった、身近でかつ一定の持続性をもった関係性のこと
  （「家族」という枠組みだけではとらられない関係の広がりのなかで生まれた言葉）

伊藤：ただいまご紹介いただきました、伊藤公雄と申します。今日3月8日は国際女性デーです。世界中で女性たちが女性差別に反対するという行動をされている日にあたります。この日にケアメンサミット、男性たちで男性の現在と未来を語り合う時間をもつというのもなにかのめぐりあわせかもしれません。今、津止先生から紹介していただいたように、私は、この20年ほど、男女共同参画の問題を男性の観点から考えることを仕事としてやってきました。実際、地方自治体とか政府の男女共同参画の政策立案などにも関わってきました。2010年に出された、政府の男女共同参画基本計画というものがあります。男女共同参画社会をいかにして実現していくかということを政府が計画として立案しているものです。僕は10年ほどこの委員をやっていました。今回の第3次の計画で初めて、第3分野に「男性・子ども」という分野が設定されました。これまで、男女共同参画というと、大体、女性差別撤あるいは女性の社会参画という形で考えられていたわけです。そうではなくて男性の問題もこの課題の中には含まれるべきだろうということです。こうした動きが、日本の政府でも政策として始まろうとしているのです。

なぜ男性問題、あるいは男性の生き方を政策レベルでも考えないといけないのか。この問題を考える時、ちょっと堅苦しい言葉ですけれども「親密圏」という言葉が、最近、よく使われます。親密圏というのは家族と大体同じと考えていただければいいと思います。ただし、家族という視点だけでは捉えきれないような問題が今起こり始めています。親密圏とは、「一定の情緒的結びつきに基礎づけられ、ケアすること／ケアされることなど相互の具体的な配慮と関与をともなった、身近でかつ一定の持続性をもった関係性のこと」という意味

になります。

家族の形の変化の背景

なぜ「親密圏」などという言葉ができたのか

- 産業構造の大きな変化
- 人口の都市化と核家族化／家族の「縮小」
- （経済先進国の）少子高齢社会の深化
- 男女共同参画　対等な家族的責任意識

（日本ではまだ顕在化していないが、国際的にはケアワーカーの人口移動も活発化）

こうした言葉が登場した背景には、産業構造や社会構造、グローバル化の進展などの歴史的にみても大きな変化があります。以前のように農業とか自営業が主軸だった社会では、大家族で、親族関係を中心にいろいろな人たちが入り交じって生活していたわけです。近隣の助け合いもありました。それが工業化のなかで、人口が都市へ大移動し、核家族化が進行していきます。核家族は、以前の大家族と比べて家族のメンバーの数が少なくなります。核家族中心の社会が、高齢化の中でどうなるかを考える必要があるのです。実際、いろいろな意味で家族が縮小し始めています。日本で、今、一番多い所帯の形態は何かご存じですか。いろいろな調査があります。後でもうしあげるように、一人暮らしの方が一番多いということになっているのです。

それに加えて、少子高齢化も進んでいます。後でも見ていただきますように、少子高齢社会はヨーロッパなどの経済先進国の共通の問題でした。現在では、それが東アジア地域でも起こっています。韓国、台湾、そして今後は中国も含めて、ヨーロッパ以上に急激な少子高齢社会に突入し始めているのです。

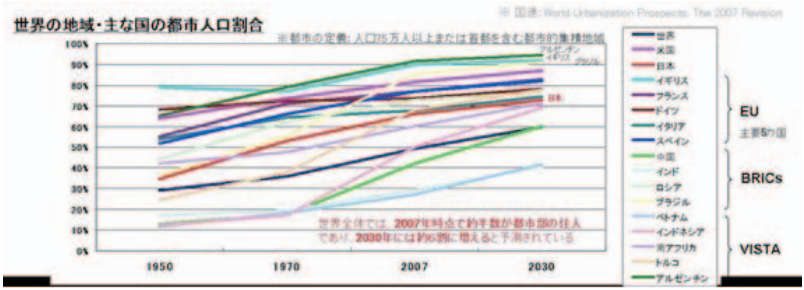
家族のメンバー数の減少と少子高齢社会の深化のなかで、今、世界中で大きな変化が生まれています。こうなると、育児や介護などいわゆるケア労働が、従来の家族だけではまかないきれなくなってきます。

加えて、グローバル化が進んできます。その結果、人の移動、特にケア労働者の国際移動も急激に進んでいます。家族の縮小のなかで、また、それまで主に家事労働をしていた女性の社会参画の広がりのなかで、ケアをする人が必要になってきます。そこで、こうした労働を海外から来て支えてもらうという動きが広がります。なかでも、フィリピンやインドネシアの女性たちは、ケア労働者、家事労働者として急激に他の国で働く人が増えてきました。今や、多くの相対的に経済が発達した諸国では、家族のケアをこうした外国人のケア労働

者に頼る傾向がみられます。

1990年代以後、子どもやお年寄りの世話や家事労働をする人たちが、海外からの移住労働者によって担われる仕組みがヨーロッパで拡大していきます。今では、シンガポール、韓国や台湾などのアジア諸国でも、こうした動きは広がっています。外国の方が家族の中に入ってきてケアをしてくれる。こうなると、先ほど申し上げたように、家族とは違う人にケアをしてもらうような関係が生まれます。家族に代わる新しい言葉として「親密圏」という言葉が誕生した背景のひとつは、こういうことです。

日本は不思議なことに、そういう選択をせず、外国の方をあまり入れない形で今までやってきました。しかし、これから少子高齢社会の中でそうは言っていられないのではないかと思います。お隣の韓国も同じような形で、どちらかというと外国の方の受入れに壁をつくっていましたが、2007年くらいに移民受入れのための法律をつくって、外国人の人権についての法整備をする中で、外国人の労働力を受け入れるような方向転換が始まっています。なぜかとえば、韓国では、日本以上に少子高齢社会が深化しているからです。



人口の都市集中の深化

（国連のデータによる）http://sonep.jp/kinmirai/index.php?

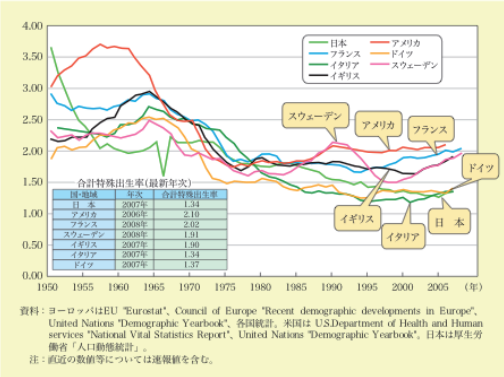
家族の形が変化し、人の動きが変化し、働き方が変化する、あるいは家族の運営の姿も変化する中で、私たち家族、あるいは親密圏のあり方が変わり始めているということです。

世界の主な地域の大都市の都市人口率を見てもそのとがよくわかります。現

在、日本では７割以上が都市に住んでいます。1950 年、僕が生まれたころですけれども、都市には 35％くらいしかいなかったのです。当時は７割近くが地方に住んでいたわけですけれども、今では７割以上が都市に住む形に変化しています。これは、世界全体の大きな流れでもあります。

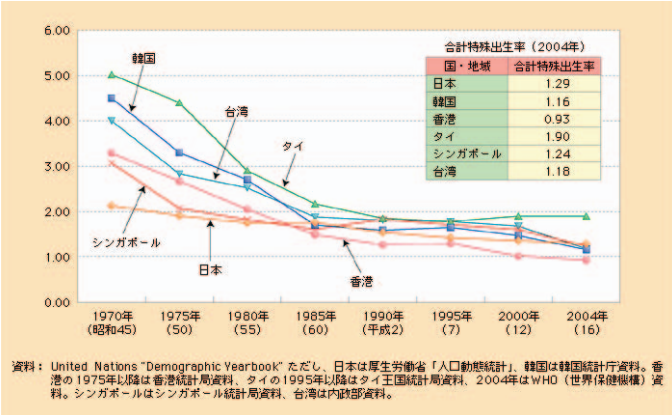
少子化も大きな歴史的トレンドです。産業化が進むと少子化傾向がみられます。しかし、少子化をストップさせた社会もあります。たとえば、スウェーデン、アメリカ、フランスなどでは、少子化傾向に歯止めがかかってきています。少子化は、一人の女性が一生涯に生む子どもの数の平均、いわゆる「合計特殊出生率」で分析されることが多い。つまり、男女のカップルで子どもができるわけですから、一人の女性が一生涯に子どもを産む数の平均が２以上ないと人口は維持できません。男女二人で子ども二人を産まないと維持できないわけですから。スウェーデン、アメリカ、フランスは一時期落ちていたんですけれども、今は２以上のところに来ています。イギリスとかイタリアとか日本とかドイツは１・５前後のところですから、このままでは人口が維持できない状態に突入しています。アジアも、韓国、台湾、タイ、香港、日本も、今、すごい勢いで少子化が進行しています。

図　主な国の合計特殊出生率の動き



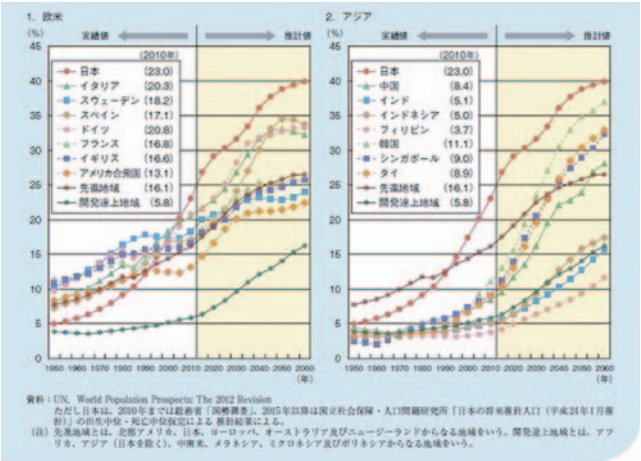
国・地域	年次	合計特殊出生率
日　本	2007年	1.34
アメリカ	2006年	2.10
フランス	2008年	2.02
スウェーデン	2008年	1.91
イギリス	2007年	1.90
イタリア	2007年	1.34
ドイツ	2007年	1.37

経済先進国の少子化



アジアでも進む少子化

少子化が進行すると何が起こるかというと、現役で社会を支える人の数が減っていきます。長生きの人も増えますから、これからはアジアでも少子高齢社会が生まれつつあります。1960 年には数％しかいなかった 65 歳以上の高齢者の人口が、いまやアジアでも 10 とか 15％とかになっているわけです。



日本の高齢化

（平成 26 年版高齢社会白書）

中でも、ご存じのように、日本の場合は、人口高齢化率で見るとずば抜けて高い。65 歳以上を高齢者と言っているわけですが、全人口に占める高齢者の割合が、日本のデータですと大体 4 分の 1、つまり 25％くらいがが 65 歳以上です。子どもの人口が十数％ですから、子どもの倍くらい 65 歳以上人口がいる社会に私たちは生きているわけです。子どもの割合と 65 歳以上の割合が逆転したのはいつごろか、ご存じですか。1996 年か 1997 年くらいだと思います。そのころ、子どもの割合と 65 歳以上の割合がほぼ同じくらいになりました。それから十数年の間に、お年寄りが子どもの倍いる社会へと私たちは突入しているわけです。日本の人口予測は、2060 年に 65 歳以上が 4 割くらいになります。人口の半分くらいがお年寄りというか 65 歳以上になるという数字がある。急激な高齢社会化です。

本推計の世帯の類型		国勢調査の世帯の類型				世帯数[注)]
一般世帯	単独世帯	一般世帯	単独世帯			16,785
	核家族世帯 夫婦のみの世帯		親族のみの世帯	核家族世帯	夫婦のみの世帯	10,244
	核家族世帯 夫婦と子から成る世帯				夫婦と子供から成る世帯	14,440
	核家族世帯 ひとり親と子から成る世帯				男親と子供から成る世帯	664
					女親と子供から成る世帯	3,859
	その他の一般世帯			核家族以外の世帯	夫婦と両親から成る世帯	232
					夫婦とひとり親から成る世帯	731
					夫婦，子供と両親から成る世帯	920
					夫婦，子供とひとり親から成る世帯	1,516
					夫婦と他の親族（親，子供を含まない）から成る世帯	122
					夫婦，子供と他の親族（親を含まない）から成る世帯	431
					夫婦，親と他の親族（子供を含まない）から成る世帯	106
					夫婦，子供，親と他の親族から成る世帯	350
					兄弟姉妹のみから成る世帯	316
					他に分類されない世帯	586
			非親族を含む世帯			456
		施設等の世帯	寮・寄宿舎の学生・生徒			7
			病院・療養所の入院者			13
			社会施設の入所者			47
			自衛隊営舎内居住者			3
			矯正施設の入所者			1
			その他			39

注：世帯数は2010年国勢調査の値（単位は千世帯）．ただし，家族類型不詳の一般世帯数（85,798）は除く．

日本の所帯人数

さきほどもふれましたが、2002 年の国勢調査の結果でみると、所帯の携帯で一番多い割合を占めるのは単身所帯になっている。ただし、住民台帳の調査では核家族が多いというデータも出ています。いずれにしても、一人暮らし、あるいは夫婦のみというご家庭が、今、大変増えています。家族の形が変化し、

ケアの形も変わり始めているのです。さらに、コミュニティも昔のようではありません。近所で助け合うということが減少しつつあります。つまり、都市への人口集中や少子高齢社会の深まりのなかで、子どもや高齢者のケアをめぐる家族やコミュニティのあり方の見直しが迫られている時代に私たちは生きているのです。

こういう時代状況のなかで、今日は、ケアメンということで、男性とケアの話にこれから入っていきます。ところで、なぜ男性なのか。確かに、介護されている人のなかで大体3割くらいが男性になっていると津止先生はおっしゃっています。しかし、逆に言えば、なぜ7割がいまだに女性なのかという問題もある。この問題も考えないといけない。つまり、なぜ男性と女性とで半分半分にならないのかということです。

一方で「介護をするのに男も女もない」という声もあります。現代は、基本的に男女共同の社会ですから、原則は男も女もないというのは理解できないでもない。しかし、今までの社会で男女が置かれてきた位置についてもきちんと考える必要があると思います。仕事とか、意識のあり様、生活スタイルなどで、男女の固定的な役割が設定されてきたという問題です。女性たちは、給料面でも、昇進の面でも差別されたりしています。他方で、男性のなかには「育児や介護は女性の仕事」といまだに思い込んでいる方が少なからずいるのも事実です。特に、日本の場合だと、現在もそれが著しいわけです。

親密圏と公共圏の再編成

- 家族・親密圏の変化
- 公共圏（行政機関や企業とは異なる人と人の交流と意思決定の場）の再編成

特に（子ども／高齢者）ケアをめぐる
家族／コミュニテイの見直しの必要性

世界経済フォーラムという団体が、2007年くらいから、毎年、男女平等度の世界ランキングを発表しています。日本は、昨年発表されたデータによれば、男女平等度は世界136カ国中105位でした。このランキングで日本よりも後に来るのは、大体イスラム系の諸国です。イスラム系の社会は、宗教的に女性の社会参加を抑制していることが多いわけです。日本は、こうしたイスラム社会並みに男女平等度が低い社会になってしまっているわけ

です。

実は、1970年の段階では欧米社会と日本の社会では男女にそんなに違いがなかったのです。日本では、どうしても、「進んだヨーロッパ、遅れた日本」という考えがまだ根強いように思います。特に、男女の関係ということになると、「日本は伝統的に男尊女卑だから」というようなことがよくいわれます。しかし、歴史をみていくと、欧米社会よりもはるかに女性の社会的地位が高い社会ではないかと私は思っています。

よくこんなことを申します「ヨーロッパには、紫式部とか清少納言とか、今から1000年前に、そういう女性の作家がいましたか」と。少なくとも明治以降は、日本は家父長制型の男性優位社会がかなり続いていたのも事実です。これは、ヨーロッパなどでもそうです。フランスという国は、今は男女平等が進んでいますけれども、女性が自分の預金通帳を持てるようになったのかいつごろか知っていますか。1965年くらいにならないと持てなかったのです。家父長制ですから、財産は世帯主である男が握っていたわけです。だから、男しか預金通帳がつくれなかったわけです。スイスという国がありますけれども、スイスで女性の参政権が勝ち取ったのはいつごろからというと、国政選挙は1971年です。スイスは国民皆兵制度ですから、兵役の義務を果たす男性だけが選挙権を持てたのです。州の選挙では、全部の州の女性が参政権を持てるようになったのは1990年代に入ってからです。

男女不平等の社会というのは、世界中で、ある意味、共通していたわけです。ところが、1970年代くらいから急激に変化が起こります。男女平等でいこう、性差別はいけないという動きが本格的に始まったのです。社会参加もそうですけれども、対等な家族的責任、子育てとか介護をできるだけ男女で対等にやっていこう、しかも、それを社会が支えようというのが、1980年代くらいからの世界の流れになっているのです。これも、男性と女性の今まで役割が変化することにつながっていきます。

開発途上国も含めて1970年くらいから男女平等が共通の理念になって、政策、あるいは経済界が男女平等の動きを進める中で、多くの国が男女平等になっているわけです。しかし、どうも日本は1970年の段階でその道を取らなかったようなのです。これは、いろいろと理由があると思います。

今日、ここにおられる中には団塊の世代が多いんですけれども、団塊の世代の人たちが社会に出てくるときに、世界が男女平等の流れを歩み始めたわけです。実は、1970年代というのは、今のように世界中が不況の時期でした。経済不況の時期です。実は、欧米社会と比較すると、1970年の段階では、日本は女性が頭抜けて働く社会でした。経済先進国の中で、女性の労働力率、働く女性の割合は、1970年段階では日本はフィンランドに次いで2位でした。3位がスウェーデンです。多くの国では専業主婦が家にいて、夫が働いているというのが先進諸国のパターンだったのです。しかし、今、申し上げたように、女性は専業主婦という欧米社会では、不況の中で男性の稼ぎだけでは食えなくなってしまった。そこで、女性が働くようになります。しかも、人権という観点からの男女平等の動きも、それを後押ししました。こうして、女性が働くようになると、男女とも働く社会では、育児や介護が困難になります。そこでヨーロッパのいくつかの国がとった選択は、男性も女性も含めて労働時間を規制ということになります。女性が働きますから、行政が働く男女の家族を支援する政策をかなり積極的に進めるようになりました。フランスだと、子ども手当です。

でも、日本社会は別の道を選択しました。さきほど申し上げたように、1970年代に、団塊の世代という人口の塊が労働市場に入ってきます。実は、専業主婦割合が一番多い世代は、団塊の世代です。それまでは、女性は農業や自営業で働いていました。団塊世代になると、お父さんの稼ぎで一家が結構豊かに暮らせるようになります。女性はというと、70年代くらいから非正規のパート労働者になっていきます。男性たちは、ヨーロッパの国々が労働時間の規制をしているときに、長時間労働の仕組みの中に巻き込まれていきます。多くの国々が男女共同で社会を支える方向に展開し始めた時期に、日本はそれとは逆の方向で経済成長したわけです。男性の長時間労働の一方で、家事・育児を女性が担い、さらに女性には安いパート労働で働いてもらうという仕組みで、70年代、80年代に日本は大きく経済成長したのです。

1 「男性問題」の時代

- 1989年の伊藤の「予言」
  朝日新聞夕刊（1989年12月）などでの発言

  「ここ20年ほどの女性問題の時代に続いて、1990年代は男性問題が深刻化する」

1990年代にバブル崩壊したとき、これから少子高齢化の時代が来ることが明らかになってきました。ほんとうは、そのときにきちんと方向転換すればよかったはずです。しかし、男性の長時間労働と家のことは女性まかせ、さらに子育て終了後は、非正規の低賃金労働で女性に働いてもらうという仕組みのなかで、70年、80年代が経済成長という面ではうまくいき過ぎてしまった。いわば、この時期の「成功体験」に引きずられて、70年、80年代型の家族と労働の仕組みを、90年でも、21世紀になってもずっと続けてきてしまったのではないかと思います。不況のなかで、企業は賃金を抑制し、むしろ、女性の非正規労働者が増えていますし、現在では男女を問わず若者が非正規労働化している。企業が自分の経営を維持するために、女性と若者にしわ寄せがいくという構図が、現在、起こっているわけです。いずれにしても、70年代、80年代以後は、世界中の多くの国々が男女平等の方向に動いてきたのですが、日本はあまりそうした変化を創り出さなかったたわけです。

1989年に、ある予想をしたことがあります。70年代、80年代に国際社会では女性差別撤廃の動きが進んできて、女性がいろいろな形で社会参加するようになっていく、女性問題はこれからまだまだ深まるだろう。そんな流れの中で、1990年代になると男性問題が顕在化するだろうという予想を、89年の朝日新聞の夕刊で語らせていただいたことがあります。女性がどんどん社会参加していきます。そうすると、先ほど言ったような、いろいろな家族の問題の登場のなかで「あなたも家のことをやりなさいよ」ということが、女性側から当然、出てくるだろう。つまり、男性に対する変化を促す動きが女性から来るだろうと考えたのです。それと同時に、先ほど言ったように、産業の仕組みや家族の仕組みの変化の中で、男性がいろいろな矛盾を抱えることも顕在化してくるのではないかと分析しました。

さきほどのランキングでみても、日本は、いまだに男性主導社会です。しかし、男性も、男性主導社会の中でいろいろな問題を抱えていくことが、90年

代になると出てくるのではないか。こうした予想を 25 年くらい前に立てました。女性差別撤廃の裏側に「男性問題」の深刻化が生ずるのではないかという予想です。この予想は、けっこう当たったのではないかと思っています。

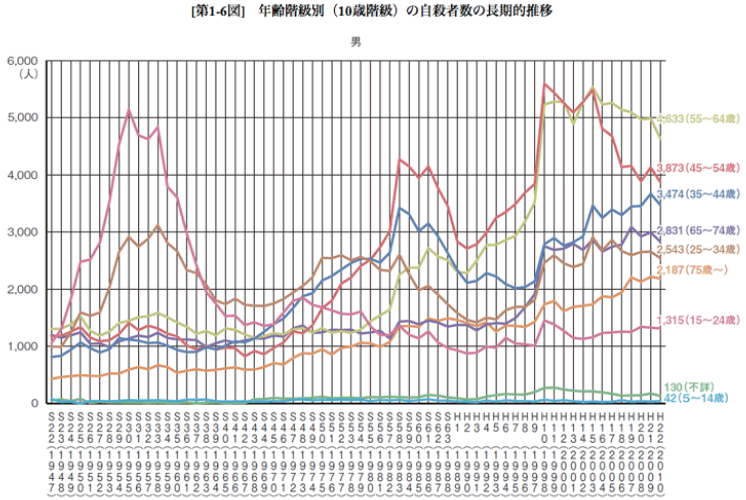
過労死時代の開始

- 1980年代後半　過労死（後にKaroshiと英語でも使用されるように）
- ほとんどが男性
- 「男らしさの鎧」
  弱音を吐くな、感情を表に出すな、問題は人に相談せず自分で解決せよ

なぜ、男性が問題を抱えるようになるというふうに予想したかというと、その理由のひとつは過労死問題の登場です。今、大きな英語の辞書では「KAROSHI」という言葉が出てきます。「働き過ぎによる死。日本で起こったこと」というふうな解説付きで出てきます。過労死は今や国際的に通じる日本語です。K の付く 3 つの言葉が世界に通用する日本語になっているという説を聞いたことがあります。カラオケと、（企業の）系列と、過労死です。系列は、国際経済の領域においてはとても有名な言葉で、この 3 つの言葉は世界でも使われる日本語であると聞いたことがあります。

先ほど申し上げたように、男性の長時間労働は、1970 年代後半から 80 年代にかけて急激に拡大します。1970 年代半ばに週 60 時間以上働いた男性は、350 万人くらいいると言われています。1980 年代後半には 750 万人くらいになっています。多分、今はもっと多いのではないかと思います。今でも、30 代の働く男性の 20％から 25％くらいは週 60 時間以上働いています。とんでもない長時間労働の社会です。そんな中で、過労死が起こります。女性の過労死も最近はちょっと報道されていますけれども、ほとんど男性です。男性たちは、小さいときから弱音を吐くな、泣くな、感情を表に出すな、問題は人に相談しないで自分で解決しようと言われています。これは、ケアメン問題とも絡んでいると僕は思っています。男性の多くは、仕事がつらくても我慢しようと、耐えて、無理をします。人に相談しないで、無理を抱え込んで、体を壊すこともある。ときには亡くなっていきます。特にバブル崩壊後は、男性たちが置かれている社会における、男はこうあるべきだという仕組みが男性を苦しめていることが、だんだん明らかになっていきます。男らしさの鎧です。男性の多くはや

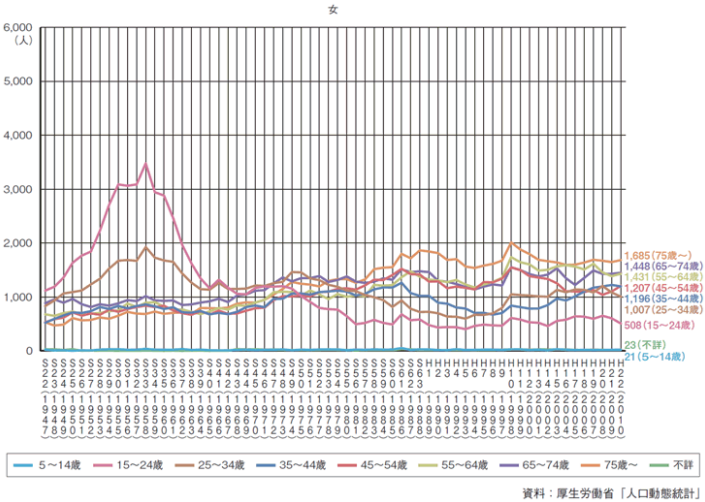
はり鎧を着ている、周囲に対していつも身構えているのです。



中高年男性自殺の急増

（厚生労働省「人口動態統計」）

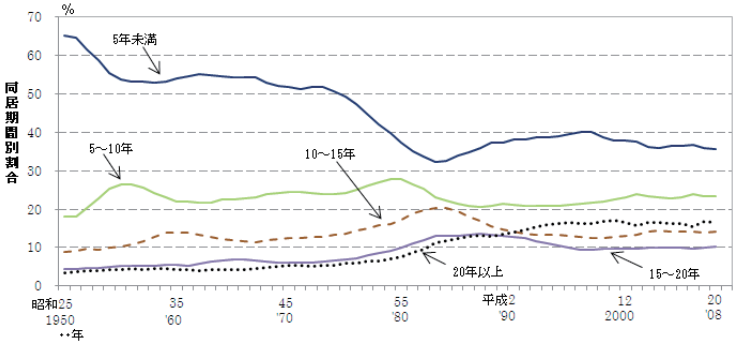
自殺の問題もそうです。1947 年から 2010 年までの男性の年代別の自殺死亡率をみると、1960 年前後には、20 前後の若い世代の自殺が目立ちます。当時の日本は、若い世代の自殺がとても多い国として有名でした。『アカシアの雨がやむとき』という歌は、確か 60 年安保の後で、若者の自殺を、ある意味暗示するような歌詞でした。この時期は若い女性も自殺数が多い。しかし、若者の自殺はだんだん減っていきます。他方で 1997 年くらいから、突然、上がっている世代の人々がいます。50 前後の男性の自殺死亡率です。1996 年に書いた『男性学入門』という本で、これから中高年男性の自殺が増えますという予想をしました。実際にちょっと増え始めていたんですけれども、ちょうどその頃、いのちの電話に相談をしてこられる中年男性の数が急増したというレポートを読んだ。だから、これから中高年男性の自殺が増えるぞと言っていたのですが、実際に増え始めたのは 1998 年からです。



女性はそれほど増えていないのに

ちなみに、1960年代は女性の若い世代の自殺率も高かったのですが、1990年代末、中高年男性の自殺率の急上昇のときには、中高年女性の自殺死亡率はほとんど変化がありません。つまり、この時期、女性と比べてはるかに多くの男性たちが、社会的なプレッシャーの中で自殺に方向付けられていったということが読み取れるのではないかと思います。もちろん、背景に不況という問題があります。と同時に、男は弱音を吐けない、人に相談しない、家族にも相談しない、全部、自分で抱え込んで、抱えきれなくなって最後のところで死へ向かってダイブするということがあったのではないかと思います。

図９　同居期間別にみた離婚の構成割合の年次推移　－昭和25～平成20年－



20 年以上同居夫婦の離婚の増加

（厚生労働省統計調査平成 21 年度版より）

離婚も、日本で一番多いのは結婚５年までの離婚が多いんですけれども、全体として昔と比べると減っています。他方で、20 年以上連れ添われた方の離婚が、90 年代くらいから増えていきます。急激というほどではないですけれども、ほかのところと比べると明らかに増え始めています。これが、いわゆる熟年離婚とか定年離婚といわれるものです。離婚というのは、裁判所の離婚調停の記録などを読むと、７割は女性が言い出す形になっています。離婚ということになると、脆いのは男性のほうです。定年離婚された男性は、男性の平均寿命よりも 10 年前後、早く亡くなると言われています。それは、身の回りのことが自分ではできないということもあるだろうし、男性のほうが一人になることに耐えられないんです。これは後で申しますけれども、孤立化しやすいという問題もあるかなと思います。

また、90 年くらいになると、夫が定年後に、夫在宅ストレス症候群が妻たちに起こりやすいということが、女性を対象にしたカウンセラーの中で出始めます。僕は、2003 年に NHK のテレビ番組の『人間講座』で８回ほど男性問題の講座でしゃべりました。その第１回に、この本の紹介をしました。『夫が定年妻はストレス』という、夫在宅ストレス症候群の本です。そのときは絶版になっていたのですが、NHK に「あの本を買いたい」という声が寄せられて、急遽、新しいバージョンで売り出すことになりました。新装版と書いてありま

すが、高齢社会の男性問題を書いた本を出して売り出したわけです。定年後に家に夫がいると、妻が気詰まりになってしまいがちです。なぜかというと、夫が家にいると気を遣います。外出するのも、食べるものも、いろいろなところで気を遣って、気詰まりになって、ストレスになって、病院通いにもなります。女性も気の毒だと思いますけれども、残された男性もショックだろうと思います。多くの方たちは、DV で妻を殴っているとかそういう話ではなくて、家で新聞を読んだり、テレビを見たりしています。そういう男性の日常生活が、家にいらるだけで最愛の妻を病気にしてしまう。長時間労働のなかで、夫婦間のコミュニケーションとか、親子のコミュニケーションが奪われてきた男性たちの問題が、そこには映し出されているのではないかと思います。

問われる男性の自律・自立

（女性に対して）いばりながら甘えてきた男性たち
妻が居ないと何もできない／わからない
妻に先立たれると後を追うように亡くなる男性

- 男性の生活自律　自分の身の回りのことは自分でできる力を
- 「女性」からの精神的自立
  支配することなくたくましく！

だからこそ男性の自立が必要です。私も男性なので言いにくいのですが、やはり男性たちは、女性に対して、どこか威張りながら甘えてきたところがあるのではないかと思うんです。女性に対しては威張った態度をとっている一方で、甘えてもいるんです。ドメスティックバイオレンス・DV が、最近、問題になっています。DV というのは一方で女性に対して威張っている男性の問題が背景にあります。俺が主人だと言って殴ったりするわけです。でも、威張っているだけではなくて甘えている部分があるのではないかとも思います。アメリカのドメスティックバイオレンスの啓発ビデオを見ると、男性が「I love you」と言いながら妻を殴っているシーンが出てきます。「I love you」ですよ「俺は、おまえを愛している」と言いながら殴るんです。これは「I love you」ではないと思います。「Love me please」なんです。「おまえは妻だから、俺のストレスを、全部、吸い込んで、俺の心を癒やしてくれ」と言いながら殴っている。女性に対して威張っているだけではなくて、とんでもなく甘えているんです。妻がいないと何もできなくて、妻に先立たれると跡を追うように亡くなる男性が結構おられます。他方で、女性の方は、夫に先立たれても、

結構、長生きされる方はいっぱいいる。妻に先立たれると脆い男性が多い。威張っていながら実は精神的に女性に依存しているのです。ここにおられる男性たちは、そんなことはないと思いますけれども。

男性の生活の自立が問われています。自分の身の周りのことは自分でできますか。いろいろな部分で、妻任せで依存していることから、精神的に自立することが高齢社会のこれからの時代には特に求められているのではないでしょうか。このことは、20年前からずっと言い続けていることです。「支配することなくたくましく」。これは、ドイツの男性たちのグループのスローガンです。さきほどの「威張りながら甘える男性」と関係させれば、「威張らず、甘えず」と言い換えてもいいかもしれません。これは、もちろん女性にも言えることだと思いますけれども、現代の日本の男性にとっても「支配することなくたくましく」というのは、すごくいいスローガンだと思います。

できない男からできる男へ

伊藤公雄　小学館　2002年

これは、ちょっと皮肉っぽいタイトルなんですけれども、2006年に小学館から出した本に『「できない男」から「できる男へ」』があります。つまり、男性のなかには、身の回りのことができないことを威張る人がいます。「育児なんか、男の仕事じゃない」とか「介護は女性がするべきだ」とかいう男性もいます。これは、ちょっと変ではないかということです。食事とか、預金通帳とか、買い物とか、洗濯とか、基本的なことができないことを威張っているわけですから。「俺はできないぞ」と威張って言っている。むしろ、これからは生活面でできることを誇りに思うような生き方を、これから男性はしていったほうがいいのではないかという意味合を含めた本です。育児とか介護も「俺は、男だからできない」ではなくて、むしろ男として「やるぞ」という方向転換が必要なのではないかと思っています。

自立は「孤立」ではない

- 自立は、「他の人の助けは受けない」ではない
  それでは「孤立」
  人間は一人では生きられないし、完璧でもない
  それぞれの人の一定の自立と相互の助け合いの重要性

ただ、自立というと「俺は自立しているから、人のことは知らん」という人がいるんですけれども、それは自立ではなくて孤立です。人間は、やはり一人では生きられません。単身所帯の一人暮らしの方であっても、一人では生きられないんです。人間は完ぺきではありません。一定程度、自立できるといっても、完ぺきを求めても無理です。大体、男性も、女性も、誰にも完全な自立なんてできません。自立を求めるながら、周りの人と助け合う。その方向が人間の自然な自立の方向ではないかと思います。

男性たちも、今までの威張りながら甘えるというスタイルから、もうちょっと変わっていくことが、これから10年、15年の中で求められているのではないかと思います。しかし、日本の男性たちはなかなか変わりきれない。以前は、日本だけではなくて世界中の男性が、女性に対して威張りながら甘えていたわけです。ただ、先ほど申しましたように、70年代、80年代に女性が社会参画をするようになると、女性たちが男性たちに「もうちょっと家のことをやったらどう」と言い始めます。男性たちも、そうした声に対応して変化をし始めます。欧米で男性たちが家事や育児を始めるのも1970年代のことです。もちろん、それまでは大体が専業主婦ですから、家のことは妻が全部やっていたわけです。でも、70年代、80年代になると、欧米社会の多くの国々で男性が変化していきます。もちろん、幾つか例外もあります。南欧社会です。私は、一応、イタリア社会研究もやっています。イタリアの男性は日本の男性よりも家事・育児をしないのではないかと思います。スペイン、ギリシアなどの国々では、女性の社会参加は日本よりも遅れています。また、男性が家のことをしない社会でもあります。イタリア、スペイン、ギリシアといって何か気付いたことはありませんか。今、経済危機に陥っている国です。南欧社会は女性社会参加が、日本よりもはるかに抑制されています。男性の家事参加も、日本と同じような状況なのです。

先ほど、世界経済フォーラムが男女平等度のランキングを発表していると申

し上げました。世界経済フォーラムがどういう団体かご存じですか。世界の経済学者とか経営者とか政治家が集まって、年に1回、スイスのダボスというところで会議をやります。今年は安倍総理が行って、日本の総理として初めて基調講演をやったといって、ちょっと話題になりました。何を求めている団体かというと、世界の経済成長を求めているわけです。どうやって世界経済を安定して成長させるかが課題なのです。そこが、なぜ男女平等度のランク付けを発表しているのか。それは、男女平等度が進んでいる国のほうが経済成長しているからです。南欧社会は男女平等に失敗したので低迷しているという説明もされています。実際に世界経済フォーラムがデータを出しているんですけれども、男女平等度と一人当たりのGDPが右肩上がりで相関しています。男女平等が進んでいる国のほうが一人当たりのGDPが上のほうになっています。日本は、男女平等ではないのに結構上です。それは、70年代80年代の貯金があるからです。今はまだ上のほうですけれども、これからどんどん落ちていくのではないかと思います。それは、経済の問題です。今の総理大臣の安倍さんは、5～6年前までは男女共同に大反対だったのですが、今は女性の活躍を第3の柱にしています。なぜ柱にしているかというと、世界の流れがそういう認識になっているからです。女性の活躍がないと経済成長が維持できない、経済成長が見込めないというのが世界の流れです。

男性の自己変革にむけて

- 男性の気づき、認識、体験、さらに気づきの連続のなかで男性自身の変化をうながすことの重要性

ただ、女性だけが変わっていっても困るので、男性も変わらなければいけないわけです。特に少子高齢社会の中で、これからの日本の社会をどう考えるかというときには、男性が変わらなければならない。しかし、チャンスがないと、男性はなかなか気付きません。これも男性研究の中でよく言われることですけれども、女性と比べて男性は変化に弱いといわれています。それは、社会が男基準でできているので、あまり壁にぶつからなくて済んでいるからです。よほど個人的な失敗がなければ、男のルールに乗ってい

れば男の人は大体うまくいく。逆に、男主導社会ですから、女性たちはさまざまな変化に直面します。例えば、進学するときに「おまえ、女なんだから、大学になんか行くな」と言われる。こうした傾向は、いまだに女性にはあります。私は、今、京都大学で教えていますが、いまだに京大の女子学生のなかで、「京大を受験する」と言ったときに、親せきに「そんなところに行ったら、結婚相手がいなくなる」と言われたという話が出てきます。でも「偏差値の高い大学に行くと結婚できなくなるぞ」と、男の子に言いますか。女の子だけには「偏差値の高い大学に行くと結婚できなくなるぞ」と言うんですよね。男の子には、むしろ「偏差値の高い大学に行ったほうがいい嫁さんをもらえるぞ」となるわけです。このように、女性たちは人生のいろいろなところで、男社会の壁と衝突します。進学するとき、就職するとき、さらに、結婚して子どもができたらどうするか、こうしたことをいつもを考えながら人生を送っているわけです。結婚して子どもができたらどうするか、仕事を辞めるか、続けるか、いろいろな人生の節目、節目で、女性は変化を求められます。結婚で名字が変わったりもするわけですからね。他方、男性の方は名字も変わらないし、パターン化した世界で生きていけるわけです。だから、こうしたパターンの中で生きている男性が変化に直面すると、すごく脆くなってしまいます。女性は、いろいろな節目、節目で変化に対応しながら生きていますから、男性に比べると変化に強いと言われていますけれども、実際に、そういうところがあるのかなと感じています。

では、どうしたら男性は変われるのか。まず第一に問題に気が付いていただくということが必要です。次は認識してもらいます。それこそ、男女平等のほうが経済が発展するといった議論があるんだということを認識してもらって、なぜなのかその理由を考えてもらう。その上で具体的な体験をしていただきます。ちょっと家のことをしてみようか。食事を作ってみようか、とかですね。こうした体験をすると新たな気付きにつながる。そこでまた引き続き考えてもらう。さらに、体験してもらう。そんな具合に螺旋的に、男性自身が変わっていく方向をつくっていかなければならないと思います。人間なんて突然変わりません、少しずつしか変わっていけないです。先ほど、男らしさの鎧が男性を苦しめていると言いましたけれども、この鎧も一遍に脱いだら風邪を引きます。

脱ぐときは少しずつ脱いでいかないといけない。しかし、男性自身がこれから変わっていかないと、21 世紀の日本の社会が維持できないような状況になってしまうのではないかと、私自身は思っています。

2　広がる男性介護

- 育児はあんまり･･･でも、介護は･･･
- 必要（家族の形の変化／男女両性に求められる家族的責任など）に迫られつつ、広がる男性介護

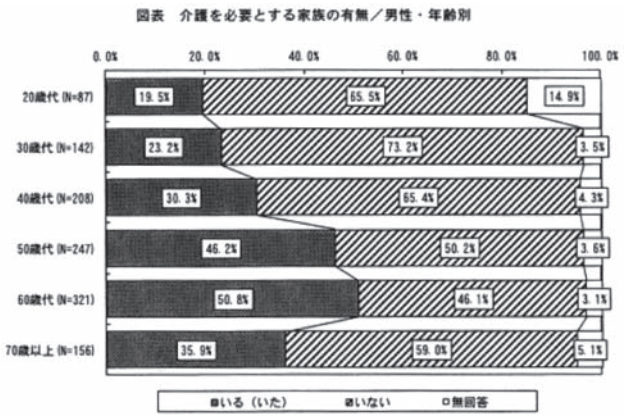
今日は、ケアメンサミットということです。男性の介護の問題にうつりたいと思います。育児と違って、先ほど津止先生がおっしゃったように、介護の 3 割くらいは男性が担うようになっています。背景には、先ほどから申し上げたように、家族の形が変わってきたということがあります。また、男女両性に家族的責任が求められる時代に入ってきました。そんな中で、男性介護が広まっているんだろうと思います。

アンペイドワークという言葉があります。アンペイドワークというのは、働いているんだけれども、お金を払われない労働のことです。1980 年に ILO・国際労働機関が大変面白いデータを発表しました。当時の男女不平等の状況を示す推計です。世界の労働という労働、つまりペイドワーク、お金が払われている賃金労働と、アンペイドワーク、お金が払われない労働をすべてあわせてみる。家事や育児、介護は多くはアンペイドワークで、しかも女性に担われてきた。そこで、ペイド、アンペイドを含めてすべての労働を男女で考えたらどうなるのか。そうすると、世界の労働の 3 分の 2 は女性が担っているということになった。男は 3 分の 1 しか担っていなかったのです。しかし、世界の 3 分の 2 の労働を担っている女性がどれくらい賃金をもらっているかというと、世界の総賃金の 5％くらいしかなかった。9 割以上を、3 分の 1 の労働しかしていない男がもらっていたのです。さらに、資産となると、世界の総資産の 1％しか女性は持っていない。これが、1980 年の段階の ILO の推計でした。今は、もちろん、そうではないと思います。けれども、家事・育児とか、介護とか、開発途上国で水をくみに行くとか、いろいろな労働、特に支払われない労働のほとんどを女性が担っていたわけです。

アンペイドワーク

・アンペイドワーク
　家事、育児、介護さらに無償ボランテイア等
アンペイドワークは人間の生活にとって不可欠
家族の変化の時代だからこそ
　男女両性による分担の重要性

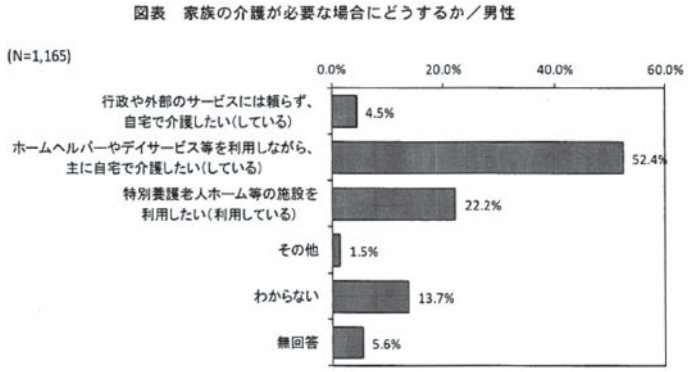
アンペイドワークをどう見るかは、すごく重要なことだと思います。以前、男女共同参画のシンポジウムで、終わった後に、フロアとの意見交換の中で、ある男性の方が手を挙げてこんなことをおっしゃったことがあります。「あなた方は専業主婦の労働をばかにしているではないか。専業主婦の家事や育児や介護、こんな尊い労働をしている人たちをあなた方はばかにしているのか」とおっしゃったんです。私は、男女問わず専業主婦・主夫というのは選択肢だと思っていますから「専業主婦をばかになどしていません」とお答えしました。と同時に「おっしゃるように、家事・育児・介護は、すごく重要な仕事、尊い労働だと思います。ところで、あなたはこの尊いことをやっておられますか。尊いと思っているんだったら、当然、やっているのでしょうね」とお尋ねしました。多分、何もされていない方だっただろうと思います。家事や育児、介護など多くのアンペイドワークなしでは、人間は存続できない。大切な労働です。でも、こうした尊いはずのアンペイドワークを、なぜ女性だ



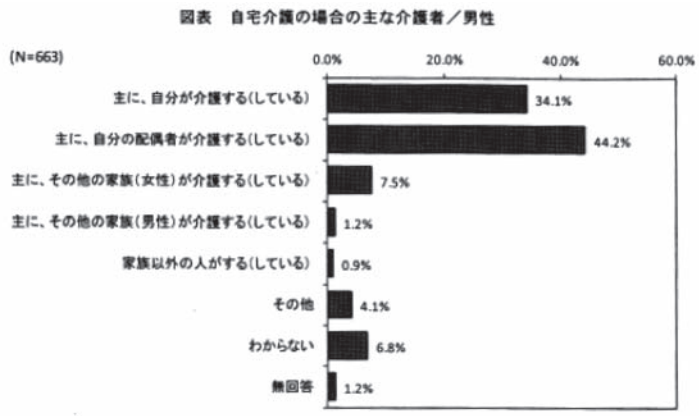
介護の必要な男性（滋賀県）
（滋賀県男女共同参画についての意識調査（平成 25 年）より）

けが担ってきたのか。尊いと分かっているのに、なぜ女性だけが担うのかという問題に、男性たちは気が付いたほうがいいのではないかと思います。

介護の労働は支払われない労働だけれども、尊い労働だということは十分に認知されていると思います。しかし、尊いと認識しながら、その労働は自分の労働ではないと思っておられる男性の方が、残念ながらまだまだ多くおられるのも事実だと思います。



介護をどうするか



誰が介護を

（滋賀県男女共同参画についての意識調査（平成 25 年）より）

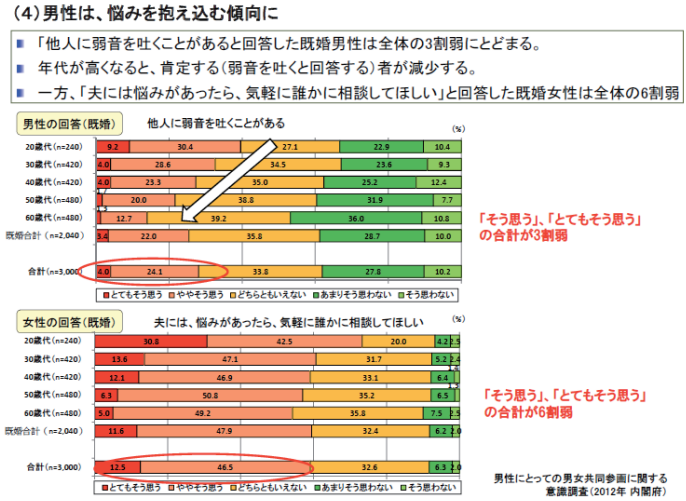
ただ、先ほどから言われているように、育児と違って男性の介護は増えています。2013年、昨年やった、滋賀県の男性の意識調査によれば、50代、60代を中心に大体5割近くが「家族に介護が必要な人がいる」とこたえています。介護をどうするかという問いには、公共サービスに頼る、ホームヘルパーやデイサービスに頼むという人が多い。特別養護老人ホーム等の施設を利用したい、あるいは利用するという方も2割おられます。自宅で介護というのは4.5%しかおられません。自宅介護の場合、誰が介護するかというときに、自分が介護するという男性が34%おられました。やはり、女性のほうがまだ多いです。44%の方が「妻がしている」と言っている。でも、3分の1強の人たちが「男性が介護する」とこたえておられるのです。男性の介護は広がりつつあります。ただ、今、見ていただいたように、まだ女性が介護を担う傾向は強い。

男性介護のために

- まだまだ少ないロールモデル

- 男性の生活自立能力不足
- 「男らしさ」の鎧の問題
- 他人の助けが借りられない男性意識

なぜ、男性介護が進まないのか。これは、皆さんにとっては釈迦に説法の話ですが、まず第一に、ロールモデルがまだまだ少ないからです。男性たちの身近に介護をする男性の姿があまり見られない。だから、どうやったらいいか分からないという方たちが、まだまだおられるんです。また、料理ができない、買い物ができないということもある。以前、NHKの番組で男性の家事の問題の番組のコメンテーターをやったことがありました。京都の、あるお子さんがおられないご夫婦が、1日だけ妻と夫の役割を交換するという番組でした。とても仲のいいご夫婦だったのですが、家事を一日引き受けることになって、男性が一番困ったのは何だと思いますか。買い物だったんです。スーパーマーケットに入ったら、居づらくて、居づらくてたまらなくて、ぱぱっと買って、すぐに出てきてしまった。「あんなところにいたくない」とおっしゃっていました。慣れれば簡単なことなんです。しかも、できないはずがない。やればできるはずです。でも、男たるものそんなところにいたらおかしいと、自分を決めつけてしまっているのでしょう。

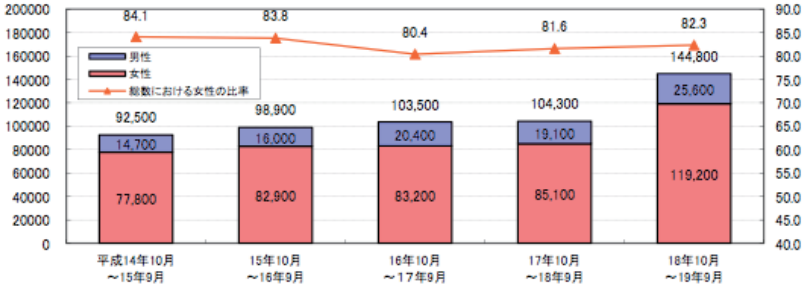


悩みをかかえこみやすい男性

もう一つは、他人の助けが借りられないということもあります。男性は、困っても「俺は男だから、一人で全部、解決しなければいけない」と思ってしまいがちです。何度も言いますけれども、人は一人では生きられない。周りのいろいろな支援を受けないとやっていけないのです。しかも、これからの高齢社会が本格化していくにです。なのに、他人に頼んだり、相談したりすることができない人が男性のなかにはおられる。私が座長で、内閣府でやった調査があります。全国の男性に対する初めての徹底した意識調査だと思います。一方で、女性も同じような調査をしています。女性からみた男性に関する調査です。2012年にやった意識調査です。調査の結果が示すところによれば、「他人に弱音を吐くことがある」という男性の割合は、女性たちと比べてきわめて少ない。妻は、夫に悩みがあったら気軽に相談してほしいと結構おっしゃっている。でも、他人に弱音を吐く男性は、50代、60代を中心にすごく少ない。これについては、後で京都市の今井さんから男性相談のお話があると思います。悩んでいてもなかなか人に言えない男性たちに、どうやって心を開いていただくか。これを政策的に進めることも、これからは求められつつあるのではないかと思っています。

今、男性相談が、各地方自治体で動き始めようとしています。もう始めているところもあります。私は、ここ数年ほど、内閣府による地方自治体の男性相談マニュアルの作成のための委員会の座長もしてきました。どんなところに男性が壁を感じていて、どういうアプローチで男性のお話を聞いてあげて、男性たちがより生きやすい生活に持っていけるのか。今、そのマニュアルがほぼ完成しています。

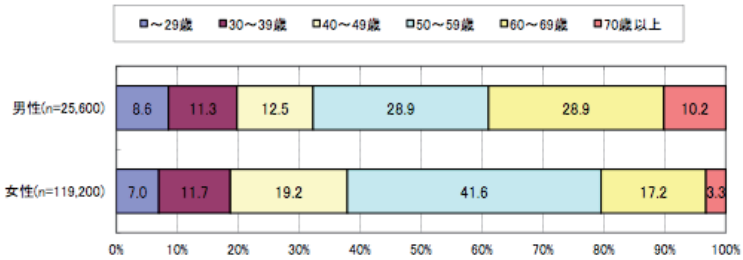
【図表3-1-24 介護・看護を理由に離職・転職した就業者数】



資料：総務省「就業構造基本調査」（平成19年）
（注）複数回離職・転職した者については、前職についてのみ回答しているため、前職以前の離職・転職については数値に反映されていない。

増加する介護退職

【図表 3-1-25 介護・看護を理由に離職・転職した人の年齢構成割合
（平成 18 年 10 月～19 年 9 月に離職・転職した人）】



資料：総務省「就業構造基本調査」（平成19年）

介護退職問題

【図表 3-1-26 介護期間中に仕事を辞めた経験がある者の、勤務先を辞めたきっかけ】

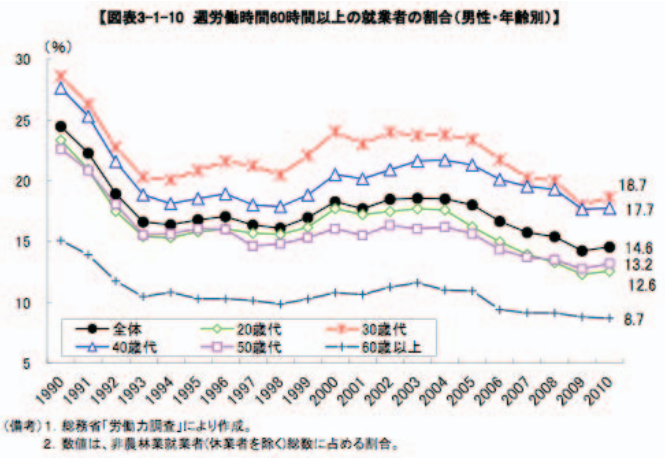
（在職者－転職組・離職者のみの設問）

在職者－転職組	合計（n）	当時の勤務先では労働時間が長かったため	当時の勤務先では出社・退社時刻を自分の都合で変えることができなかったため	当時の勤務先では介護休業を取得することができなかった／取得しづらかったため	当時の勤務先では在宅勤務を行うことができなかったため	自分の意志で介護に専念しようと思ったため	仕事と介護の両立がむずかしかったためではない	非該当
	815	46.3%	44.9%	30.1%	22.5%	18.9%	12.9%	109
離職者	合計（n）	自分の意志で介護に専念しようと思ったため	当時の勤務先では介護休業を取得することができなかった／取得しづらかったため	当時の勤務先では出社・退社時刻を自分の都合で変えることができなかったため	当時の勤務先では在宅勤務を行うことができなかったため	当時の勤務先では労働時間が長かったため	仕事と介護の両立がむずかしかったためではない	非該当
	949	40.3%	27.5%	26.1%	23.0%	22.0%	7.6%	0

（出典）みずほ情報総研株式会社「平成 21 年度仕事と介護の両立に関する事業把握のための調査研究事業報告書」（平成 22 年 3 月）
調査対象者 ①全国の 30 歳～64 歳までの男性・女性
②本人または配偶者の家族に 65 歳以上の何らかの介護が必要な家族がいる（居住地は問わない）
③本人がその家族の介護を行っている（自らが「介護を行っている」と考えればよい）
の3条件をすべて満たした者を調査対象としている。

介護退職の理由

これは女性もそうなんですが、現在、育児の問題と同時に介護問題が大きな問題になりつつあります。その理由の１つは、介護退職、あるいは介護転職が増加しつつあるからです。介護で転職や離職をした人は、50 代から 60 代が圧倒的に多い割合になっています。しかも、介護退職の理由は、会社が長時間労働だったり、会社が自分の介護時間を確保してくれなかったという回答が、5 割くらいあります。こういう方は結局､転職をされることになります。つまり、これまでの職場では介護できないので、より介護しやすい職場に転職されるわけです。これは、男女含めかなりおられます。背景にあるのは、日本の企業の働き方の問題、働かせ方問題です。辞めた人たちは、介護に専念しようとしています。辞める方の圧倒的多数は女性だと思います。辞めさせられたという人もかなりいる。こうした方は、介護休業が取れなかったり、会社の仕組みが介護を許さないという状況で辞めさせられているわけです。個々人の意識も問題でしょうが、それ以上に、やはり働き方や社会の仕組みから変革していかなければいけない部分が、日本の社会にはまだまだあると思います。



1990 年代から現代の男性労働

先ほども紹介しましたが、週 60 時間労働の男性の年齢別の割合です。一番多いのは 30 代です。1990 年の段階だと、30 代男性の 3 割近くが週 60 時間以上働く状況に置かれています。もっと言うと、50 代、20 代、30 代、40 代も、25 ～ 30％くらいは週 60 時間以上働いています。週に 60 時間以上働いて、子どもとの会話や妻の会話の時間が確保できると思いますか。日本の男性たちは、こういった働き方をさせられてきたわけです。その反対側に、急激な経済成長という果実があったのも事実ですけれども、果実の一方で、大切な家族との会話の時間が奪われたり、関係がまずくなったり、そういうカップルや親子も多々あったのではないかなと思います。

（男女の）介護のために

- 意識の問題だけでは解決しない
- 労働の仕組みの見直し
- 家族的責任と労働の共存の制度設計を

介護の問題は、意識の問題だけでは解決しない。労働の仕組みを見直さなければいけないし、家族的責任と労働のバランスを保証する仕組みづくりが必要なのです。介護せざるを得ない、ケアをせざるを得ない男女の働く人たちに、仕事と家族的責任がバランスよく担えるような働き方の仕組みを準備していくことがすごく大切なんです。家族的責任条約というものがあります。ILO の 156 号条約です。日本は 1995 年に批准しました。この批准によって、育児休業法、介護休業法ができました。でも、日本の育児休業と介護休業の仕組みは、まだまだ十分に安心してできる仕組みにはなっていないところがあります。これからはその辺の制度設計が必要だと思います。

ただ、社会の仕組みを変えるとともに、自分たちでやれることもあります。中でも、これから家族や地域社会、さらに職場を、よりよい方向にも変わっていくには、より良い男女のコミュニケーションが必要ではないかと思っています。というのは、男女のコミュニケーションは、さまざまな部分ですれ違っているからです。

3　コミュニケーションの重要性

- すれ違う男女のコミュニケーション
- 「要件」のみになりがちな男性
- 「共感」を大切にする女性のコミュニケーション

男性の方、女性の方の集まりで、一緒に話し合ってもらうことがあります。例えば、介護のことについて男女入り交じってしゃべってもらう。あるいは「男が得か、女が得か」そういう話を男女入り交じってしゃべるような形です。そうしたワークショップを何度かやったことがあります。終わった後に感想を聞くと、どこもみんなほとんど同じことをおっしゃるのです。男性の方が、女性と一緒に議論をすると、どんなふうに感じると思いますか。どこでも男性がおっしゃるのは「話があちこちに行って、いらいら

する。なぜ女の人は話があちこちに行くのか」です。逆に女性の方に聞くと、本当に皆さん同じことをおっしゃいます。「すぐに結論を求めたがって、みんなと同意を取ろうとしない」。

確かに、男性のコミュニケーションは、しばしば要件のみになりがちです。すぐに、結論を求めたがるんですね。他方で、女性は、他者との共感を求めるコミュニケーションになりがちです。職場で女性の部下が男性の上司に相談に行くと、男性の上司はどう対応するか。上司ですから「これは、こうしたらいい」と、すぐに結論を言ってくれます。男性上司は、それで相談に乗った気になっています。でも、女性の部下は相談に乗ってもらったという気持ちになれません。なぜなら、結論しか言ってもらっていないからです。夫婦でもそうです。「お父ちゃん、太郎が学校でこんなことがあったんだよ」と妻が言うと、「これは、こうしたらいい」とすぐに結論をいいたがります。夫の側は、それで相談に乗ってやったと思っている。でも、妻はの方は、納得していません。なぜかというと、彼女たちが求めているのは一緒に問題を共有して考えてほしいということだからです。部下が相談したときに、結論を言う前に「そんな大変なことだったのか。それは大変だったな」と、そこから入らなければいけないのに、結論だけを言ってしまいます。子どものことを相談したときに「えっ、太郎がそんなことがあったのか。一緒に考えよう」と、そこから入ればいいのに「それは、こうしたらいいだろう」と、結論だけをおっしゃるわけですね。

人のつながりの重要性

- 人は一人では生きられない
- 助け合いのなかでの自律／自立
- 助けを求められない男性たち

これから、女性が社会参加を拡大するには要件のみのコミュニケーションも必要になります。しかし、特に家庭生活とか地域生活になると、用件ではなく他者と共感するコミュニケーションの力が必要になるのです。だらだら無駄話ができるとか、話があっち行ったりこっち行ったりしても平気で聞いていられて、しかもそれに合わせられる力が必要なんです。でも、男性たちは用件と結論のみのコミュニケーションに慣れていて、共感型

のコミュニケーションが苦手な方が多い。家庭や地域では、用件型ではなく、共感型のコミュニケーションが求められているんですけれども、そのトレーニングがないんです。

繰り返しますけれども、これからの高齢社会は、人のつながりがすごく重要です。人のつながりは要件と結論の会話ではつながりません。自立していくときに、助けを求める力は、要件や結論のみのコミュニケーション力では対応ができない。弱音を吐きながら「困ったんだけれども、ちょっと助けてくれないか」、男性には、これがなかなか言えないわけです。これが言える力、これは力だと思うんですけれども、その力がないんです。

厚労省調査

高齢単身男性、会話少なく

「2週に1回以下」16%

65歳以上の単身者の会話頻度

2週に1回以下 16.7
4~7日に1回 15.1
毎日 50.6
2~3日に1回 18.3
男性
3.9
8.4
24.9
5.8
女性
※四捨五入のため合計が100%にならない場合がある

1回以下」が65歳以上の一人暮らしの男性で16・7%にとどまることが24日、分かった。同様の女性では3・9%に。単身男性の社会的な孤立が際だっており、高齢社会が抱えている課題が浮き彫りになった。

調査は国立社会保障・人口問題研究所が2012年7月に実施した「生活と支え合いに関する調査」。全国の2万6262人に調査票を配布し、有効回収率は60・6%。ただし東日本大震災の影響で福島県では実施していない。

「普段どの程度、人（家族を含む）と会話をしますか（電話も含む）」との質問に「毎日」と答えた単身高齢者は48・6%。「2～3日に1回」が18・3%、「4～7日に1回」が15・1%、女性は4・5%だった。

厚労省の国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、12年の一人暮らしの高齢者数（推計）は男性が2万人で、女性は15万人だった。

厚生労働省の研究所の調査。単身の会話の頻度を聞いたところ、最も少ない「2週間に1回以下」が16・7%だった。

さう程度の会話や世間話をしますか（電話も含む）」との質問に「毎日」と答えた単身高齢者は48・6%。「2～3日に1回」が18・3%、「4～7日に1回」が15・1%、女性は4・5%だった。

厚労省の国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、12年の一人暮らしの高齢者数（推計）は男性が2万人で、女性は15万人だった。

一方、現在の生活水準を5年前と比べて「かなり豊かになった」と答えたのは男性9・1%、女性8・6%、「豊かになった」は男性30・5%、女性26・1%に上った。

単身高齢男性と会話

（京都新聞、2013年7月25日）

要件のみのコミュニケーションは男性にとっても不幸です。厚労省の研究所が調べた調査ですが、一人暮らし高齢者男性のなかで、2週間に1回も人と会話をしない人が16%もいるんです。何と、半分くらいの一人暮らし男性は、他者との会話が、せいぜい2～3日に1回という程度です。何が原因かというと、男性たちは、無駄話はよくない、要件がないとしゃべってはいけないと思っているからです。男性たちが身構えて、弱音を吐けない体制は、周りの人にとっても「いつも不機嫌で」ということになりなります。でも、男性自身にとって

も結果的に不幸につながりやすいのではないかと思います。

以前、この話をお医者さんや弁護士さんの集まりでしゃべったことがあります。男性は、気の置けないコミュニケーション、割とオープンなコミュニケーションが苦手だが、要件があればしゃべられるという話をしたのです。参加者のなかに東京都の監察医の方がおられました。変死体などを解剖される方です。講演会の後で、その方とお酒を飲んでいるときに、この監察医の方は、「おまえの言うとおりだ。俺は1,700人、変死体を解剖したけれども、3日以内に発見されないのは、みんな男だ」と言っていました。亡くなってしまったらそれまででしょうけれども、亡くなるまでの何カ月間、ほとんどしゃべらずに、一人静かに亡くなっていくというのは、考えてみたらちょっと寂しいことかなと思います。男性たちが身構えてコミュニケーションができない状況というのは、男性自身も不幸にするのではないかと、そのときも深く思いまました。介護の問題も、コミュニケーションの力が大切ですし、助けを求める力も重要なのではないかと思います。

4　家族・コミュニテイの再生へ

- 行政の社会サービス整備への要請
- 多様な家族の認め合いと、家族・コミュニテイの新しい形へ
- プライバシー保護と風通しのいいコミュニテイ形成へ

そろそろ終わります。親密圏や社会の構図が変わっていく中で、行政の社会サービスがますます整備される必要がある。これは前提です。一人暮らしの家庭、父子家庭、母子家庭、いろいろあるわけですけれども、いろいろな家族の形があることを前提にしながら、家族とコミュニティの新しい形をつくっていくことも大切です。これは育児にとっても介護にとってもすごく重要ではないかと思います。もちろん、昔のような相互監視のムラ社会に戻れと言っているわけではありません。やはりプライバシーは保護しなければいけない。でも、家族や地域を風通しのいいコミュニケーション関係の中で再生していかないと、育児も介護もうまくいかないのではないかと思います。

おわりに

- 人類史のなかで初めての本格的超高齢社会を迎える日本社会
- 人類史上の「実験」の場？になる日本社会

最後に、先ほど申し上げたように、今、日本の社会は、人類史始まって以来の本格的な超高齢社会に突入しています。人類史の実験場だとさえ言われています。この実験の場で私たちは生きています。逆に言うと、日本のこれからの高齢社会の実践が、次に高齢社会を迎える社会の前例になります。失敗も含めて、実験の場としての日本の社会でいろいろな工夫をしながら、自分の生活を見直したり、自分の思いを他者と共有したり、自分のできることとできないことをチェックしたり、自分たちが過剰に身構えていないか、もっと助けを求める力やコミュニケーションの力を身に付けるべきではないかも含めて、男性自身が考えていく必要があるのではないかと思います。

ちょうど1時間くらいになりましたので、私のおしゃべりはこれで終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

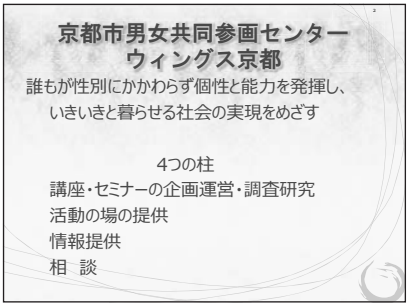
津止：どうもありがとうございました。伊藤先生のお話は、日ごろ男性介護者の集い、あるいは男性介護者の会で見聞きをする皆さま方を彷彿とさせるような雰囲気がありました。本当に、コミュニケーションのあり方、私たち介護をしている男性たちの悩み、葛藤、大きな社会構造の文脈に落とし込むと、今の先生のお話になるのかなと思って、非常に印象深く聞かせてもらいました。介護する男性たちの支援の論理と根拠を求めていこう、そのために私たちの介護の環境をリポートする、あるいは働き方を変えていこうとする動きは、人類の大きな実験と言われると、やりがいもありますし、意味ある社会運動にもなるという感じがしました。苦しいけれども、頑張っておけば、私たちの後に続く者のために大きな道標になるのではないか、そんなことを皆さま方が思ったのではないかと思っています。伊藤先生のお話を受けて、議論を引き続き深めていきたいと思います。先生、どうもありがとうございました。

報告１　京都における男性対象の相談事業

今井　まゆり（京都市男女共同参画協会）

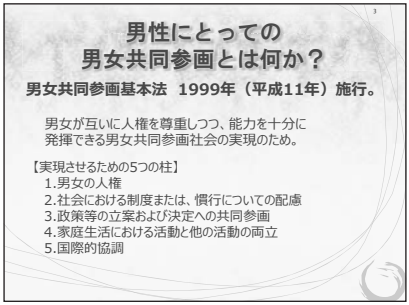
津止：最初の実践現場からのご報告は、男性対象の電話相談の事例です。男女共同参画センターの中から、電話相談を受けたり、カウンセリングをしたり、そういった活動が広がっているわけですけれども、京都市の男女共同参画センターで、男性のカウンセリングを行なっている取り組みをご紹介したいと思います。京都市男女共同参画推進協会の今井まゆり様から、レポートをお願いしたいのですけれども。よろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。京都市の男女共同参画センター・ウィングス京都からまいりました今井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。今日は、男性支援と男性相談事業についてお伝えをしていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



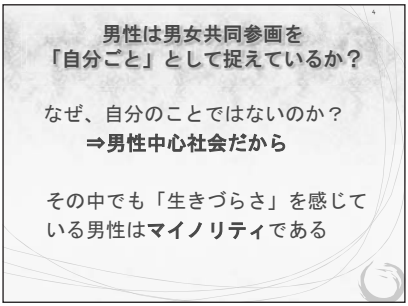
私が勤めているのは、京都市男女共同参画センター、愛称がウィングス京都といいます。ウィングス京都は、京都市内にあるので、皆さん、ご存じかなと思うんですけれども、聞いたことないとおっしゃる方はいらっしゃいますか。大丸のちょっと北の方にあるんですけれども、男女共同参画センターです。ここに書いてあるように、ウィングス京都は、誰もが性別に関わらず、個性と能力を発揮し、生き生きと暮らす社会の実現を目指す男女共同参画社会の推進拠点として平成６年に設立されました。取り組みとして４つの柱がありまして、講座・セミナーの企画運営、調査研究、そして活動の場の提供、そして情報提供、そして４つ目に相談があります。本日は、この

4つ目の相談の中から、男性相談の視点から男性支援の可能性についてお伝えできたらなと思っております。

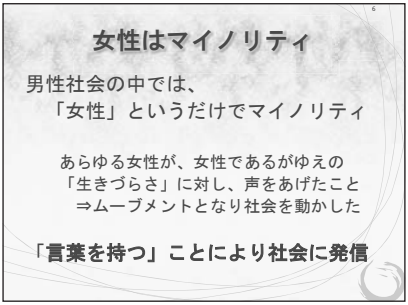


先の伊藤先生の基調講演にもありましたように、男性支援を考えるときには必ず男女共同参画の視点が必要です。では、なぜ、その視点が必要なのかを少しお話ししたいと思います。1999年にできた男女共同参画基本法なんですけれども、男女は互いに人権を尊重しつつ、能力を十分発揮できる男女共同参画社会の実現のためにつくられました。ここに実現させるための5つの柱があるんですけれども、1. 男女の人権の尊重。2. 社会における制度または慣行についての配慮。3. 政策等の立案および決定への共同参画。4. 家庭生活における活動と他の活動の両立。5. 国際的協調が挙げられております。この会場に来られている方々は別だと思うんですけれども、おそらく多くの男性は、この5つの柱を見ても「いや、別に、自分は困ってないし」と思うと思います。

実際、私の知り合いの40代の男性は、もちろん働いています。妻は自分を尊重してくれています。自分も妻を尊重しています。嫁姑問題も、妻がなんとかうまくやってくれています。仕事はあるけれども、責任を持たされて、決定権も持ちながら仕事をしているわけですけれども、その分、しんどいです。しんどいけれども、やりがいがあります。その分、妻や子どもたちには負担をかけていると思うんだけれども、しょうがないと思っているんです。だから、今、男女共同参画のことを話しても、男女共同参画が必要だと言われてもぴんとこないと言います。多分、彼が特別ではないと思うんです。多くの男性は、そういうふうに思うのではないかと思います。

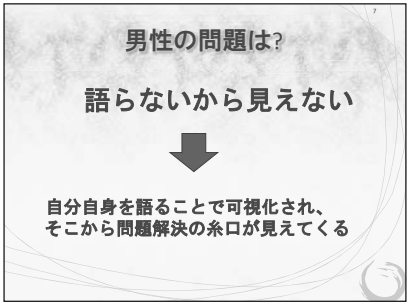


多くの男性にとって、男女共同参画は自分事ではないのです。なぜ、自分のことではないのか。それは、私たち暮らす社会が、まだまだ男性を中心とした社会だからです。でも、この社会の中で生きにくいと感じている男性もいます。そして、生きにくいと感じている男性は少数派・マイノリティーです。では、マイノリティーな男性はどんな人かなと考えたときに、上司の理解を得られないままに育児休業を取った男性であったり、今日のテーマでありますような介護に参画している男性、介護のため離職した男性、そして、先ほどの和田さんも主夫とおっしゃっていたが、主夫という立場もまだまだマイノリティーであると思います。個人の価値観やライフスタイルは、世の中がどんどん変わってきて、変化しているのにも関わらず、世の中の慣習や価値観が変化していないと考えています。

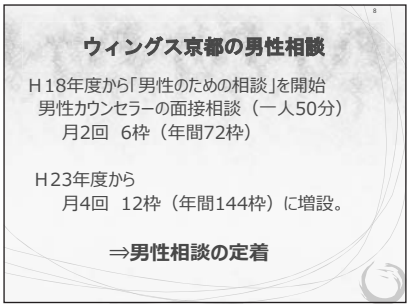


では、この世の中で女性はどうなのかと考えてみると、男性中心社会の中では女性であるだけで女性はマイノリティーであると私たちは思います。でも、あらゆる女性は女性であるが故の生きづらさに対し声を上げて、それを運動にしていった、ムーブメントになっていった、そういう女性解放運動というものがあったんですけれども、それらがムーブメントになり社会を動かしたという事実があると思います。男性の問題も社会にいろいろと存在しているのに見えないのはなぜかということです。それは、ここに書いてあるように、男性が語らないから見えないのではないかと思います。女性の問題は、先ほど申し上げたように、女性が言葉を持つことによって社会に発信してきたように、男性も自分の問題を自分自身で語ることによって可視化され

て、そうすることで問題解決の糸口が見えてくるのではないかなと私は思います。



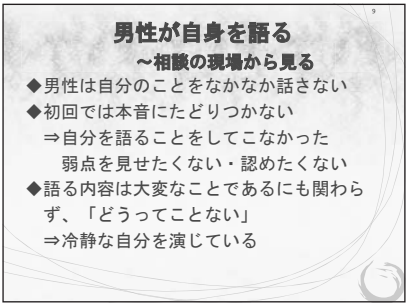
では、なぜ男性は語らないのか、語れないのか、先ほど、男女平等参画社会の実現のための5つの柱がありました。人権の尊重であったり、社会における制度、それから慣行への配慮や家庭生活と他の活動との両立などのさまざまな視点が必要です。「男は弱音を吐くべきではない」とか「強く、たくましく」というふうに、ずっと言われてきました。「男たるもの、一家を養うべき」とか「男は我慢」などの、先ほど伊藤先生の話にも出てきました、男らしさの呪縛からの解放がまず必要であると思います。



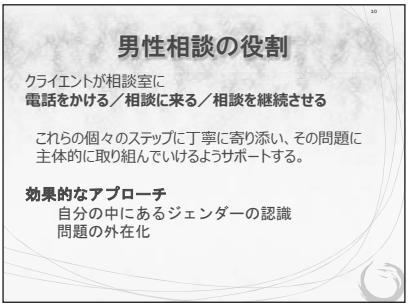
男性支援と男女共同参画の関係について少しお話しできたところで、次にウィングス京都で、私どもがおこなっている男性相談についてお話ししていきます。ウィングス京都では、平成18年から男性のための相談を開始いたしました。これは、男性カウンセラーが面接を行なってやっております。お一人50分の枠で、始めた当初は月2回、1日3枠ということで、月2回ですので6枠、年間で72枠を取ってやらせていただきました。現在、相談件数は、平成24年度で121件ありました。平成18年度、始めた当初から割と新聞等で取り上げていただきましたので、当初から予約はほぼ埋まる状態でしたが、当日になると3割ほどがキャンセルで、当日、来られないということでした。ということは、電話をかけて予約を取るんですけれども、予約を取られても当日になると不安で来られないという方が多いです。男性にとっても、

相談室というものはとても敷居が高いというふうに聞きます。その後、利用者が増え続けて、1～2カ月先でしか予約が取れない状態が続きましたので、これではいけないと平成23年度から月4枠、年間でいうと144枠に調節させていただきました。それも、同じく予約がほぼ埋まる状態です。当日のキャンセルも、今は1割5分くらいから2割弱で落ち着いている状態が続いております。これらを見ても、ウィングス京都の中でやっている電話相談、面接相談は定着しつつあるのかなと思います。

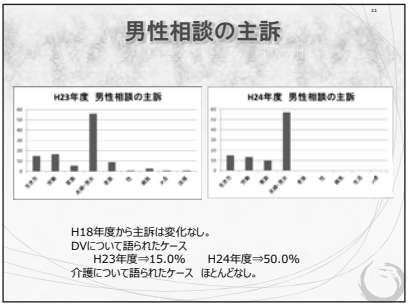
ちなみに、男性相談を行なっている近隣の公的なセンターなのですが、大阪市のクレオ大阪北さん、そこは男性の面接相談と電話相談をされています。そして、奈良県の女性センターで面接相談をされています。こちらも、電話もされています。あとは、和歌山と兵庫県は電話相談のみというふうに聞いておりますので、女性が相談できる場に比べて、男性が相談できる場はとても少ないと言えると思います。



では、男性相談で、男性は何を語っているのかです。本当に、男性は自分のことを話しません、なかなか話さないです。面接相談ですので、継続につながっていくこともあるんですけれども、初回にはほとんど本音は出てきません、たどり着けない状態です。3回目にして、やっと本音が見えてくるような感じです。それは、彼らがこれまで自分というものを語ることをしてこなかったところもありますし、他者に、例えばカウンセラーに、相談に来ているにも関わらず弱みを見せない、見せたくないとか、あとは自分で自分の弱さを認めたくないということが考えられます。語る内容はとても大変で、切羽詰まられている、大変なことであるにも関わらず「どうっていうことないんですけどね。こんなこと、よくあるとは思うんですね」みたいに、起こっている事柄に対してとても冷静でいる自分を演じているふうにも見えます。

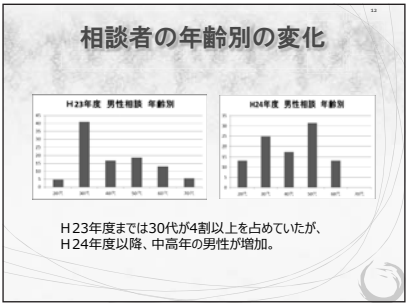


では、私たちがやっている男性相談の役割はどういうものなのかです。例えば、クライアント・相談者が相談室に予約のための電話をかけてきます。電話で予約を取って、予約の日に相談に来ます。相談は1回で終わらずに、次回ももう少し続けましょうかということで相談を継続させる、これらの個々のステップに、私たちが丁寧に寄り添って、その問題に主体的に取り組んでいけるようにサポートすることだと思っています。私たちが行なうサポートの中で効果的なアプローチとして、男性中心社会の中で生きづらいと感じている男性は、自分の中にジェンダーというのがまだある、男性の鎧をたくさん着込んだままであります。自分の中にそういうジェンダーがあるんだということに気付いてもらうということと、あとは、今、起こっている問題を外在化させていくことが、主体的に問題解決に関わっていくことに大きく影響するかと思います。



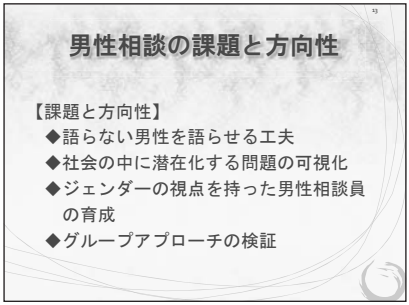
主訴というのは、私はこういうことで悩んできましたという、初回にカウンセラーに伝える私の問題というものですが、ここで、男性相談の主訴の変化を、過去のものを見てきます。ここでは23年度と24年度を並べていますが、平成18年度から23年度までのグラフはほとんど変わりません。というか、24年度までほとんど一緒です。ずっとこの主訴は、夫婦、男女が50％以上です。このグラフからはちょっと読み取れないんですけれども、私のほうでもう少し詳細に調べてみますと、夫婦、男女のことという中に、DV・ドメスティックバイオレンスを語られたケースが、平成23年度は15％、それが平成24年度は50％というように、1年で3倍以上になっています。介

護について語られているかを調べてみたのですが、介護について語られたケースというのはほとんどなかったんです。一生懸命、読んだんですけれども、介護で悩んでいることが主訴というのは出てきませんでした。どういうことが言えるのかというと、DV については、ここ数年でドメスティックバイオレンスが社会問題として認知されてきました。やはり、それが大きく影響しているかなと思います。この DV には、加害も被害もあります。男性は加害だけでなく、被害も受けています。DV をテーマにしたドラマが、たくさん放送されるようになりました。逆に、介護の問題でドラマ化されたものはあまり知らないし、介護というものは個人の問題で社会の問題であるという認識が、まだまだ浸透していないのかなと思います。

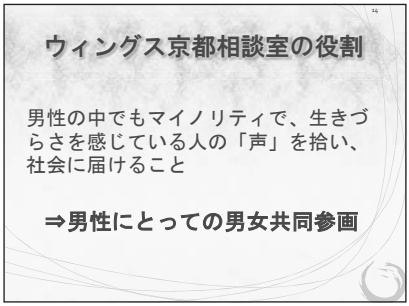


そんな中、希望も見えてきています。これが 2 年間の比較なんですけれども、今、年齢別を見ていますが、平成 23 年度までは 30 代が 4 割以上を占めていました。これは、平成 18 年度から 23 年度まで本当に変わらないです。それが平成 24 年度になると、50 代だけを見てみると分かると思うんですけれども、中高年の男性がすごく増加していることが分かると思います。自分のことをしゃべらない、しゃべりたがらない中高年の男性が語り出したことが、1 つは言えるのではないかと思います。これは、相談の現場だけで感じることではなく、昨年、私どもで実施した男性対象講座の中で「男のキャリアドック」という講座でも感じることができました。テーマで、働く男性にとって人生における転機はいろいろあると思うんです。結婚であったり、育児であったり、介護であったり、それから異動や昇進もあると思います。それらに伴うストレスを自分でどのように乗り越えていくのかについて、講師と一緒にみんなで話すという講座でした。その講座の中で参加者はいろいろ自分で語られたわけですけれども、皆さん、本当によく語っておられました。最後のアンケートでも満足度がすごく高くて「みんなと話せてよかった」とか「もっと時間が

欲しかった」というお声も頂きまして、急遽、講座が終わった後、その人たちで集まってまた話す場、アフター会を持たせていただきました。



男性が語るということに関して少し希望が見えたところで、男性相談の課題と方向性についてお話をします。まず、まだ語らない男性が多いので、語らない男性を語らせる工夫は本当に必要だやっていかなければいけないなと思っています。そして、社会の中に潜在化する問題の可視化、見せていくことです。そして、あとはジェンダーの視点を持った男性相談員、国のほうでも男性相談の施設なり場をもう少し増やしていこうということで、ご苦労されていると思うんですけれども、そこにはやはり男女平等、ジェンダーの視点を持った男性相談員を送り込んでいかなければいけない、いずれしていかなければいけないと思います。そして、男のキャリアドック、先ほど説明いたしました講座の実施で実感したグループアプローチ、グループでいろいろ話していく、語りに対するアプローチは、今後の新しい方向性として視野に入れていきたいと思っています。



ウィングス京都の男性相談としての役割は、男性の中でもマイノリティーで生きづらさを感じている方々の声を拾って、それを社会に届けること、そこから初めて男性にとっての男女平等参画が見えてきます。それが、すなわち男性の支援につながっていくことになるのかと思います。今回のテーマでもあります介護も、ケアメンという言葉が定着しつつありますけれども、ブームで終わらせないためにも、しっかり私たちが介護は社会

の問題であるということを発信していけたらと思っております。

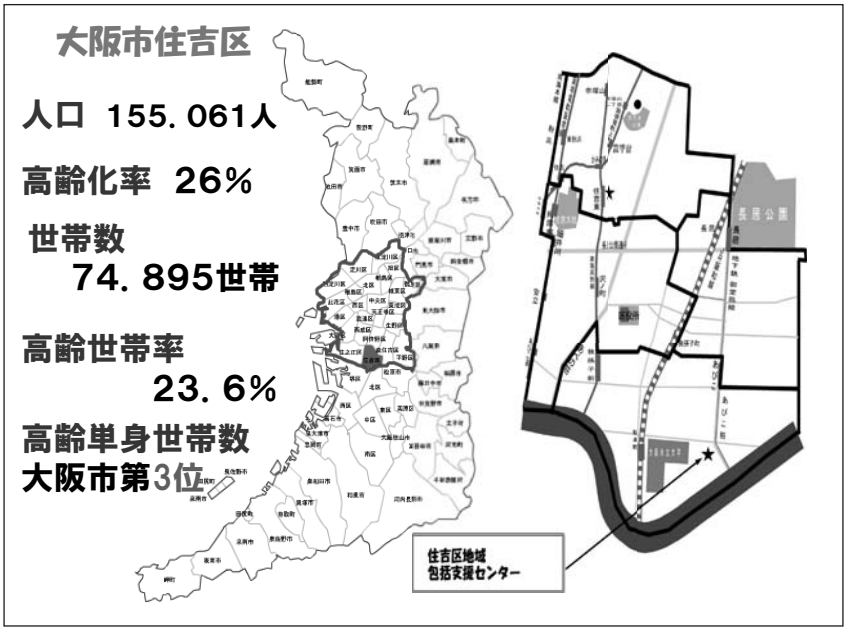
以上で、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

津止：ありがとうございました。こういうふうに男性を対象にしたカウンセリングとか、あるいは電話相談などの相談場面が世に存在しているということを知らない方もいらっしゃるのではないのかなと思います。自分のことも話せずに、ジェンダー規範に縛られて、なかなか課題を拾い上げることができにくいような相談場面に現われるような方々の事例も、男性介護ネットの中でもよく耳にした話ではなかったかと思います。

報告２　男性介護者の集い「ほっこりサロン」の実践

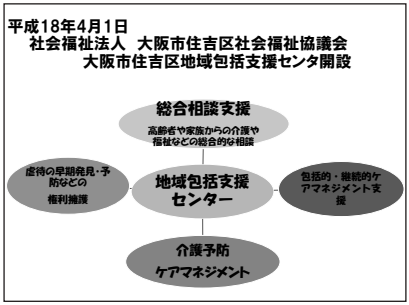
小林　裕子（大阪市住吉区社会福祉協議会・住吉区地域包括支援センター）

津止：今度は、私たち男性介護ネットの大きなテーマでもあります介護の分野です。介護する男性たちを支援している事例として、大阪の住吉の地域包括支援センター、ほっこりサロンという男性のサロンを開いているところです。そこの小林さんのほうから、知りたいことだと思いますけれども、最後の報告になりますけれども、お願いしたいと思います。

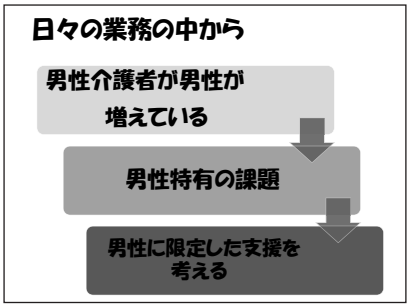


初めまして、住吉区地域包括支援センターの小林と申します。よろしくお願いいたします。大阪市住吉区なんですけれども、大阪府の中で青く囲んだところが大阪市なんですけれども、大阪市の一番南の端に住吉区がございます。住吉区の中の南の端に太い青い線があるんですけれども、これは大和川です。大

和川を越えましたら、堺市になります。この一番端に、私たちの住吉区地域包括支援センターがございます。



住吉区は高齢化率が26％とかなり高い地域でありまして、その中でも高齢世帯の単身、一人暮らしの高齢者の方が大阪市内で第3位と、一人暮らしがかなり多い地区であります。そういう中で、私たちは地域包括支援センターとして仕事をしているんですけれども、地域包括支援センターの役割として、高齢者の方の総合相談窓口、いろいろな役割を担っています。高齢者虐待、それから介護予防のこともそうですし、ケアマネージャーさんの後方支援であったり、いろいろな役割をさせていただいております。



その日々の業務の中で、平成18年に地域包括支援センターができたんですけれども、いろいろな関わりから男性の介護者が増えてきた。その中で、男性の方特有の課題が見えてきました。先ほど、伊藤先生、それから今井さんからも、男性特有の弱音を吐きづらさとか、それから支援のタイミングが遅いと言うお話があったかと思いますが、SOSを出されたときには非常に重症化しているケースが多いとうことで、男性介護者の方がSOSを出しにくい、男性特有の井戸端会議がしにくい、情報不足というところから、男性に限定した支援を考えていかないといけないということで、平成22年に家族介護支援事業を行うということで、いろいろ介護者の方に聞いてみましたら、家事、特に調理に苦手感があるという話をされていることがありましたので、男性を対象にチャレンジクッキングという調理教室をいたしまし

た。また、男性の介護者の方に実際に来ていただいて、男性の介護者の方の実体験をお話ししていただいて、男性介護者の現状を知り、男性介護者への支援について、私たち地域包括でも考えていきましょうということで、住民の方を対象に家族介護教室をさせていただきました。そのときに来ていただいたのが、NPO 法人スマイルウェイ（兵庫県宝塚市）の西山さん、スマイルウェイの会員の方々に来ていただいて、お話をしていただきました。

平成22年度家族介護支援事業

・チャレンジクッキング
男性を対象に調理教室
（平成22年10月　実施）

・男性の介護について
男性介護者のお話を聞く
（平成22年11月　実施）

チャレンジクッキング

料理サークル結成
（平成23年3月11日）
介護予備群の男性7名
（平均年齢72歳）

住吉鉄人倶楽部
サークル名改名
（平成23年9月）

ボランティア活動開始
（平成23年12月）
（クッキー製作し施設訪問）

男性介護者の集い

第1回男性介護者の集い開催
（平成23年1月27日）
参加：10名

以後毎月第4水曜日
13:30～16:00
住吉区民センターにて開催

ほっこりサロン
名称を変更
（平成23年7月27日）

ほっこりサロン（参加状況）

H23/1/27～H26/2/26

延べ人数　344名
実人数　43名
区内　31名
区外　12名

被介護者の認知症の有無
有　30名
無　11名

個別支援を行った数
（電話も含む）
8　人

参加者の年齢
最低年齢　32歳
最高年齢　89歳

来ていただいたんですけれども、家族介護教室がすごく好評で、もっとしてくれという声がかなり多かったんです。チャレンジクッキングという調理教室は、介護予備軍の方が多く、今は介護を卒業されているか、まだ介護は始まっていないんですけれども、男性ばかりで集まって料理をしてみたいという人が集まりまして、サークルを結成いたしました。住吉鉄人倶楽部というサークルを結成いたしまして、その後、クッキーを製作したりしてボランティア活動をされるサークルが始まりました。

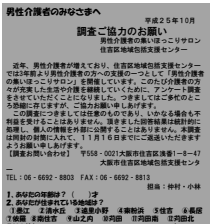
もう一つ、男性介護者の集いで、宝塚の西山さんをはじめ男性介護者の方に来ていただいた後、このままで終わらせるのはもったいない、大阪に男性の介護者の集いがあまりなかったという現状がございまして、住吉地区で月に1回でもできたらいいかなということで、何をしようと

いうことではなくて、集いをやってみようということで始まりました。1回目が23年1月27日でした。そこから今年2月24日までに参加していただいたのが、延人数344名、実人数としては43名です。ほっこりサロンのほうでは、府内、府外、大阪市内に限らず、どこからでも来ていただけるということで、他の市町村からも参加されています。来られている方は、被介護者の方が認知症と診断を受けておられる方の、介護をされている方が非常に多いという現状です。参加していただいている方は、サロンでお菓子を食べて、お茶を飲みながら、いろいろな話をしていただくんですけれども、その月のサロン終了後、私ども包括にお電話で相談を頂いたり、それからケアマネージャーさんから、困ったことが起きているのでお手伝いしてほしいということで、個別支援が行った方が8名ほどいらっしゃいます。参加者は、男性介護者の最低年齢は32歳、今現在、最高年齢の方は89歳の方がおられます。

（たくさんの人にほっこりサロンを知ってもらう）

・区内の男性介護者の実態調査

・10月下旬～区内82か所の居宅介護支援事業所に配布



男性介護者のみなさまへ

平成２５年１０月

調査ご協力のお願い

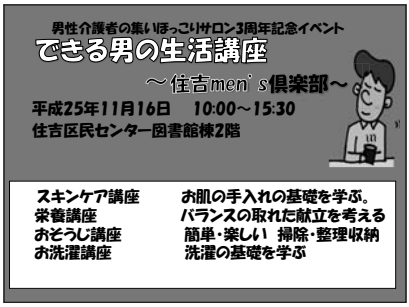
男性介護者の集いほっこりサロン
住吉区地域包括支援センター

近年、男性介護者が増えており、住吉区地域包括支援センターでは3年前より男性介護者の方への支援の一つとして「男性介護者の集いほっこりサロン」を開催しています。このたび介護者の方々が充実した生活や介護を継続していくために、アンケート調査をさせていただくことになりました。つきましてはご多忙のところ恐縮に存じますが、ご協力お願い申しあげます。
この調査につきましては仕意のものであり、いかなる場合も不利益を受けることはありません。頂きました回答結果は統計的に処理し、個人の情報を外部に公開することはありません。本調査は同封の封筒に入れて、11月16日までにご返送いただきますようお願い申しあげます。
【調査お問い合わせ】　〒558－0021大阪市住吉区清水丘一－8－47
大阪市住吉区地域包括支援センター
TEL：06－6692－8803　FAX：06－6692－8813
担当：仲村・小林

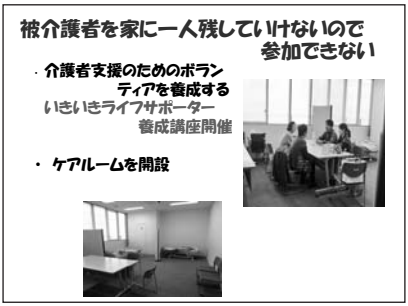
1. あなたの年齢は？（　　）才
2. あなたが住まれている地域は？
１泉北　２清水丘　３遠里小野　４東粉浜　５住吉　６長居
７帝塚　８南住吉　９山之内　10苅田　11戸田西　12戸田北
13その他（　　）

ほっこりサロンは3周年だったんですけれども、去年の4月に兵庫県たつの市の男性介護者の集まりの1周年記念を見学させていただいたときに、すごいなと思いまして「うちも3周年になるから、何かしたいね」という話をサロンのメンバーさんにいたしました。メンバーの方から「もっとたくさんの人に、このサロンのことを知ってほしい」それから「研修というか講座をしてくれるのだったら、できるだけ生活に即したものをやってほしい」「せっかく3周年なのだから、せめて外の先生に来てほしい」「介護のために家を空けられないから、イベントをしても長い時間は行けない。介護のためにイベントを手伝うことができない」そういうお話がありました。たくさんの人に、ほっこりサロンのことを知ってもらいというのは、私たちもそうなんですけれども。ここでいろいろと話し合って、どうしたらいいのかということだったんですけれども、私の上司から「アンケートをしたらどうか。アンケートとイベントのチラシをケアマネさんから渡してもらったら、確実に手元に届

くやないか」と言われました。区内の 82 カ所のケアマネ事業所さんにお伺いしまして、アンケートをお願いいたしました。これがアンケートの一部です。アンケートと、ほっこりサロンのチラシと 3 周年のイベントのチラシを付けまして、返信用封筒を付けて渡していただきました。



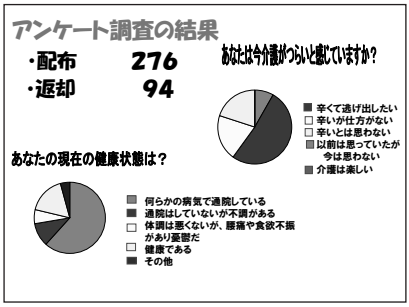
これは、伊藤先生の『「できない男」から「できる男へ」』のパクリではないのですけれども「できる男の生活講座」ということで、1 日、講座のイベントをいたしました。これは、生活に即した講座をしてほしいということだったので、スキンケア講座、お肌の手入れの基礎を学びます。栄養講座、バランスの取れた献立を考えます。お掃除講座、簡単、楽しい整理の仕方。お洗濯講座、お洗濯の基礎を学ぶ。ということで、この 4 つの講座をすべて男性の講師の方にお願いいたしまして、させていただきました。参加は、各講座 30 人から 40 人の方が参加していただいています。この写真は、講座の様子なんですけれども、当日は男性介護者の方だけではなくて、府内の男性、当日、いきなりおじさんが入ってきたりということもあったのですが「こんなんやってるなんて、知らんかった」ということで、と午前中と午後で講座が分かれていたんですけれども「今から昼ご飯を食べに帰るけど、また昼から来るから」という人たちも含めて、講座自体は 48 名くらい参加してくださいました。



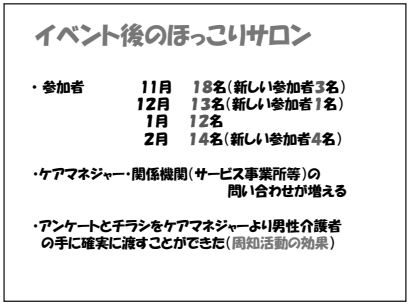
介護者の方を一人で家に残しておけない、デイサービスがその日ではないとか、いろいろな理由で参加できない方の声がありまして、介護者支援のためのボランティアを養成しようということになりました。実際にはいろいろなイベントがあるんですけれども、被介護者の方を一緒に連れてこられない、それで参加できないという声は以前からたくさんありましたので、住吉の地域包括支援センターと老人福祉センターと共同で、1日ライフサポーターという養成講座をしまして、ボランティアさんの養成をいたしました。これを見ていただいたら、スタッフとボランティアさんがいるところにベッドなども置きまして、どなたが来ても、1日、そこで過ごしていただいて、介護者の方に安心して講座を受けていただいたり、いろいろなイベントに参加していただけるようにということで、ケアルームを開設いたしました。

介護のためにイベントを手伝うのは難しいという、実際に介護で日々、疲れておられますので、できたら来て楽しんでいってほしいというのが私たちもありましたので、できる範囲でお手伝いをしていただけたらということで、今日も来られているんですけれども、介護タクシーを立ち上げられた介護者の方がいらっしゃるのですが、その方に、どうしても車の送迎がいる方をおうちまで送り届けていただきました。先ほど言いました、住吉鉄人倶楽部という調理サークル、この方たちもこれまで活動を、認知症サポーター養成や施設にクッキーの差し入れなど、いろいろなボランティア活動をされています。この方たちに来ていただきまして、1日、コーヒーとクッキーの接待をしていただきました。この写真はテラスに交流の場をつくりまして、住

吉鉄人倶楽部の方にコーヒーとお茶とクッキーを出していただいて、皆さん、ここでくつろいでいただきました。研修を受けられる方、ここでくつろいで交流される方、いろいろな方が1日楽しんでいただけるようなイベントをさせていただきました。それと、津止先生に来てほしいという思いがかないまして、津止先生に、11月に「男性が介護するということ」ということで講演に来ていただきました。



先ほど言いましたアンケートですけれども、一部しか紹介をさせていただけないんですけれども、82カ所の介護支援事業所に配布させていただいた数が276で、そのうち返ってきましたのが94です。一部、紹介させていただきます。「あなたの現在の健康状態は？」という質問ですが「何らかの病気で通院している」「通院はしていないけれども、不調がある」という方が、おおよそ4分の3くらいです。「今、実際に介護をつらいと感じていますか？」「つらくて逃げ出したい」「つらいが仕方がない」というふうに思っておられる方もおおよそ4分の3いらっしゃいました。このアンケートの結果につきましては、もう少し分析させていただきして、ケアマネージャーさんとご協力させていただきながら、今後の支援を考えていきたいと思っております。



イベントをするまでのほっこりサロンの参加者は大体6～7名ぐらいが平均参加者だったんです。10月、11月にイベントをいたしまして、11月のほっこりサロンの参加者が一気に18名に増えました。この日は、ちょっとびっくりいたしました。実際に休まれておられた方とか、数カ

月に一遍来られている方とか、長くお休みしている方もいらっしゃるんですけれども、アンケートとかイベントをした後に、思い出して参加くださった方と、それから新しく来てくださった方が増えました。それまで10人を超えることは少なかったのですが、イベントをしてから先月まで、ほぼ10人以上の参加者の方がいらっしゃいます。その後、ケアマネージャーさんからの問い合わせも増えました。ケアマネージャーさんを通してアンケートとチラシを配布していただいたということで、ケアマネージャーさんにも知っていただく周知ができたのではないかなと思います。ケアマネージャーさんから、ほっこりサロンのご案内をしていただけるようになったことが、すごく大きいかなと思います。

今後の課題

＊サービスを利用していない男性介護者への周知

＊ほっこりサロンの運営

＊男性介護者に支援の必要性について地域への周知

今後の課題なんですけれども、今回のアンケート調査はサービスを使っておられる方、要するにケアマネージャーさんと関係のある方に対してのアンケートなんですけれども、地域の中にはたくさんのサービスを使っておられない男性介護者が潜在的にいらっしゃると思います。その方たちに、どういうふうに周知をしていったらいいのだろうかというのが1つの課題です。それから、ほっこりサロンの参加者の人数が増えてきましたので、時間とか場の設定や運営についても考えていかなければならないです。それから、もう一つ、これはもうちょっと頑張らないといけなんですけれども、男性介護者に支援が必要であることを地域の方に知っていただきたいです。地域の方から見守りなどの支援を頂きたいということで、周知活動を続けていかないといけないと思っております。そして、ほっこりサロンは、地域包括支援センターが始めて3年たったんですけれども、始めた当初からほっこり庵の西山さんをはじめ、たくさんの方にご支援を頂きました。特に、この男性介護者ネットに来させていただいて、皆さんのご意見をしつこいぐらいにいろいろ聞きまして、運営に関していろいろと教えていただきました。本当に感謝しております。これからも地域包括支援センターの職員が一丸となって、男性介護者のみ

ならず、すべての介護者の方に寄り添っていけるように頑張っていきたいと思います。これからも、よろしくお願いいたします。ご清聴、ありがとうございました。

津止：ありがとうございました。広がりがあるな活動につながっていったという、私たちのお手本にしたいようなご報告がありました。今日、ご参加の介護者の会や集いを主催される方々にも、随分参考になるお話があったのではないかと思います。

ディスカッション

伊藤：たくさんのご質問、ありがとうございました。当初は、それぞれ、ディスカッションしてからと思っていたのですが、たくさん質問が来てしまったので、まずそれぞれにお答えいただいて、その上で、関係あるところで議論していくような流れができればなと思っております。

最初に、僕のところにも結構質問が来ているので、そこからお答えしようかなと思います。1つは、コミュニケーションの男女差のお話をしたときに、それは人それぞれではないかというご質問がありました。それは、そのとおりだと思います。共感能力すごく高い男性もいますし、要件のみしゃべる女性もいるのは事実です。ただ、大きな流れとして、男性たちは仕事中心の社会で生きていますから、要件のみのコミュニケーションになりがちで、共感能力は低いのではないかと思います。少し細かい話をすると、発達心理学の研究の中で、特にお母さんが育てる社会の中で、男性は割と早い段階でお母さんと離れがち、つまり女性はお母さんと同性なので比較的安定した形で幼児段階が送れるんですけれども、男の子はどこかでお母さんと違うと、お母さんと自分を切り離してしまうことが早い段階で起こるという説があるんです。切り離してしまうと、客観的に物を見たり、冷静に外部と対応するような習慣が身に付いてしまいます。女の子は、お母さんと一体感が割と長く続くので共感能力が付くという説明をする心理学者もあります。ただ、何度も言うようですけれども、人それぞれだと思いますが、大きな流れとしては男性の客観的な物言いや、女性と比べると共感能力が弱くなるというのは、多くの国で確認されていることかなと思います。この方は、お母さんが男の子にあるべき男性像を植えつけるのではないかというお話もされていますが、今、申し上げたように、お母さんの影響もあると思います。

私の実感とぴったり合っているというお話で、1970年代、欧米で女性が社会改革を進めるのに何が特徴的だったのかという質問が出ています。これは、お話の中で申し上げたように、労働政策の問題もありますし、あと、欧米の多くの国々では、意思決定の場に女性が入る割当制をつくるような動きが、特にこの15年ぐらいあります。例えばノルウェーだったら、企業の役員の5割か

ら4割を女性にしなければならないと法律で縛っています。日本は、なかなかそこまでは踏み込めないと思います。

あと、男性の共感能力を強めるにはどうしたらいいか、個人、社会、地域事業はこれからどうすればいいのかです。以前、東京都の男性政策で「複顔主義」というものがありました。トンボのように複数の眼ではなくて、複数の顔を持つものです。というのは、男性の共感能力を育てるためには仕事の顔だけではなかなか身に付かないわけで、働いている力、家庭の顔とか、地域の顔とか、市民の顔とか、仕事以外の顔を意識的につくることが必要なんだろうと思います。それは、定年後の生活においても、多くの男性は元仕事の顔という人が多いです。60代以上の男性の講座で、自己紹介をしていただいたら、皆さん、元の肩書きで自己紹介をされたのでびっくりしたことがあります。「元何々何々校の校長をやっておりました、何々でございます」「何々大学の営業部長をしておりました、何々です」。今、あなたは何をやっているんですかというのが、なかなか出てこないんです。それは、やっぱり、仕事しか顔を持てないという人生を、多くの男性が送っていたことから来るのかなと思ったりもします。

あとは、これから団塊の世代が介護者、あるいは被介護者になっていく状況に、どんな課題や希望が考えられるかという提案がありましたけれども、難しい質問かなと思います。2015年、既に多くの方が、団塊の世代が65歳以上に突入しています。1947年、48年、49年の3年に生まれた方たちが、基本的に団塊の世代と言われます。この3年間で、800万人強の子どもたちが生まれているわけです。今、年間100万ちょっとくらいですから、団塊の世代の方たちというのは今の子どもの倍くらいの数が生まれています。その方たちが一挙に65歳以上に突入しているわけですから、何度も申し上げますけれども、これから本当にとんでもない高齢社会になります。課題的には、外国人のケアワーカーをどうやって日本の社会が受け入れていくのかが、当面の大きな課題になるだろうと僕は思っております。ただ、日本の社会は、それについての対応を十分にできない状況なのかなという、そんな危惧も抱いています。

僕は60代ですけれども、二十歳前後の学生と付き合っているので、やはりギャップは感じられるんですけれども、いろいろな形で話を聞いていると、われわれの若いころとそんなに変わってない部分もあるし、かなり変わっている

部分もあるし、それはしゃべっていく中でしかお互い発見できない部分で、一緒に何かやるのは今かなというのを思います。確かに、世代を超えるというのは今日の副題ですけれども、大きなテーマかなと思います。

次は今井さんへの質問です。やはり何人もの方々から、男性がなかなか相談に来ない状態で、男性をしゃべらせる工夫とか、そういうお声が多かったです。それにお答えいただきたいのと、相談員はどんな訓練、教育、経験を受けた方なのですかという質問もありました。男性が語らないというか、難しいところで、お母さんやお父さんを介護する息子さんの支援、いわゆる息子介護と言われているんですけれども、一筋縄ではいかなという話をよく聞きます。どうやら息子さん自身のこだわりがあって、いろいろやってもあまり効果がないおむつのやり方とか、これはよくあることなのか、男性介護者とケアマネがコミュニケーションする中で生じる壁みたいなものです。これは、小林さんにも丸が付いていて、僕にも付いています。次に、ケアをする男性、特に息子さんの介護の難しい部分に対する解決策があるかどうかという、これも、後で小林さんにも聞きたいと思います。

もう一つは、DV についての相談はするけれども、介護はないということだけれども、介護がストレッサーになって深刻な問題として相談現場に現われたとすれば、結果的に DV や高齢者虐待、あるいは健康問題などの事例となるので、さまざまな相談者の背景としての介護があるのではないか、それを調べないと意味がないのではないかという質問があります。これについても、今井さんのところに丸が付いていますので、お答えいただければと思います。

今井：ありがとうございます。まず男性相談に男性がなかなか来られないということは、男性は相談自体、敷居が高くて、こんなことを相談に行くのはちょっと後ろめたいというか、恥ずかしいというか、そこに一歩踏み出せない男性が多いということです。ただ、先ほども見ていただきましたように、枠いっぱい予約が入っているということは、それだけの方が自分で相談施設に行くことを既に実行されていることだと思います。ただ、相談に来られている方は、まだ力がある人なんです。私たちがもっと目を向けないといけないのは、相談にも

来られないような人、自分で声を発することもできない人に目を向けていかないといけないと思っています。

どんな工夫をしているのかですけれども、それも先ほど少し書かせていただきました、一人では敷居が高い、一人だと行きにくいということであれば、同じ悩みを持つ人たちが集まれる場、京都でもいろいろ活動されている方がいらっしゃいますし、そういう場に行って自分のことを少しずつ話していく場が必要です。ウィングス京都でも、女性の場合はグループ相談会ということで、相談室が主体でテーマに沿って悩みをみんなで分かち合う相談会をやっています。それと同じように、グループ相談会と名前を付けてしまうと男性はなかなか来にくいので、この間やったように男のキャリアドックみたいな形で、そこはテーマを決めなかったんですけれども、自分がどんな転機で悩んできたかを出す合うことをさせていただきました。その中で、介護に関することも出ておりましたので、一人でもご参加いただけるような場をつくっていくことが必要かなと思っております。

それから、私どもの男性相談に携わるカウンセラーですけれども、男性カウンセラーは臨床心理士の資格をお持ちの方、それから産業カウンセラーの資格をお持ちの方、さまざまな場所で男性に関わる相談に携わっていらっしゃる先生にお願いをしています。私どもでは、男性の相談には男性が対応させていただいております。

あとは、ケアをする息子さんの支援です。相談室に来るとしたら、例えば両親のケアをしている人がいて、介護をしている自分がしんどいということですよね。先ほどの統計の中で、介護がなかなか出てこなかったんですという話をお伝えしたのですが、ちょっと説明の仕方が悪かったんですけれども、統計の書き方がまだそこまで詳しくできていないということと、一番最初に介護で困っていますというふうに来られる方が少ないんです。何度も何度もお話を聞いていっている中で、こんな問題もあるけれども、介護で困っているということも出てくるということです。私が思うんですけれども、当たっているかどうか分からないんですけれども、小林さんに聞けばいいのですが、介護に携わっておられている男性の方というのは、相談にも来られないのではないかなと、来ている場合ではないというところまできてしまうのかなということも思いま

した。先ほどのほっこりサロンのケアルームみたいに、そこでケアしてくださる方がいて、自分が相談を受けるというような二段構えがあれば、そういう方も来られるのかなと思いました。

男性相談に男性がなかなか来られないということは、男性は相談自体、敷居が高くて、こんなことを相談に行くのはちょっと後ろめたいというか、恥ずかしいというか、そこに一歩踏み出せない男性が多いということです。ただ、先ほども見ていただきましたように、枠いっぱい予約が入っているということは、それだけの方が自分で相談施設に行くことを既に実行されていることだと思います。ただ、相談に来られている方は、まだ力がある人なんです。私たちがもっと目を向けないといけないのは、相談にも来られないような人、自分で声を発することもできない人に目を向けていかないといけないと思っています。

どんな工夫をしているのかですけれども、それも先ほど少し書かせていただきました、一人では敷居が高い、一人だと行きにくいということであれば、同じ悩みを持つ人たちが集まれる場、京都でもいろいろ活動されている方がいらっしゃいますし、そういう場に行って自分のことを少しずつ話していく場が必要です。ウィングス京都でも、女性の場合はグループ相談会ということで、相談室が主体でテーマに沿って悩みをみんなで分かち合う相談会をやっています。それと同じように、グループ相談会と名前を付けてしまうと男性はなかなか来にくいので、この間やったように男のキャリアドックみたいな形で、そこはテーマを決めなかったんですけれども、自分がどんな転機で悩んできたかを出す合うことをさせていただきました。その中で、介護に関することも出ておりましたので、一人でもご参加いただけるような場をつくっていくことが必要かなと思っております。

それから、私どもの男性相談に携わるカウンセラーですけれども、男性カウンセラーは臨床心理士をお持ちの方、それから産業カウンセラーの資格をお持ちの方、さまざまな場所で男性に関わる相談に携わっていらっしゃる先生にお願いをしています。私どもでは、男性の相談には男性が対応させていただいております。

あとは、ケアをする息子さんの支援です。相談室に来るとしたら、両親、ケアをする人がいて、介護をしている自分がしんどいということですよね。先ほ

どの統計の中で、介護がなかなか出てこなかったんですという話をお伝えしたのですが、ちょっと説明の仕方が悪かったんですけれども、統計の書き方がまだそこまで詳しくできていないということと、一番最初に介護で困っていますというふうに来られる方が少ないんです。何度も何度もお話を聞いていっている中で、こんな問題もあるけれども、介護で困っているということも出てくるということです。私が思うんですけれども、当たっているかどうか分からないんですけれども、小林さんに聞けばいいのですが、介護に携わっておられている男性の方というのは、相談にも来られないのではないかなと、来ている場合ではないというところまできてしまうのかなということも思いました。先ほどのほっこりサロンのケアルームみたいに、そこでケアしてくださる方がいて、自分が相談を受けるというような二段構えがあれば、そういう方も来られるのかなと思いました。

伊藤：追加で、介護相談に応じられるスタッフがおられるのかどうかという質問と、相談者で30代の方が多かったデータが少し前までありましたけれども、それは何か傾向があるのかどうか「相談室に20代の方が増えているようですが」と書いてありました。

今井：相談者は、23年度までは30代が主でしたが、24年度から中高年が増えたというお話をさせていただきました。ウィングス京都の相談室は、その方が持っておられる問題を主体的に解決していくためのサポートをするということなんです。なので、例えば「それじゃあ、こういうところに行って、ここで相談されてはどうですか」というところまではできるのですが、そこから先の、地域でどういうふうにやっていくかというところまでは、私たちは情報を持っていないので、その方が求めていらっしゃる情報が確実に得られそうなところをつなぐところまではさせていただいています。

伊藤：それでは、小林さんへの質問です。先ほどの息子さんです。多分、これは、それこそ、シングルのままの息子さんがというケースも含めてでしょうけれども、確かに、今、シングル男性が増えていて、シングル男性が両親のケア

対象になって困難というのも、課題に入っているのではないかと思います。息子さんのケアのいろいろな問題についての対応策をお願いします。もう一つは、これは僕も聞きたかったのですが、ケアルームの開設にあたってのサポーター養成をどうされたのかです。これを実際に書かれている方は、被介護者を家に残しておけないので参加できないという形で、グループを抜けた方がおられるということなので、ケアルーム開設にあたっての体制、どんな養成で、どんな研修をしているのかのお話です。もう一つは、推進運営は包括支援センター、行政当局の事業なのか、ほっこりサロンなのかです。できる男の生活講座は魅力的な企画だと思います。テーマとなる講座の講師はどんなふうに統括されているかです。ケアサポーターの養成講座のプログラムはどんな内容ですか、かなり細かいところまでいっていますけれども、そのような質問が小林さんには来ております。お願いいたします。

小林：まず最初に、息子さんの介護です。ほっこりサロンのほうでも、開設当時は奥さまを介護されている人が圧倒的に多かったんですけれども、1年半ぐらいたってから息子さん介護が増えてきました。年齢層も、かなり下がってきた段階です。今は、4対6くらいの割合で、息子さん介護と奥さま介護の人数の割合になっているかと思います。息子さんの介護の難しさというのは、奥さまを介護されている方のお話を聞いていますと「今まで奥さんにいろいろ世話をかけたから、自分が介護をしないといけない」と言われる方がたくさんいらっしゃるんですけれども、息子さんは致し方なくてというのが最初のきっかけです。お父さん・お母さんは大好きなんだけれども、みる人がいないから、自分しかいなかったというところなんです。問題になるのは、ご兄弟がいらっしゃっても、ご兄弟が協力してくれないとか、奥さまを介護されている方はお子さんに迷惑をかけたくないとか、ご親戚に迷惑をかけたくないから自分で何とかしたいとおっしゃる方が多いんです。息子さんはお仕事をしながらとか、世代が若くなりますので、仕事が難しくなって早期退職される方がいます。そういった意味で、少し課題も変わってきていますので、対応もそれぞれいろいろありますので、変わってくると思います。すいません、お答えになっているかどうか分かりませんが。

ケアルーム開設のためのボランティア講座のほうなんですけれども、ケアサポーターの養成講座です。東京のNPOのアラジンというところに行かせていただいて、そこでケアサポーターの養成講座をされておられまして、そこのような大掛かりなことは私たちにはできないんですけれども、いろいろなイベントで子育ての部会では託児所や託児ルームがあります。でも、介護されている方は、イベントや講座でなくても、地域の中の落語会とか、ちょっとリフレッシュするようなところにも行けないんです。そういう介護者のお話の中で、一緒に来ていただいて、一緒に参加できたらいいんですけれども、1時間、2時間、安心してそこの講座を受けていただいたり、イベントに参加していただけるように思いまして、老人センターと協働でボランティア養成のために3回講座をいたしました。3回講座の中には、うちは地域包括支援センターということで介護の相談窓口でもありますので、現在の介護の状況はどうなっているのか、介護保険の制度はどういうことになっている、制度の中ではまかなえない問題がいろいろあって、介護されている人はこういうことで困っているということを3回に分けてやりました。その講座の中に、実際に男性介護者の方に来ていただきまして、実際こういうことで困ったことがあるという体験を話していただいて、終了後ボランティアとして登録していただきました。ケアルーム自体は、専門職とボランティアさんが一緒に遊んだり、ゲームをしたりという形で時間を過ごしていただいております。実際には、津止先生の講演会のときと、できる男の講座の時にケアルームを開設しました。その後、イベントがありませんでしたので、4月以降にまた再開予定なんです。ボランティアさんは11人ほど登録してされていまして、交代でケアルームにてボランニアをしていただきます。来て、一緒にお話ししたり、ケアルームの中には必ず専門職がいますので、専門職と一緒にいろいろなゲーム等をしていただきます。

それから、できる男の生活講座ですが、私たちはスキンケアについてですが、日々、いろいろな形で、介護者の方と被介護者の方のお世話をさせていただくことがあるんですけれども、男性が介護されている奥さまやお母様の顔がかさかさになっていたり、唇が切れていたりします。お聞きしたら、かさかさになってきたらニベアを塗るとか、唇が切れたらメンソレータムのリップを塗るというような話を聞いています。女は若いときから、ずっと化粧品にこだわってい

ますので、できたら普段の基礎化粧品を使って手入れをしてほしいなと思い、講師の先生をいろいろ探したんです。いろいろ企業を回ったのですが、なかなか講師料が高くて、講師の先生に来てもらえなくて、結局、まちの化粧品屋さんの店主に来てもらいました。化粧品屋の店主のおじさんだったんですけれども、化粧品の講習を受けて、ちゃんと勉強している人です。その方に来ていただきました。講師で、よく資生堂の奇麗なお姉さんが来て、いろいろやってくださったりする研修があるんですけれども、今回は町の化粧品屋のおじさんで身近な雰囲気で洗顔の仕方とか、顔の洗い方とか教えていただきました。質問の中には、奥さんがいっぱい化粧品を持っているけれども、これを一体どうして使ったらいいのか分からないとか、結構、質問が多くて、なかなか講義が進まなかったということがありました。

お洗濯、お掃除に関してですが、洗濯に関してはヘルパーさんの講師をされている先生に来ていただきました。皆さん、安ければいいみたいな感じで選んでおられたり、裏の説明書きとかをきちんと読まないことがありますので、洗剤の使い方、柔軟剤の使い方、洗い物によってどういう洗い方をするのかをやっていただきました。お掃除は、お掃除のプロに来ていただきました。すごく参考になったんけれども、マジックリンぐらいは名前をご存じの方も多いと思うんですけれども、住居用洗剤にもアルカリ性と酸性があって、汚れを落とすのにはアルカリ性・酸性の特徴を使って汚れを落とすという話で、講座を受けている人はすごく熱心にメモを取っておられて、質問もたくさんありました。

栄養に関してですが、男性のための調理教室は結構あるんです。皆さん、日々、お弁当ばかりでは飽きてきます。例えば出来合いのものを買うにしても、何をどう選んだらいいのか、栄養が偏ってしまわないようにと言うけれども、どう考えたらいいのというところから、献立を考えましょう、栄養のバランスの取れた食事について、栄養を考えましょうということです。これは大阪市の高齢福祉課におられた調理師さんに来ていただいて、講座をしていただきました。

運営については、地域包括支援センターが運営をしております。これは、包括業務の中でやらせていただきます。ただ、うちは社会福祉協議会が母体です。社会福祉協議会に場所の提供をしていただいて、包括業務として運営をして、世話人というのは専門職です。包括支援センターは看護師、保健師、それから

社会福祉士、ケアマネージャーという形で専門職がそろっておりまして、専門職が支援をさせていただいているのが特徴かと思います。

伊藤：はい、ありがとうございました。全体のご質問という方が何人かおられます。質問というかご意見で、今日はあまり出なかったのですが、認知症について社会的に誤解があるのではないか、テレビで取り上げているイメージで認知症を捉えているのではないかと頂きました。小さな変化も含めて、100人いたら100とおりの物忘れの経過があります。個別支援の前提となる初期段階の、認知症の疑いの段階から対応することが必要なのではないか、介護支援をもっと認知症のイメージをされたほうがいいのではないか、そのとおりだと思います。これはご意見という形で承ります。

お二人の方から、職場において、もし自分の身近に、同僚や部下に介護の問題が生じたときに、団体としてどう対応するか、個人としてどういう対応をするかというお話がありました。もう一つが、管理職に対する教育、アプローチが必要ではないかというご意見と、ある面、職場における対応ということで質問が来ています。管理職については全くそのとおりで、今、やっと管理的な職に就いている人たちに対する男女共同参画の視点からのアプローチがやっと語られ始めて、京都市も始めているのではないかと思います。ただ、これは、まだまだ後手に回っている部分です。これは、介護の問題もそうですし、育児の問題もそうですし、全般に至って管理する方たちにどうやって意識を変えてもらうかというアプローチが、やっと始まったばかりですけれども、これは上のほうからやる以外にないかと僕個人は思います。

もう一つは、身の回りに介護の問題をするときに、あなたの団体、あるいは組織、あるいは個人としてということです。京都大学には、一応、男女共同参画推進室がございまして、そこでは介護についての法制度の情報提供であったり、研究者だけなんですけれども、介護や育児が必要な研究者に実験補助のお金を出して、年間1,500万くらいお金が掛かっているんですけれども、介護や育児で忙しい状態の人には補助する形でサポートするものをつくり上げています。あるいは、先週の土曜日にやっていたのですが、大学として独自に介護の講座を、教職員、あるいは学生も含めて提供するような形で、微々たる動きで

すけれども、組織として介護の問題に対してそれなりに対応し始めていると思います。ワークライフバランスが、企業の業績や企業の組織力にプラスなるんだということを、管理職的な立場に立っている人たちに伝えることが大切なのかなと思いました。ほかには、地域連携のお話と防災をお願いします。

小林：地域連携のところで言いましたら、各市町村、それから各地域包括、私は大阪市なんですけれども、国のほうでも、去年、オレンジプランというものが出まして、そこで、医療、介護、福祉の連携がうたわれています。そこにも家族支援が必要だという話とか、国の制度として認知症の方や家族が安心して住めるまちづくりの推進ということで、方針が出されています。それに伴いまして、高齢者、障害者や子どもたちが安心して住めるまちづくりを目指しながら、行政と地域包括、つまり各関係機関です。今、住吉区でも、大阪市内でも、医師会とか薬剤師会、介護の関係者、種々の関係者が集まりまして連携を取っています。地域や民生委員さんも地域で連携を取って動いております。

防災なんですけれども、各市町村、町会単位で、防災時に孤立世帯がないようにという働き掛けを、私たち地域包括も一緒になって取り組んでいるところです。

伊藤：ありがとうございました。そろそろ時間なんですけれども、もう一つ、これは小林さん以外にということで、男性介護者という視点で、それぞれの持ち場でどんなことを考えるかというご意見です。これは、それぞれに聞いていると時間がなくなるかなと思いますので、僕のほうで個人的な意見としてまとめさせていただきたいのですが。今、小林さんのお話にもありましたように、介護の問題で、1つは促進にはワンストップ化が必要です。できるだけワンストップで支援できるような仕組みです。今、小林さんがおっしゃっていたお話なんですけれども、主にそれを支えるネットワークが、やっとそれが動き始めている段階かなと思いますので、社会サービスの面ではつくっていくことは前提だろうと思います。昔、男女共同参画の講演会というと託児ルームがあったように、ケアルームつくられていければと思います。

先ほどの小林さんのデータで、実際に現場の中では、つらいから辞めたいと

いう人が過半数、病気持ちの方も７割ぐらい、そういう老老介護の状況があるわけです。それに対してどういう答えがあるのかは、大変難しいだろうと思います。社会支援を求めることは当然なんですけれども、特に男性がということになると、介護やケアに慣れていないというか、そもそもそれが理解されていない男性たちが介護に入っていく、技術面の問題は小林さんのところでやっておられることだろうと思います。

あとはメンタルの問題は、男性相談の形で、先ほどのデータですと、介護は項目に入っていない段階だと思いますけれども、先ほどの団塊の世代にはないではありませんけれども、これからは介護という項目が出てこざるを得ないです。京大でも以前は講演会で育児問題ばかりをやっていたのですが、今は同じ立場で介護の講演会が行なわれていて、いろいろ広報し始めるようになっています。介護がクローズアップされてくる､それに対する相談もあると思います。

同時に、今日、私が、一生懸命、申し上げたのは、男性たちはコミュニケーションが苦手な方が多いです。同時に、いつも強がっていて自分の弱さと向い合えない、弱さと向かい合いながら弱さを人に伝えられる力も必要になってくるのではないかと思います。もちろん、今日は、弱さと向き合っておられる方も多いだろうと思いますけれども、多数派はまだまだ相談する力はなかなかないという状況で、それにどういう働き掛けをするのかというのが、今の１つの課題だったのかなと思います。それが、男性相談でやっと動き始めているということです。つらいのは分かるんですけれども、つらさの中でそれを個人でどう捉えるかという問題も、慣れてないが故に、これは男性がすごく苦手なことでもあるんです。落合恵子さんがおっしゃったことで、昨日聞いた話で、思い出したんですけれども、落合さんは介護されていて、お母さんが認知症で、ときどきお母さんの顔にいたずらをするんです。「毎日、小さなお祭りをする」というふうに彼女は言っているらしいですけれども。つらい中で、ちょっと遊びをしてみる、お祭りをしてみるみたいな工夫です。それも男性は苦手なんですけれども、日常生活で「花が奇麗だ」「今日は空が青い」とか、こんなことで解決にならないことは分かっているんですけれども、小さな発見や奇麗なことを見ることは、問題解決にはつながらないものではあるんですけれども、生き方の工夫です。言葉や理念ではなくて、気持ちがほっこりするような工夫が

男性介護には必要なってくるのではないかと僕は思っています。

時間がオーバーしてしまって、皆さんの質問に十分に答えたことにはならなかったかもしれませんけれども、それについて不満は後で津止さんにぶつけていただければと思います。

これで、私のほうのシンポジウムは終わりとさせていただきたいと思います。ご協力、どうもありがとうございました。

津止：伊藤先生、どうもありがとうございました。1時から始まって、あっという間に4時半、3時間半が過ぎ去りました。

今日のシンポジウムを私たちのほうで少しまとめさせていただいて、男性介護の視点から、なぜ男性支援というテーマが生まれてきたのか、あるいは男性支援というテーマと私たちが暮らす社会構造上の関連を報告しながら、これから先ほどの課題を探ってみたいなと思っています。

伊藤先生のお話の中で、長い歴史的な背景の中で、女性の問題から、今度は男性のさまざまな課題に、この社会は行き着くのではないかと予想されてきたというのが、20年前でまで提示されていましたけれども、今、そういう結果が出てきていますよね。男性の課題を私たち自身が議論して、法に定めれば、男女問わず生きやすい社会を実現することが可能です。男性が抱えている課題と女性が抱えている課題をともに解決すう方法を私たちは指し示すことが可能ではないかと、そんなことを思ったりもするわけです。男性介護者というテーマでの議論から、介護する人もされる人も、さらには男性も女性も含めて、介護に関わるすべての人と社会について、希望のある明るい未来への展望にまで広がる議論を頂いたのではないかと思います。

先ほどの質問票に、私のほうにも質問を頂きました。家族介護者だけではなくて、20代、30代、40代の若いケアメン、仕事として介護を担っている方々もたくさんいらっしゃいます。そういったことを考えると、世代を超えてということは、家族の介護もするし、仕事としての介護もする、その2つをブリッジできるのではないかという、そんなことも忘れてほしくないというご意見もありました。確かに、そうだと思いました。介護を真ん中に置いて、皆さまと一緒に社会を考えます。介護のことで、あらゆる社会政策が検証される時代で

す。それが今の高齢社会が直面している課題だろうと思っています。私たちは、そこもぜひ頑張ってみたいなと思いますけれども、皆さま方も一緒に地域の中で介護に声を上げて、小さな声が大きく束ねられて初めて社会の土台が動いていくんだろうと思いますので、道は厳しいかもしれませんけれども、私たちの取り組みは将来につながる道だと確信を持って頑張っていきたいと思っています。

今日の男性支援の可能性は、そういったことを言いたかった、確認したかったことですので、皆さまと一緒に、もう一度、振り返りながら、これから後のプログラム、そして明日のプログラムに入っていきたいと思います。伊藤先生とパネラーの皆さま、本当にありがとうございました。もう一度、大きな拍手をお願いします。

今日のシンポジウムは、以上でお開きにします。この後、5時から、全国から集まっていただいている男性介護者の会や集いを主催している皆さま、ケアメングループの皆さまとの意見交換会を用意していますので、5時からになりますので、それまでは自由に交流していただければ結構かと思います。どうもありがとうございました。

Ⅱ．ケアが拓くコミュニティ
―「ケアメンサミット JAPAN」の実践から―

津止正敏・西田朗子

はじめに
1.「ケアメンサミット JAPAN」開催の背景と目的
2.「ケアメンサミット JAPAN」の実行体制
3.「ケアメンサミット JAPAN」のプログラム
4. ケアメングループの活動実態
―プロフィールシートから―
5. ケアメングループ組織化の意義
―プログラム開発とケアコミュニティ―
資料 1―「ケアメンサミット JAPAN」参加者アンケート結果
資料 2―「ケアメンサミット JAPAN Ⅰ・Ⅱ」参加団体一覧
資料 3―「プロフィールシート」

はじめに

今年は「男性介護者と支援者の全国ネットワーク（男性介護ネット）」が発足して5周年という節目の年となりました。5年前（2009年）の3月8日、女性に「パン（経済）とバラ（尊厳）を」をスローガンとする国際女性デーの日に、奇しくも私たち男性介護ネットは発足しました。新しい介護社会の建設に男女が共に手を携えて歩んでいこうと決意を固めた日です。女性たちにならって介護する男性の分野でも「パンとバラ」のスローガンを掲げようとも思いました。

それから5年。介護保険制度はその改定の度に窮屈さを増し、虐待や心中など不幸な介護事件は後を絶たずにむしろ深刻化が指摘されているように、この社会の抱える介護問題に正面から向き合おうとしない反介護の政策や実態も広く深く残っています。しかし、それでもこの短い期間にもかかわらず劇的に変化したことも数多く生まれています。新聞、テレビ、雑誌、映画、イベント等々まさに「介護ラッシュ！」ともいうような介護への社会的関心の広がり、育児とともに介護と仕事の両立を課題とするワーク・ライフ・バランスの浮上、ケアする人のケアともいうべき介護者支援法や「介護退職ゼロ作戦」という新しい社会運動の登場等々、私たちのささやかな問題提起がわずかながらも貢献したことも少なくありません。

この5周年という節目の年を記念して、私たちはWAM（独立行政法人福祉医療機構）の平成25年度助成事業の支援を得て「ケアメンサミットJAPAN」と称する大きな啓発イベントに取り組みました。本稿では、この助成事業を振り返りながら、その成果と課題を確認し、これからの介護する男性（ケアメン）たちのネットワークの意義やその展望を記して、本事業の総括と報告としたいと思います。

1.「ケアメンサミット JAPAN」開催の背景と目的

①ケアメンとそのグループの急増

この事業の企画段階において当初私たちが掌握していた各地のケアメングループ（男性介護者組織）は約 50 団体でしたが、その後「ケアメンサミット JAPAN」の開催にむけて実施した事前調査などを通して、各地に 100 を超えるグループが活動していることが判明しました。この実数の把握事態も今回の助成事業の大きな成果の一端ですが、各地の関係者に呼び掛けて、まずは各地に生まれ活動を始めている「ケアメングループ」との交流機会をつくり社会啓発の一環としていこうと企画したのが今回の「ケアメンサミット JAPAN」でした。男性という新しい介護者の知恵と経験を集約・交流し社会の共有財産として蓄積していくことが可能となるのではないか。また、抱え込みや孤立等という男性介護者に顕著な諸課題がフォーカスされることによって生まれる政策効果も期待されるのではないか。さらにこのサミットを通してケアメングループとその活動を全国各地の自治体・地域に広げていく契機ともなるのではないか。そして、男性の介護者のみならず全ての家族介護者と被介護者の福祉向上に寄与するのではないか、等々幾つかの仮説設定を行いながらこの事業に取り組んできました。

認知症や難病、寝たきりなど心身に障害のある家族を介護する人は、これまで長い間「介護者」という一般語で括られてきました。介護する人は、以前はその殆どをそしていまでもなお多くを女性たちが担っているのに、けっして「女性介護者」とは呼ばれることはありませんでした。介護者といえば女性であることを言わずもがなに語っていた時代の反映だと思います。しかし、いまや主たる介護者の 3 人に 1 人は男性、その数 100 万人を超えるまでになりました。介護する男性を主要なターゲットとする私たちの男性介護ネットも発足し、それを前後して「男性介護者」という新しい介護者に関心が集まり始めました。イクメンに倣って名付けられた「ケアメン」への認知も広がり、各地にケアメンを冠したグループや集い、講座などのイベントも盛んに開かれるようになりました。こうした会や集いを主宰する者は私たちが 2013 年 10 月に行った調査によればおよそ 100 か所にもなります。これはもう「事件」です。

そこでは自らの介護体験を語り、またその話に耳を傾ける多くの男性介護者が参加し、配偶者や親の介護をテーマに談義を重ねています。希望もあれば絶望もある喜怒哀楽をないまぜた赤裸々な男性介護者という私を、介護者になって初めて出会ったばかりの他者に「晒し」ています。介護はおろか家事もできない、時間も体力もない。仕事、家計の不安も無縁ではありません。私を語りそして助けを求めて弱音を吐く、というコミュニケーションは、これまで強い自分の売り込みに専念し社交辞令に終始してきたビジネスマンの交流文化にはなかった場面ではないかと思います。介護が仲介する新しいコミュニティ（ケアコミュニティ）の誕生といってもいいのかもしれません。弱さを晒し弱さを受容し互いに讃え合うような交流場面です。多くの市民や援助職のボランティア支援を得ながら、小さなケアメングループが各地に生まれています。この点在するケアメングループのネットワークを如何にして図っていくのか、そしてその組織化の意義はどこにあるのか、このこともまた「ケアメンサミット JAPAN」で問われた論点でありました。

②「想定外の介護実態」の広がり

「ケアメンサミット JAPAN」や各地のケアメングループとの交流を通して、「想定外」ともいうべき新しい介護実態がこの社会に広く深く浸透しているのではないか、と思われます。①介護者モデルの変容、②新しい介護ニーズの登場、③あらゆる社会政策への介護問題の波及、④新しい「生き方モデル」としての介護、という 4 項目が「想定外の介護実態」の指標になると思います。

〈介護者モデルの変容〉

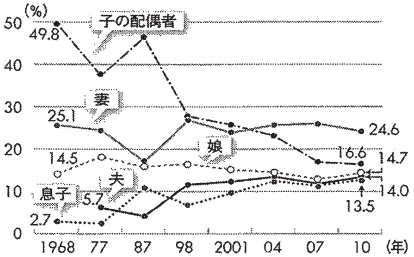
日本で始めて全国規模での介護調査（寝たきり老人実態調査）が行われたのは 1968 年、公害や都市問題など高度経済成長の矛盾が噴き出し、家族の内部

に深く沈殿していた育児や介護の問題がようやく社会化しつつあった時期です。68年の介護調査では寝たきりなどの被介護者はおよそ20万人と推測され、介護者は子どもの配偶者（ほぼすべてが嫁）が全体の49.8％を占めており、次いで配偶者（ほぼ妻）が25.1％、娘が14.5％、と介護者のうち女性が占める割合はほぼ9割以上を占めていました。「若くて、体力もあり、家事や介護のスキルにも不自由なく、介護に専念できる時間も、介護を引き受けるという強い規範もある」という家族が在宅にしっかりと存在しているという時代のことでした。

この介護者役割の女性モデルは、男は仕事、家庭は女性というジェンダー規範の結果でもあり、同時に家族のリスクマネジメントの結果をも意味していました。家族の介護が必要となった時に誰が主たる介護の役割を引き受けるか。そのことによって最も介護リスクを最小限に押し留めることが可能な家族は誰か、という介護者役割の選択性という機能が作動し、主たる介護者として無業者や低賃金労働者としての家族（専業主婦、嫁、妻、娘）が押し出されて、家族の安定を図ってきたのです。

それからほぼ40年。介護者は激変しました。介護者役割の選択性は機能しなくなり、半数を占めていた子どもの配偶者（嫁）は16％にまで減少しています。主たる介護担い手からの嫁の劇的な撤退をその裏側で引き受けてきたのが、夫や息子といった男性であったといえましょう。

増えているのは老老・男性・有業者・家計の大黒柱・遠距離・認認・別居・シングル・兄弟姉妹・孫・甥姪等といういわば在宅介護の備えを欠く「弱い」介護者であるにもかかわらず、現実の介護政策がいまだに拠って立っているのは「嫁・女性」という従来の介護者モデル（若くて体力もあり家事・介護スキルも豊富で介護者役割を厭わない介護者）」なのです。2010年に発足した日本ケアラー連盟が、



同居の主たる介護者の続柄別年次推移

出所：1987年までは全国社会福祉協議会調査、1998年以降は国民生活基礎調査（世帯票）。いずれも「その他家族」は除く

介護される人はもちろん介護する人にも社会の支援を可能とする介護者支援の根拠法の制定を提起していますが、このような介護者モデルの変容を背景にしています。同居家族がいるからといって介護万全どころかむしろ共倒れしかねない家族なのです。

〈新しい介護ニーズと社会政策〉

男性介護者だからこそ可視化しえた新しい課題もあります。前項の介護者モデルの変容とも重なりますが、介護は「入浴・排せつ・移動・食事」の課題だけではなく、生活丸ごとの課題に連関し、介護問題として炙りだしていきます。炊事・掃除・洗濯・買い物といった家事の課題もあれば、介護が始まれば収入は激減し逆に支出は増えるという家計にも直結します。親族や友人、知人、地域でのコミュニティとも疎遠になり孤立の問題もあります。介護が起点となって生活の基盤そのものを揺るがしかねないという事態に不安が広がっています。

介護と仕事の問題もその一つです。数年前、懸命に働いているのに貧しさから抜け出せない人たちをして「ワーキングプア」という言葉が生まれ、いままた同じ「働く」をテーマとする「ワーキングケアラー」という新たな社会現象が問題化しています。

総務省の平成24年版就業構造基本調査の報告書に驚きました（2013年7月発表）。5年に一度実施される大規模調査ですが、そこにはいま介護しながら働いている勤労者は290万人、うち男性が130万人、女性が160万人。60歳未満が約200万人というショッキングな数字が並んでいます。そして過去1年間（平成23年10月～24年9月）に家族の介護のために離職した人は10万1千人、5年間では48万7千人に上ります。

この社会はこれまで介護や貧しさを、働くということとは全く無縁のように扱ってきたはずです。真面目に働きさえすればその「リスク」はほぼ回避されたはずです。ワーキングプアの衝撃は、働くということがいまや貧しさのリスク回避になりえないという非常な現実を、具体性を持って提示したことにあります。働いていないわけではなくむしろ懸命に働きながらも貧しさに喘ぐ若い世代の惨状やブラック企業批判と共に瞬く間に世に広まっていきました。

介護も同様です。介護に専念する人と、家計の大黒柱として就労する人がそれぞれに存在することが家族として当然視されてきました。各自それぞれに家族内の分業があり、豊富な家族資源の合理的な割振りを通して、家族に生ずる「リスク」を何とか最小限に封印してきました。苦しいながらもそのことが逆に家族の結束を補強するシステムとしても機能していたのです。介護者役割を割り振られる側にも割り振る側にもそれ相応の犠牲を強いてはいたがこのシステムが機能している限りにおいて介護と仕事は家族内において統合されてきたと思います。これが私たちの脳裏に刻まれた介護するということと働くということの関係でした。でもこの記憶はもはや常識でも現実でもそして何ら合理的でもなくなったようです。社会に深く浸透している介護と仕事の分裂という重いリアルがあります。

しかし、です。貧しさと違って介護は絶対にリスクであってはならないのだと考えます。「貧困撲滅！」というスローガンは道理も正義もあります。社会的な合意形成も可能でしょうが、介護はそうはならないでしょう。「介護をなくそう！」というスローガンが介護「する／される」という介護当事者はもちろん、多くの市民の共感を呼び込むことはあるでしょうか。否。その主張を容認し正当化すればひとり高齢者だけでなく障害のある人や難病や精神を病む人も一様に劣化市民とみなし排除する思想に連結されるからです。だからこそ、仕事と生活の調和（ワークライフバランス）が強調され、「介護退職ゼロ作戦！」という新しい社会運動が立ち上がるのです。在宅、施設を問わず「介護のある

介護しながら働いている人

（千人）

		総数	40歳未満	40～49歳	50～54歳	55～59歳	60～64歳	65～69歳	70歳以上
有業者総数		64,420.7	24,601.5	14,640.4	6,363.4	6,141.5	6,120.2	3,201.6	3,352.0
介護している	有業者	2,910.2	319.8	534.2	515.6	619.7	546.7	213.3	160.9
	うち雇用者	2,399.3	296.9	481.5	460.3	528.0	417.4	138.3	76.8
男	有業者	1,309.2	143.3	216.6	197.2	276.0	277.5	113.4	85.1
	うち雇用者	1,026.9	129.4	191.1	171.9	225.8	203.2	66.9	38.7
女	有業者	1,601.0	176.5	317.7	318.4	343.7	269.2	99.8	75.8
	うち雇用者	1,372.3	167.4	290.4	288.4	302.2	214.2	71.5	38.2

出所：平成 24 年度就業構造基本調査（総務省）より

社会」こそ、この社会のスタンダードとなるべき社会モデルです。

〈「新しい生き方モデル」としての介護〉

100万人を超える男性のこうした仕事と介護、暮らしの実態が教えていることは、男性も女性と「同じように」介護しようということではないということです。これまでの女性たちが担ってきたように無制限且つ無償の家族介護労働によってのみ成り立ってきた介護のスタイルとシステムをただなぞっていくだけでは、いまこの社会が抱えている深刻な介護問題はけっして解決しないと思います。介護者を生きるという男性の新たな生き方モデルは、この社会の「これまで」と「これから」を画するようなインパクトの大きな創造性豊かな新しい生き方モデルに連なっていくはずです。介護する／されるということを至極当たり前のように社会の五臓六腑に埋め込んでいくという、巨大なプロジェクトにもなり得るのです。「いま・ここ」の葛藤の中にこそ未来に繋がる希望があります。

私たちが提起している「ケアメン」というスローガンも各地で散見されるようになりました。介護を、辛くて大変、出来れば避けたいということではなく、育児や介護など家族のケアに接続可能な生き方・働き方こそ実は人生を豊かにできるのではないかというポジティブメッセージと共に広がっていけば嬉しい限りです。

男性介護ネットもその仕掛け人の一人となった介護者支援と「介護退職ゼロ作戦」という一つ一つの活動の芽出しに確信をもって、引き続き取り組みを強化していこうと思います。

2.「ケアメンサミット JAPAN」の実行体制

事業実施に係る課題の把握、整理、検討及び事業の進捗管理を行うために、男性介護者と支援者の全国ネットワークの運営委員を中心に下記の実行委員と各地の連携団体の体制を組織して事業推進にあたってきました。

①委員の構成

・委員長：荒川不二夫（本会代表）

・委員：津止正敏（本会事務局長・大学委教員）・望月裕子（本会副代表・ケアマネジャー）・鎌田松代（本会副代表･福祉施設管理者）・内山順夫（本会副代表･社協職員）・鈴木訪子（本会運営委員・社協職員）・宗利勝之（本会運営委員・福祉施設職員）・松村美枝子（本会運営委員・看護師）・手島洋（本会運営委員・大学教員）・斎藤真緒（本会運営委員・大学教員）・福田遊（本会運営委員･社協職員）・熊谷紀良（本会運営委員・社協職員）・西野玲子（本会監事）・西山良孝（本会監事・NPO 理事長）、

②連携団体とその役割

・荒川男性介護者の会（東京）：サミット広報及び代表の派遣。東京でのプレイベントの開催に協力する。

・男性介護ネット甲信越ブロック（事

〈私たちのメッセージ〉

全国 100 万人の男性介護者に、いま・ここに介護を生きる仲間として連帯のメッセージを送ります。

1. かたろう！男の介護
2. つたえよう！私の介護体験
3. ひろげよう！介護の仲間と集い
4. かえよう！介護保険と介護休業
5. なくそう！介護退職と介護事件

私たちは「介護の日」を記念し、この5つのスローガンを掲げて「ケアメンサミットＪＡＰＡＮ」を開催しました。介護によって仕事が断念され暮らしが破壊されることなく、その両立を目指す取り組みを、私たちの重要なミッション（使命）と確認しました。「介護退職ゼロ」の雇用環境と、「介護する人・される人」を社会で支える包括的な介護支援制度、の実現です。介護される人の幸せも介護者の幸せも共に尊重される社会でなければなりません。今回の「ケアメンサミットＪＡＰＡＮ」をその第１歩として、私たちのミッション（使命）を全国に広げていくことを宣言し、〈私たちのメッセージ〉とします。

錦秋の京都から
2013 年 11 月 17 日
男性介護者と支援者の全国ネットワーク・ケアメン☆サミット JAPAN 参加者一同

務局シルバーバック）：サミット広報及び代表の派遣。長野でのプレインベント開催を担う。
・男性介護ネット九州ブロック：サミット広報及び代表の派遣。九州（福岡）でのプレインベント開催を担う。
・男性介護ネット北陸ブロック（連絡先みやび、富山県）：サミット広報及び代表の派遣。
・男性介護研究会（京都、立命館大学）：サミット広報及び代表の派遣。ケアメングループの実態調査。・男性介護者を支援する会（京都）：サミット広報及び代表の派遣。全国の参加者の接遇。
・男性介護者支援ネットワークひょうご（兵庫）：サミット広報及び代表の派遣
・北海道男性介護者の集い（札幌）：サミット広報及び代表の派遣

なお、連携ということでは、上記以外にも男性介護者と支援者の全国ネットワークに関係する団体・個人から情報や資料委提供、イベントへの参加など多大な支援があったことを記しておきます。

3.「ケアメンサミット JAPAN」のプログラム

上記の背景と目的をもって開催された「ケアメンサミット JAPAN」の概要を記します。「ケアメンサミット JAPAN」は、参加状況を勘案して当初の計画（2013 年 11 月）を変更し、2013 年 11 月 16 ～ 17 日と 2014 年 3 月 8 日～ 9 日との 2 回に分けて開催しました。WAM の助成金によって、旅費と宿泊費を用意しての招待という費用負担の軽減もあり遠隔地からの参加団体も多数ありました。

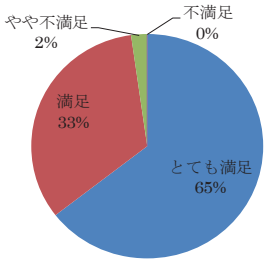
私たちは「本会が掌握する各地のケアメン・グループ（男性介護者組織）は 50 を超える関係者に呼び掛けて、我が国初めての「ケアメンサミット JAPAN」を実施する事業である」と助成申請書に記載したのですが、今回の助成事業推進のなかで、当初予測の倍にも上る 100 か所のケアメングループが把握できたことは驚きでした。その後も情報提供等の交流が可能となっていますが、このグループリストは別稿の資料（2 分冊）に掲載しています。このうち 46 グループが今回の「ケアメンサミット JAPAN Ⅰ・Ⅱ」の両方あるいはいずれかに参加し、新しいネットワークの基礎づくりができたとの実感を得ることが出来ました。この 46 グループの取り組みが各地に広がってさらに大きなネットワークに発展していくことを切に期待しています。

男性介護ネットとして、これまで組織的な関係を持つことはおろかその活動を把握することすら出来ずにいた団体関係者からの参加もあり、文字通り初めての全国的な規模での交流会となりました。評価アンケートには「団体と交流が出来た」「課題を共有した」「運営や交流の工夫や知恵を学んだ」「継続して開催して欲しい」等々という声が多数あがり、圧倒的に支持されたように思います。2013 年 11 月に開催した「ケアメンサミット JAPAN Ⅰ」参加者で、前頁に掲載した〈私たちのメッセージ〉を採択し共有したこともこのサミットでの大きな成果でありました。このメッセージの中に介護する男性と在宅での介護者の課題がすべて集約されていると自負しているところです。

①「ケアメン☆サミット JAPAN Ⅰ－介護退職ゼロ作戦！フォーラム 2013 －」

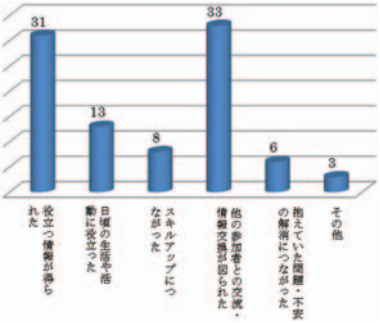
この取り組みは「全国のケアメン・グループの知恵と経験を交流して、全国

各地にケアメン・グループとその活動を広げるための啓発を行い、男性介護者及び家族介護者への支援方策の開発に寄与し、男性介護者の課題に関する一大啓発イベントとする」ことを目的に開催しました。チラシやポスターの作成や、マスコミにも積極的にリリースすることによって、男性介護者の課題に関する一大啓発イベントとなりました。ご案内した100団体のうち、34団体の参加があり、意見交換会やグループワークでは認知度を高めるための工夫や会員募集の方法、役に立つプログラムの開発、グループマネジメントの方法などこれまでの経験の疲労やいま直面している困難な課題などについて熱心に議論を重ねることが出来ました。

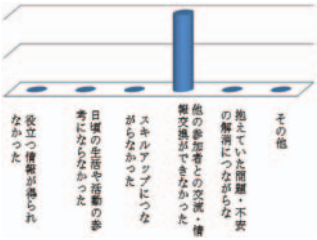


グループ代表者交流会について

参加者の満足度も高く、右表は11月17日（日）開催のプログラム「ケアメングループ代表者会議（グループワーク、現状と課題）」の参加者アンケート結果では、「とても満足」65%、「満足」33%と合わせると98%にも上ります。満足とする中身は「他の参加者との交流・情報交換が図られた」に尽きるようで、不満なこともまた「他の参加者との交流・情報交換が図られた」にあるというアンケート結果からすれば、徹底した交流・情報交換のプログラムの拡充と工夫こそがニーズであることを示しています。アンケート自由記述欄には「毎年実施を希望します」「方法には異なりがあっても、志は皆同じだと感じる」「日本が抱える



どのような点が良かったか
（複数回答）



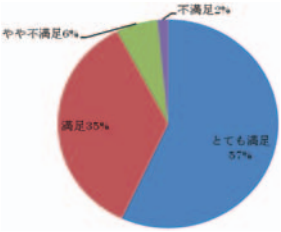
どのような点が良くなかったか
（複数回答）

課題がリアルに情報交換できた。地域により実情が異なること」「次回はこの情報交換会に多くの時間をとってもらいたい」等々強い支持と共感の声が溢れています。アンケート結果の全体詳細は巻末の資料1に開催してありますので、ぜひ参照してください。

〈プログラム〉
日時：2013年11月16日（土）～17日（日）
場所：コープイン京都（11月16日（土））、
　　京都府立総合福祉会館（11月17日（日））
(1) 11月16日17時～18時30分：ケアメングループ意見交換会
(2) 11月16日（土）19時～21時：ケアメングループ懇親会
(3) 11月17日（日）11時～12時:ケアメングループ代表者会議（グループワーク、現状と課題）
(4) 11月17日（日）13時～16時：「介護退職ゼロ作戦！フォーラム2013」
　　＊基調講演「男性介護ラッシュが職場を変える！」渥美由喜氏
　　＊リレートーク「私の介護と仕事」5人の報告
(5) 参加団体数：34団体
　　参加者数：2日間述べ約250人

②「ケアメン☆サミットJAPAN Ⅱ－男性介護ネット5周年記念事業－」

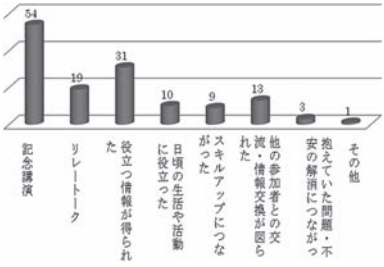
2014年3月には2013年11月に引き続いてのサミットを開催しました。特に今回は、男性介護ネット5周年事業とタイアップしての記念すべき取り組みとなりました。ケアメングループの調査に活用したプロフィールシートに基づいて全国の「ケアメン・グループ」の活動実態や課題について報告し、知恵と経験を交流して、全国各地に「ケアメン・グループ」とその活動を広げるための啓発としました。3月8日にはシンポジウムとして「男性支援の可能性」を開催し、いまなぜ男性支援か、



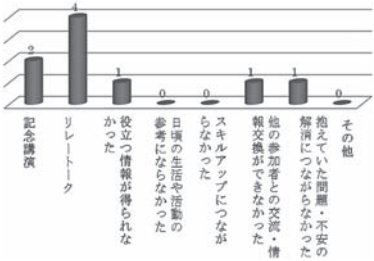
男性介護ネット5周年
記念事業について

を男性学第１人者の伊藤公雄氏の基調講演をもとに議論を深めてみました。また翌９日には樋口恵子氏を迎えこれからの男性介護の課題を整理し今後の展望を語って頂きました。

右表は３月９日（日）開催のプログラム「基調講演とリレートーク」の参加者アンケート結果ですが、「とても満足」が57％、「満足」が35％と圧倒的な支持を得ています。介護する男性への支援方策の開発に寄与し、介護の課題に関する一大啓発イベントとなりました。チラシ、ポスター及びマスコミリリース等によって宣伝したことも大きく貢献したものと思います。



どのような点が良かったか
（複数回答）



どのような点が良くなかったか
（複数回答）

〈プログラム〉

日時:2014年３月８日（土）～９日（日）

1）2014年３月８日（土）13時～16時半@キャンパスプラザ京都５階第１講義室

＊男性介護研究会シンポジウム「男性支援の可能性－世代をこえた連帯の地平」

育児、介護、地域活動の分野で、主に男性支援に取り組む活動主宰者からのレポートを基に、「今なぜ男性支援なのか」を男性学の第１人者である伊藤公雄氏の基調講演とコーディネートで明らかにするシンポジウムを開催した。

＊基調講演（13 時～ 14 時）「いま なぜ男性支援か」
伊藤公雄氏（京都大学大学院教授、ジェンダー論）
＊シンポジウム（14 時～ 16 時半）
ファザーリング・ジャパン関西、おおつ男性会議、京都における男性電話相談、介護する男性支援（住吉ほっこりサロン）、コーディネーター伊藤公雄氏

2）2014 年 3 月 8 日（土）17 時～ 18 時@キャンパスプラザ京都 5 階第 1 講義室
男性介護者交流会・ケアメングループ交流会

3）2014 年 3 月 8 日（土）18:30 ～ 21:00 @京都タワーホテル 6 階宴会室
男性介護ネット 5 周年前夜祭「懇親・交流会」

4）2014 年 3 月 9 日（日）9 時～ 10 時半@キャンパスプラザ京都 5 階第 3 講義室
男性介護ネット運営委員会

5）2014 年 3 月 9 日（日）10 時半～ 12 時@キャンパスプラザ京都 4 階第 3 講義室
男性介護ネット第 6 回総会

6）2014 年 3 月 10 日（日）13 時～ 15 時半@キャンパスプラザ京都 3 階第 3 講義室
男性介護ネット 5 周年記念式典
＊基調講演「ケアメンのこれから」樋口恵子氏（高齢社会をよくする女性の会理事長）
＊ 5 周年振り返り＆リレートーク

7）参加団体数：42 団体
参加者数：2 日間述べ約 250 人

③「プレ・ケアメンサミット JAPAN」企画

1）男性介護ネット第 3 回九州ブロック交流会：2013 年 10 月 20 日（日）福岡市

2）長野・甲信越ブロック交流会：2013 年 10 月 26 日（土）長野県上田市

3）「介護者支援で繋がろう」東京都ボランティア・市民活動センター：2014 年 1 月 18 日（土）東京都新宿区

4. ケアメングループの活動実態―プロフィールシートから―

今回の大事な事業目的の一つに全国に拡がっている「ケアメングループ」の実態把握の調査事業がありました。この調査は、どこにどのくらいのグループがあって、どのような取り組み（プログラム）を行っているか、その活動を広げ発展させていくために求められていることは何か、等々の実態と課題を明らかにしつつ、交流とネットワークを図っていくことを目的にして、2013年10月から2014年2月にかけて男性介護研究会（立命館大学人間科学研究所）と共同で実施したものです。以下、この調査で回収してきた「プロフィールシート」をもとにその実態に一旦を記してみたいと思います。

①ケアメンサミット参加団体のプロフィール

「ケアメンサミットJAPAN Ⅰ・Ⅱ」に対してプロフィールシートの提供を頂いた団体は40団体、この中には研究団体や行政機関が2団体含まれています。

まず、活動地区をみていくと、北海道・東北が3団体、関東8団体、甲信越2団体、東海・北陸6団体、近畿10団体、中国・四国7団体、そして九州が4団体ありました。

設立時期は、「認知症の人と家族の会福岡県支部」が1982年と最も古く、最も新しいのは2013年の3月の「男性介護者のつどい」（福井県）です。2010年から2013年の間に19団体が設立されており、2010年代に入ってから急激に増えています。

設立のきっかけは、個人が呼びかけたケースが10団体と最も多く、地域包括支援センターの呼びかけが3団体、デイサービスなどの家族の会の中から始まったところが3団体あるほか、認知症の人と家族の会の中から始まったところ、保健所のワーカーの呼び

かけ、民生委員有志の呼びかけ、社会福祉協議会の「介護者のつどい」をきっかけに集まったところもあり、男性介護ネット事務局長の講演がきっかけというところも2団体あります。

個人が呼びかけたケースは、ご自身が介護の経験をされ、男性介護者への支援の必要性を感じられたことが設立の動機となっています。

会員数は、20人以下の団体が13団体あり、20人～100人未満が8団体あり、男性に限定せずに集まっておられるところは100人を超えている団体もあります。会員制ではなく、その都度参加する形式を採っているところが2団体あります。「いつでも自由に参加できる」という敷居の低さを大切にしているようです。

どのような人が参加されているかというと、ほとんどの団体に介護当事者だけでなく、介護OB、専門職が関わっています。介護当事者は夫と息子が圧倒的に多いですが、親と孫がそれぞれ1名ずついます。中には介護当事者よりも介護OBの方が多い団体もあります。専門職は介護施設職員、介護支援専門員（ケアマネージャー）、保健師、医師、社会福祉士などが関わっています。他にも、認知症当事者、自治会役員や民生委員、市会議員との関わりがある他、女性（主婦）も関わっています。

活動内容は、例会、座談会、カフェなど名称は様々ですが、集まって介護のことや日々のことを話しあう形式のものを月1回されているところが16団体あり、月2回されているところも7団体あります。他の活動は、料理教室や介護制度について等の学び、地域のイベント参加などがあります。大きな団体では、相談事業を業務委託されているところもあります。

活動資金は、お茶・お菓子代を開催のたびに100円～200円とされている団体が5団体あります。年会費制のところでは500円から3000円と幅がありますが、「認知症の人と家族の会」の会費に含まれている団体もあります。市や区の社会福祉協議会から助成金を得ているほか、赤い羽根共同募金や個人の寄付がある団体もあります。

協力・連携団体は地域包括支援センターや市町村の福祉課、市や区の社会福祉協議会、認知症の人と家族の会等家族会が多いです。

ここまで、各団体のプロフィールをまとめましたが、ケアメンが集まる団体

の概観が少し見えてきたと思います。

②例会の内容

プロフィールシートには「例会の開催日や大まかなプログラム」という記入欄がありました。例会といっても内容は様々あるようです。

座談会、サロン、カフェ、つどい、フリートーク、情報交換など「参加者が語る」形式をされるところが27団体あります。内容で最も多いのは、「特にルールはなく、介護のことを自由に語ってもらう」というものです。楽しく語り合うことを中心にされています。

次に、「リレートーク形式で一人ずつ語ってもらう」というもので、これは、一人20分と決まっているところや、決まりはなく、順番に語っていくところもあります。

いずれの形式でも、自分の経験や思いを語る場所があること、介護で大変なのは自分だけではなく仲間がいると確認できることが、団体の存在する重要な意味となっています。「馴染みの顔」があることが継続のカギのようです。

語りの後、「質問はしない、語るだけ」と決めているところもあれば、「語りの後でＱ＆Ａの時間をとる」と決めてところもあります。他には、専門職や「傾聴」を学んだサポーターがファシリテーター（司会、進行）として参加するところや、専門職のアドバイスを受けられるところもあります。

介護経験者の女性がアドバイザーとして参加し、女性の目線で妻の介護者に適切なアドバイスをもらっている団体もあります。女性は同じテーブルにはつかず、後ろの席で聴いており、必要以外は話さないというルールがある、という団体もありました。

語りあう中には情報交換も活発に行われています。福祉用具や介護制度、介護技術についてお互いに教えあう場にもなっています。

語りあう以外のことでは、料理教室や介護食セミナー、専門職からのミニ講座、介護を取り上げたテレビ番組の視聴、エンディングノートなどの学習、勉強会をされています。料理教室を定期的に開催されているところが3団体あります。

不定期でも料理教室を開催されているところが多く、男性介護者が介護そのものと同じように、あるいはそれ以上に悩み、戸惑いながらもチャレンジするのが「料理」ということがわかります。

他の不定期な活動としては、講演会への参加や地域のイベント参加、FM放送での啓発周知活動があります。どうしたら活動を知ってもらい、参加してもらえるのか、皆さん苦心されているようです。ビラや新聞などを刊行されているところが16団体あります。市の広報紙や社会福祉協議会の広報紙に載せてアピールをされているところもあります。

例会でも他の活動でも、参加される当事者が中心となって内容を論議し、決定されていますが、設立のきっかけが地域包括支援センターや保健師、ケアマネージャーの呼びかけであるところでは、内容も呼びかけた側が今のところ決めているが、当事者主体に変えていきたいと考えているとされているところがあります。支援者としてバックアップしたいと考えておられるようです。

例会の開催日時はどうでしょうか。不定期開催のところもありますが、2時間から3時間程度、語りあう団体が多いようです。いくつか挙げてみます。

「毎月第4土曜日　10時から13時」

「毎月第1土曜日13時から17時」

「偶数月第2火曜日13時30分から15時30分」

「毎月第1水曜日13時30分から15時30分」

「毎月第4火曜日　10時30分から15時」

「毎月第2金曜日　12時から15時」

土曜日や平日の日中に開催されているところが多いのは、デイサービスの時間に合わせておられるからでしょうか。集まりにくい人のためにと夜間に開催したものの、初めての人はあまり集まらなかったという声がありました。

開催されている時間であれば、いつ来て、いつ帰ってもいいとされているところもあります。参加のしやすさを考慮されているようです。

③「キャッチコピー」や「スローガン」

介護や介護支援というと、何かとしんどい、暗いイメージもありますが、それだけではありません。明るく、楽しく介護をしていくことを皆で考えていこうという想いが、キャッチコピーやスローガンに込められています。

伊丹市男性介護者の会きたいの会
5つの心得

①健康第一！健康を大切にし、楽することも覚えよう。
②介護で悩んでいるのは自分だけではないことを忘れず、自分だけでできないことは頼る勇気を持とう。
③見栄やプライドは捨て、言いたいことを話し合おう！
④聞いた話には意見せず、聞きっぱなしに努めよう
⑤聞いた話は外に漏らさず、胸に留めよう。

「ええかげんな介護を目指して」
「介護は一人でしない、介護支援も1人でしない」
「介護苦労は自分だけではない、仲間がいることを知ろう、そして助け合おう」
「ひとりで悩まないで　手をつなごう」
「あなたはひとりじゃない」
「声出して・しゃべって・笑って今日もスッキリ」
「聴こう・語ろう・学ぼう・笑おう・唄おう・飲もう会」
「認知症になって忘れたり失敗してもDon't Worry！（気にしないで）」
「認知症になっても安心して暮らせる社会を目指して活動する」
「小規模・地域・当事者現役・自立自律・ざっくばらん」
「駆け込み寺」「あなた教える人、私教わる人ではなく、だれが生徒か先生か、みんなが生徒で先生よ」
「ぼちぼちやったらええやん」
「外へ出よう、人と話をしよう」
「介護者の会も孤立してはいけない」
「介護者に笑顔がなければ、介護を受ける人は絶対に幸せになれない」
「笑顔で介護仲間と共に」
「男性介護者が孤立しない、悩みを抱え込まない、多くの仲間をつくる」
「介護生活には笑いが必要だ」

「介護者は孤立してはいけない」

「癒しを大切に（本人にも介護者にも）」

どうでしょうか。このようなわかりやすいキャッチコピーやスローガンがあると、会の雰囲気や活動がわかりやすく伝わるような気がします。周知宣伝する際に、アピールしやすくなるのではないでしょうか。明るく、力強い言葉が並んでいます。

④今後の活動について

「気兼ねなく、遠慮なく、ケアラーズが本音を語って「今夕からの元気をもらった」という気持ちでお帰りいただければ、他に何も望まないというレベルを維持したいと考えています」というところもありますが、そういった、「当事者が語ること」を大切にしながら、今後の展開をいろいろと考えておられるところもあります。

参加者が多いところでは、それぞれが語る時間を確保するために、地域で分けるなどして、人数を増やさないように工夫したいと考えておられます。逆に、参加者をどうやって増やしていくかに悩んでおられる団体もあります。多すぎても少なすぎても課題のある、繋がりを作ることの難しさが表れています。20人以下の団体が13団体ありましたので、20人前後が集まりやすく話しやすいのかもしれません。

カフェやランチ、夜の飲み会など、楽しんで参加できる内容を検討されているところが複数ありました。食べること、飲むことは、語ることとセットで楽しめる内容ですし、既に取り組んでおられるところも多くありますが、今後も増えていきそうです。

活動内容の広がりを考えておられるところでは、若年性認知症の当事者、介護者への働きかけを挙げられています。（既に支援されている団体もあります）

例会や交流会に参加できない、孤立している男性介護者への支援をしていきたいとされている団体も多く、参加の呼びかけを広く行うことはもちろん、戸別訪問をしたいと考えておられるところがあります。これも既に行っている団体がありますので、方法や手段の情報交換ができるのではないでしょうか。

例会などの集まる場の他、メールやFAXを利用し、個別の相談体制の構築

を考えておられるところもあります。インターネットの利用を挙げておられるところもあります。

男性介護者だけではなく、「単身者のつどい」や、シングル女性の介護者の支援なども挙げられています。当事者や介護OB、地域の方、独居の方なども共に集まる場を考えておられるところもあります。

そして、男性介護者の現状、介護の現状を関係機関や社会にも広く伝えていきたい、制度や法律などへの要求もしていきたいとされているところが10団体以上あります。

「介護のストレスを発散する場所としてだけでなく、社会に問題提起してアピールしていけるような団体にしていきたい」

「日本ケアラー連盟の介護支援法（案）の具現化」

「企業や行政に介護離職を一緒に考えてもらうこと」

「認知症になっても生まれ、育った地域で安心して暮らし続けられる『まちづくり』を目指していく」

「『徘徊がノー』ではなく、『安心して徘徊できるまち』をつくりたい」

「若年性認知症の人が利用できる福祉施設の開設を行政などに働きかけを行いたい」

これらは今すぐに実現するとされているわけではありませんが、現在の活動だけではなく、未来を見据えて今後の展開を考えておられます。

それぞれの団体をより良くするために、他の団体の活動の様子、内容が知りたいと、多くの団体関係者が訴えています。今回の「ケアメンサミットJAPAN」のような全国から集まる取り組みは、より幅広い情報交換の場になるのではないでしょうか。

活動地域、活動内容はさまざまですが、プロフィールシートをみていくだけ

でも男性介護者の現状、介護の現状を社会に発信する大きな力があると確信しました。「悩み」「苦しみ」といった言葉以上に「明るく」「ひとりじゃない」「笑う」「語ろう」「集まろう」といった言葉がたくさん並んでおり、それらひとつひとつが「力」になると思います。

5. ケアメングループ組織化の意義―プログラム開発とケアコミュニティ―

「ケアメンサミット JAPAN」での各プログラムにおいて参加者からも再三強調されてきたように、男性介護ネット発足以降のこの5年間、特筆すべきことは「ケアメン・プログラム」ともいうべき新しい実践手法が開発され広がっていることだと思います。男性介護ネットではこれらのプログラムの推進と普及を「ケアメン・プロジェクト」と称して介護する男性・ケアメンも生きられる新しい介護社会の実現をアピールしてきました。最後に各プログラムの推進を通してなされるケアメングループの組織化（ネットワークづくり）の意義について記し、今回の「ケアメンサミット JAPAN」の総括としたいと思います。

①ケアメングループのプログラム

〈ケアコミュニティ（集い場）づくり〉

各地に男性介護者の小さな会や集いが生まれています。今年度私たちが男性介護ネット5周年を記念して実施した「ケアメンサミット JAPAN」で行った調査だけでも全国100を超える団体・機関でこうした事業活動に取り組んでいることが確認されました。このケアメングループから提供された「プロフィールシート」からも以下のような特徴がありました。プロフィールシートの一覧は資料冊子として発行し、その分析内容は本報告「4」にて詳しく記してありますのでご参照ください。

ケアメングループの主宰者・発案者も、①介護当事者、②専門職・支援者、③専門機関（行政、社会福祉協議会、地域包括支援センター、男女共同参画センター、高齢者介護施設）、④当事者団体（高齢者・介護者団体、難病患者・家族団体、精神障害者・家族会）、⑤NPO、と実に多様です。その会や集いの目的も、①

介護殺人・虐待等介護事件の予防・防止、②介護者の仲間づくり、③男性支援のプログラム、④個別生活支援、⑤介護者運動、⑥介護スキルの向上、⑦研究対象（調査、参与観察、フィールドワーク）、等々これもまた主催団体の数以上に多彩なものとなっています。ただ、この実際の効用は、本稿でも紹介していますが、①同じ立場（介護者及び男性）の人との出会い交流の場、②プラス、マイナスも含めた介護感情が吐露できる場、③「ひとりじゃない」ということを実感する場、④これまでの介護生活の振り返り（reflection）の場、⑤介護者の経験が「知」として生きる場、⑥それ故、介護者同士が教えたり教わったりという相互に学び合う場、⑦介護者と支援者の協働の力が働く場、⑧介護者の元気エンパワメント（empowerment）を引き出す場、等々として圧倒的に支持されています。介護が媒介する新しいコミュニティともいうような共に介護を生きる男性同士の交流交歓がもたらす共感と承認の深まりという相互作用のダイナミズムにその真髄があるようです。

〈「語る／聴く」プログラム〉

「3年前男性介護ネットが生まれ／男性介護者が語り始めた」－これは私たち男性介護ネットの3周年記念式典に樋口恵子先生から頂いた「介護退職ゼロ作戦」と題したメッセージの書き出しです。本当に全国各地で自らの介護体験を積極的に語る男性たちが増えています。小さな集いで他の人の語りにじっと耳を傾け、自己の喜怒哀楽をないまぜた介護を語る男性たちです。また、男性介護ネットでは恒例になったリレートークのように、社協や行政、地域包括支援センター、男女共同参画センター、NPO等々が主催する介護の日のイベントや介護講習でも、新聞やテレビなどメディアの報道でも語る人がいて聴く（観る）人がいるプログラムもかつてなく広がっています。以前にはなかった社会現象だと思います。私たちはこうした語り部の組織化を目指して「ケアラーズバンク」なるものを提起したこともありましたが、個人情報の運用マネジメントの難しさもあって、本格稼働するには至っていません。事務局が知りうる限りの情報という制約の範囲で、社会的要請に応えていますが、全国100万人を超える男性介護者の語りを組織し社会に向けて発信することが可能となれば介護を巡る環境変革の大きな動力になると思われます。引き続き具体化の可能性

にチャレンジしていくことが大切です。

〈「書く／読む」プログラム〉

介護体験を「書く／読む」プログラムの代表格、介護体験記『男性介護者100万人へのメッセージ』はすでに5冊目の発行を数えています。これまでの体験記の収録数は、5集合わせれば560人、介護関係でみれば、妻を介護する人354人、親を介護する人166人、複数及び兄弟姉妹、叔父叔母等その他の家族関係が40人。介護する女性も含めれば本当に介護する人とされる人の関係性は従前に比べても実に多様になり複雑になりました。作家の柳田邦男さんは「書く」ということは生きる支えにもなるともいっていますが、同様のことは体験記を寄せる介護者も異口同音に記しています。書いて介護を生きるエネルギーを獲得するということでは介護ストレスへの対処プログラムともなっています。私たちの介護体験記『男性介護者100万人へのメッセージ』発行事業は、ひとまず第5集を持って休刊して充電期間としますが、体験記の募集と発表はHPや男性介護ネット通信への掲載など形態を変えて継続したいと思います。そして充電満了の時が来れば満を持して再刊したいと思います。

〈介護者運動プログラム〉

私たちの男性介護ネットは交流とネットワークを介して介護する男性の孤立を防ぎその課題を世に問うという介護者運動の機能を持って発足しました。上記で示したような全国100か所を超える集いの場の存在や「書く／読む」「語る／聴く」など各プログラムの推進、ネットワークの広がりという、男性介護ネットの存在そのものが私たちの主張、異議申し立てであり、政策提言や「新しい生き方モデル」の提起であります。また、2012年から始まった「介護退職ゼロ作戦！」や今回の「ケアメンサミットJAPAN」のような新しい運動課題や方法も、幸いネットワークを広げ社会的合意の水準を高めていくための運動の一環として関係者には好感を持って受け止められています。

2015年の介護保険見直し方向が出されていますが、見直しの度に窮屈になっていくことに介護者と市民の大きな怒りと不安の声が渦巻いています。介護が始まれば「入浴・排泄・移動・食事」という介護行為だけでなく、地域包括ケ

アがいうような24時間365日の「医療・介護・介護予防・生活支援・住まい」はもちろん、介護する人の仕事・家計・孤立など介護・福祉あるいは要介護者本人支援という、既存の分野・領域を越境してあらゆる社会政策に関わる生活上の課題が浮上してきます。

2010～2013年度の会員在籍者

都道府県	10	11	12	13	延べ	都道府県	10	11	12	13	延べ	都道府県	10	11	12	13	延べ
北海道	42	46	39	37	54	石川県	4	4	8	8	10	岡山県	12	13	14	14	15
青森県	2	2	5	6	6	福井県	2	2	3	2	3	広島県	12	18	17	18	21
岩手県	4	5	6	7	7	山梨県	1	2	5	5	5	山口県	7	5	4	4	7
宮城県	1	3	3	3	3	長野県	12	13	15	15	16	徳島県	3	2	2	2	2
秋田県	4	4	2	2	4	岐阜県	5	5	6	8	8	香川県	2	2	4	5	5
山形県	1	1	1	1	1	静岡県	8	9	10	9	10	愛媛県	9	11	9	7	11
福島県	4	5	6	6	6	愛知県	8	8	9	13	15	高知県	1	1	1	1	1
茨城県	6	5	3	3	6	三重県	9	9	9	9	11	福岡県	17	24	29	31	32
栃木県	6	6	8	9	9	滋賀県	22	22	22	22	26	佐賀県	3	4	4	4	4
群馬県	1	1	1	2	2	京都府	70	78	79	84	96	長崎県	2	3	4	5	5
埼玉県	27	28	30	28	34	大阪府	65	73	70	69	83	熊本県	2	6	9	10	10
千葉県	26	31	36	36	39	兵庫県	39	42	44	43	51	大分県	3	6	6	6	7
東京都	54	61	58	64	78	奈良県	11	10	10	10	11	宮崎県	4	5	5	4	5
神奈川県	30	31	30	27	38	和歌山県	2	3	4	3	3	鹿児島県	2	3	2	2	3
新潟県	6	5	6	6	9	鳥取県	3	4	20	20	20	沖縄県	0	0	1	2	2
富山県	3	5	4	5	7	島根県	2	2	2	2	3	韓国	1	1	1	1	1
												計	560	629	667	680	805

介護者運動がもっと大きな社会運動に接続されていく客観的な背景がここにあるのですが、私たち男性介護ネットの小さな取り組みもこうした文脈に置き直すことで、独り善がりのものではなく地に足をつけたより一層の広がりと輝きを増すように思います。

社会運動とは労働組合などのような大きな組織が行う要求を掲げ、拳を高く振りかざし、街頭で署名や宣伝、示威行動、立法府・行政府に向けてはロビー活動を繰り広げるというものだけではありません。存在することそのものが社

会への異議申し立てという運動機能を有しているものもあります。男性介護ネットのリーフレットのコピー「ひとりじゃない！生きる勇気がわいてきた」という小さな連帯も社会運動の原動力です。前頁の表は男性介護ネットの都道府県ごとの会員分布ですが、私たちのような地域に一人二人という小さな組織でも取り組み可能な、介護者の参加が促進され、そして社会的広がりのある運動レパートリーの開発と推進が課題です。点在する小さな活動を繋ぐという今回の「ケアメンサミット JAPAN」の経験が示唆しているように、あらゆる形態の「ネットワーク」づくりこそがキーワードとなるようです。

②ケアメン・プログラムの機能

こうした男性介護ネットが推進しまた開発してきた活動プログラムは、すでに幾つかふれてきたようにその内部に関与する人を励まし勇気づけ気付きを促す次のような自己教育機能を内包し育んできたとも言えます。こうした機能を有しているからこそ会員はじめ多くの関係者に支持され広がっていったものと思います。

〈「振り返り」と「見通し」の機能〉

「介護は辛くて大変、でもそればかりではない」。介護は健康な時には蔑にして気付くことさえもなかったような日常些細な関係を可視化します。これまでの暮らしで築かれた関係の揺らぎがはじまり新しい気付きの動力が立ち上がります。私たち男性介護ネットの３周年記念式典でご講演頂いた故長門裕之さんも次のように話していました。「洋子の介護が自分を真人間にしてくれた」。若いころには随分と無茶もして苦労ばかり掛けてきたが、認知症になった妻が、自分のどんな些細な上手でもないサポートでも頼りにし喜んでくれることで救われた。若く健康なころには気付きもしなかったささやかだが気遣い支え合う暮らしがこんなにも意味あるものか初めて実感した、というのです。男性介護者の介護体験記には、「恩返し」「罪滅ぼし」「贖罪」等というあたかも自己を鼓舞するかのような内省の言葉が頻繁に登場します。「自分が作った下手な食事も美味しいといってくれる」「トイレ介助の時にお父ちゃんが世界で一番だね、という言葉に励まされる」「就寝の時に妻の微笑みをみる時、救いのように思う」。健康なころには思いもよらなかった感情が湧きあがりほのぼのとし

たしあわせに包まれるというのです。これまでの暮らしの中では気付きようもなかった新しい発見であり、今からでも修復可能な課題でもあります。過去を内省的に振り返りながら新しい関係の中で生き抜いていこうという見通しのエネルギーが先の「恩返し」等という覚悟の言葉となっているのでしょう。

こうしてみると、介護を生きる人には、介護によって生じる不安や葛藤という揺らぎに寄り添い暮らし方や生き方の新しい発見を後押しする支援と支援者がどうしても必要だといえましょう。振り返りと見通しのエネルギーが自己組織化され、すぐにも行動と思いに表れる人もいれば、胸の奥深くに沈殿し凍てついていて立ち上がりには困難な人もいるに違いありません。このエネルギーの立ち上がりに特段に有効に機能するのが同じ立場の人によって語られ書かれた体験であり、それらがライブする交流の場（会や集い）に違いありません。上記で記した「書く／読む」「語る／聴く」という活動は、私たち男性介護ネットの重要な活動プログラムして広がってきたのには、このような有効な機能がその内部に隠されていたのだと思います。

〈新しい「知（経験知）」の発見と創造機能〉

新しい「知」の発見と創造ということは、上記の「語る／聴く」「書く／読む」プログラムの持つもう一つの側面でもありますが、さらに進化させていく課題として改めてこのことを強調しておきたいと思います。課題を抱えた人の語りに耳を傾ける行為は介護や子育ての分野でも重視され「傾聴」という支援法の一つにもなっています。語る人との良好な関係を築いたり、その人の精神的安定のサポートに寄与するといいます。が、この間の取り組みの実際や「ケアメンサミットJAPAN」でのワークショップやリレートークでの熱心な意見交換を振り返りってみれば、私たちの「語る／聴く」「書く／読む」というプログラ

ムはこの傾聴という支援法を遥かに超える意味を持っているのではないかと考えるようになりました。相互の関係づくりという傾聴のもつ外形への関心と同時に、傾聴の場において交わされるその「語られた」「書かれた」内容そのものにも特別な意味を見出しているからです。いわば未だこの社会が持ち得ていない新しい「知」の発見があり、「知」の創造が行われる場であるということです。

介護体験記を「辞書の様に手近において繰り返し読もうと思う」と感想を記してくれた方がいました。「医者や学者のいう一般的な話も分かるが胸に落ちない。同じ体験者の書いたものは自分の行先を明るく照らしてくれた」とも記していました。この社会にはもしかすれば真に介護者の知りたい介護の役に立つ辞書の編纂にはまだ成功していないのかもしれません。介護者の語りや体験記を素材にして経験知に満ちた新しい介護辞書の編纂過程にあるとすればその社会的意義は計り知れません。高齢者の語りの内容自体を重視し聞いた話を家族や地域に継承しようと民俗学者・六車由美さんが提唱し反響を呼んでいる「介護民俗学」にも同様の視点を感じました。六車さんは、介護される高齢者が語りを通して「教える側」に代わることで生きる意欲を取り戻す、とも指摘し新しい支援の可能性に言及しています（同氏著『驚きの介護民俗学』、毎日新聞2014年2月20日朝刊「『介護民俗学』の取り組み」）。私たちの「語る／聴く」「書く／読む」プログラムが新たに「教え／教わる」も加わって幾つもの異なるエンジンを備えるハイブリッドな知の発見と創造のプログラムとして機能するならば、介護の世界への問題提起も可能となるように思います。

〈本報告書の事業分析は下記の者が担当者しました〉

津止正敏（立命館大学教授、男性介護ネット事務局長）「はじめに」「1」「2」「3」「5」

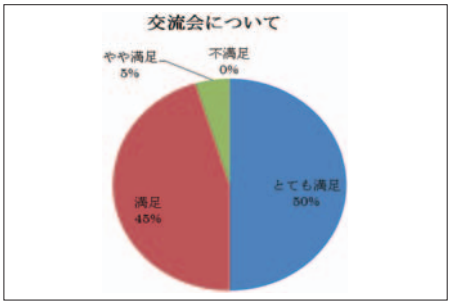
西田朗子（立命館大学大学院社会学研究科後期課程）「4」「資料1」

〈資料 1〉「ケアメンサミット JAPAN」参加者アンケート結果

(1) ケアメングループ交流会

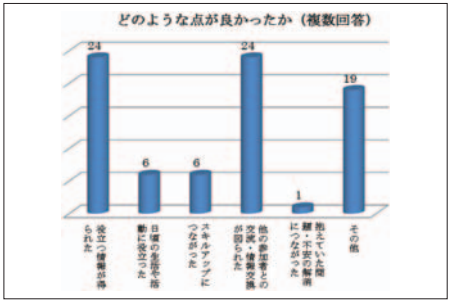
11 月 16 日（土）17：00 ～ 21：00
場所：コープイン京都
アンケート回答数：41

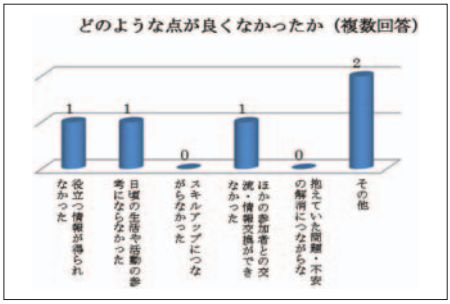
「とても満足」「満足」が合わせて 95％となり、参加者の満足度の高い充実した交流会であったといえる。



[アンケート記述回答]

・立食形式にしたので移動していろいろな人と話せた
・生演奏（特に学生という所が良い）が、ちょっと雰囲気を変え、場を和らげてくれる効果はあったと思う
・自団体紹介で 1 分（つまり全体で 30 分位）は短すぎる。2 倍の 2 分（全体では 1 時間）ぐらいはほしかった。ちょっとした印象に残るエピソードや、問題点をあげるくらいは言えたのでは。（つまり、その団体の特徴的な話が頭に残らず、書いてあることをサーっと言って終わってしまった印象）





・旧知の方と再会でき、旧交を温められたこと
・地域色が豊かで、その対応も様々
・多くの団体と知り合えてよかった
・全国にこれだけの団体があることがわかり、何か元気が出てきました。とても良かったです
・全国の情報が知れて大変良かったです。横のネットワークをつなげれば、遠距離での支援につながると思いました
・介護の心得のフレーズ紹介面白いですね。つい暗くなるので聞けてよかった
・ケアメン必要性に関するアピールが欠けていた
・各地の情報が知られ、地域での会づくりの参考にしたい
・代表者の表情がとても良かった
・筑紫野市の会→男性のみで10月会の運営をしたことが残っている
・実際に男性介護者の声を聞けてよかった。今後の活動のモチベーションUPにつながった
・日本国中から一同に集まったことに非常に意義があります。これが発展して各県都道府県、市町村にも男性介護の会ができればよいと思います
・熱心に活動されている方々に励まされました
・役立つ情報が得られるように、今後に期待
・他団体の活動状況が非常に参考となり、今後の活動への活力がわいてきた
・同じ目的意識を持ったみなさんのお話を聞くことができた
・他のグループの活動がよくわかった。こんなにグループがあるのはうれしい
・忌憚のない話が聞けてとても良かった
・明日11／17の交流に期待、時間がない

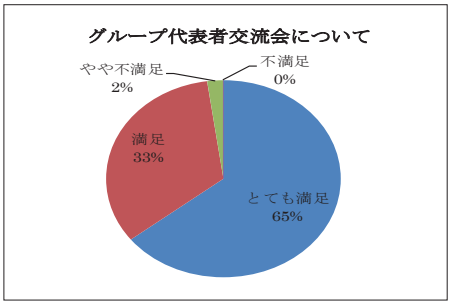
(2) 全国のケアメングループ代表者交流会

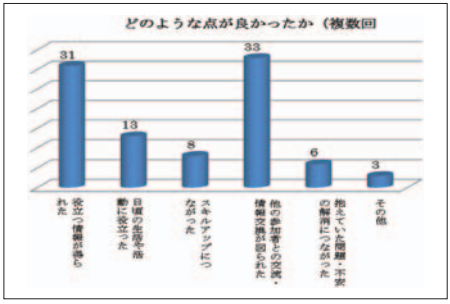
11月17日（日）10：30～12：00
場所：ハートピア京都
アンケート回答数：45

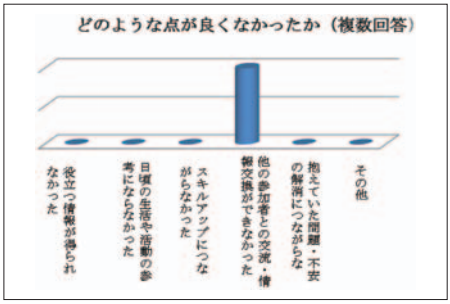
圧倒的な満足度だが、「良かった点」、「良くなかった点」双方から「他の参加者との交流･情報交換」に対して大きな期待が寄せられていることがわかる。

[アンケート記述回答]

- *他の活動内容を知れた*
- *笑顔を取り戻せそう*
- ひきこもっている介護者への呼びかけやアタックの方法をいろいろ聞けた。5～18歳の介護者の支援を勉強されている人もいてびっくりした
- 各地区のいろいろな会などを活用して更にPRしていく方法にまだむずかしさが残った。解決にまだ時間が掛かる
- 忌憚のない話が聞けた
- 先進的なお話をたくさん聞くことができました。ここで勉強させて頂いたことを地元に持ち帰って、会の発展・社会の発展のために努力していきたいと思います
- 世代の異なる支援の労働環境の問題などについて議論
- 毎年実施を希望します
- 方法には異なりがあっても、志は皆同じだと感じる
- 日本が抱える課題がリアルに情報交換できた。地域により実情が異なること
- 介護と仕事（就業）の難しさの







現実が伺えた
・介護休暇（職）あとの後職の難しさ、実態として、会社の中で必要とされてない状態があったりで復せない
・他の団体の進め方が参考になった
・少人数なので多くの意見交換ができた。次回はこの情報交換会に多くの時間をとってもらいたい
・男性介護者の参加をより多くするにはと言う問題で、イベントを展開するチラシを入れる。新聞などのマスコミを使ってのアピール
・情報交換できる。若者が介護に関わらざるを得ない社会になってきている。介護と仕事の課題が広がってきている
・ローカルな集いのマンネリを防ぐと思います
・とっかかりと、目指す方向は一緒。（自分が介護に苦労したので、今、困っている人を助けたい）でも、方法論はさまざまなことがわかったのでよかったです
・どうやって男性介護者の掘り起こしをしていくかについてのテーマでいろいろなアイデアを示してもらった
・「筑紫野市介護を考える家族会」の活動報告
・自分たちの活動の PR ができた
・立場別、特に単身介護者の会

（3）介護退職ゼロ作戦フォーラム 2013

11 月 17 日（日）13：00 ～ 15：00
場所：ハートピア京都
基調講演「男性介護ラッシュが職場を変える」
　　渥美由喜氏　（株）東レ経営研究所
リレートーク「私の介護と仕事」
アンケート回答数：50

［アンケート記述回答］

・このように考えればよいのだと思った

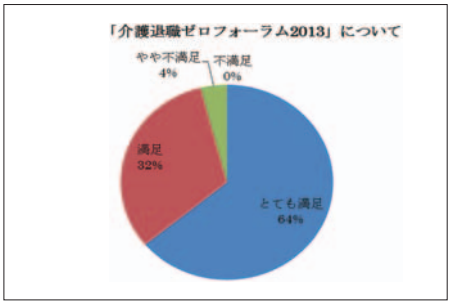
・男性の体験談が聞けてよかったです

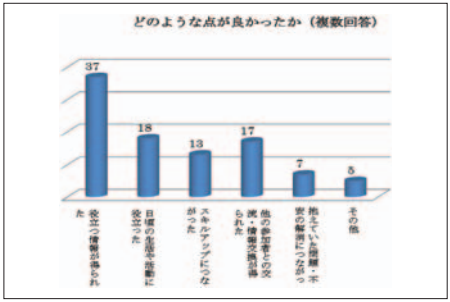
・素晴らしい講演でした。私の場合も妻が６年前ガンで死去、私が双極性障害で措置入院、毎日何時間も私の所に電話がかかってきた事もあり、身につまされる講演でした。（この間母の介護が乗る）

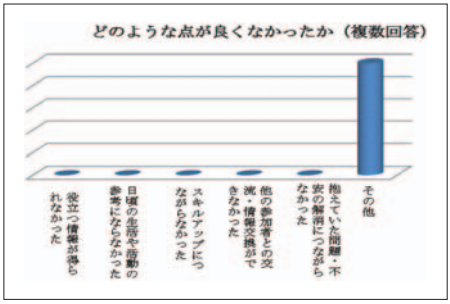
・渥美先生の話が大変参考になった。介護と仕事の両立を今後も支援した

・日頃の集いの仲間の状況とはまた違った大変さを具体的に聞くことができ、地域の男性介護者の発掘が急務であることを感じた

・いつどこへどんな方法でという情報が得られ、大変参考になった







・介護者運動が肝要。その取り組みを男性介護ネットが担うべき、介護者支援法の実現

・基調講演はとても新鮮で深い学びになりました

・リレートークは現実を真に知りとても有意義でした

・もう少し時間があったらよかったです

・渥美先生、リレートークの方のお話、それぞれどの方のお話も心に残るお話でした

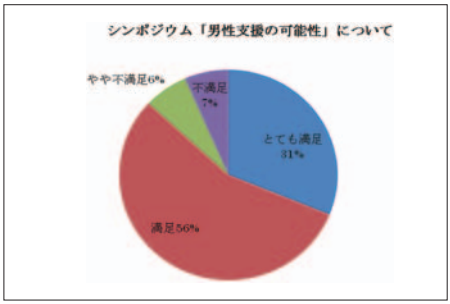
・私自身のことですが、老化現象で聴力が低下し、少し早口の講演は半分以上？は聞き取れませんでした
・渥美さんのお話に情緒的な要素が多かったのが印象に残った。私は、仕事としてケアマネを行っており、親族の介護に携わっているわけではないのですが松明になりたいと思います。ありがとうございました
・自閉症の孫をもつ。先生の生い立ちをお聞きし、今後の育児の方法でいかに成長を楽しんでいくか。そして、介護の心得を知る。辛→幸
・生の声、50歳で離職、介護と仕事、絶対できないことの話。悲痛な思いで聞くチャンス
・会社が理解あって就業できるのはいいが、心ない仲間の＜いじめ＞で会社を去らねばならないことがある等…。
・ブロックごとのディスカッションで参加者の交流が深まりネットワークの進化がみられた。全国の新しい団体の参加で新しい知見を得ることができた。渥美先生の講演でカミングアウトする大切さと、上には上がいることが分かった
・人としての生き方にとても感動しました。たくさんの人が勇気づけられたのではないでしょうか
・やや話し方が速かった
・発言、発音が不明瞭で聞き取れない箇所多し
・抱えていた問題がわかった
・女性介護関係から考えることが多かったので、問題点の違いがよくわかった。
・物事を前向きに考えることが大切だと思った
・渥美先生の講演→自分が8年間の介護でプラス思考になれたと思っていたが更なるプラス思考を教えていただいた
・武田さん→人柄がにじみ出て、自分を客観視しながらペースを作られたことに感激です
・三橋さん→大変貴重な発明の仕事。違う視点でゆっくりと思います
・佐々木さん→しみじみとお母様への思いがわかりました
・渡辺さん→認知症と腎臓の病気では大変なこと、仕事さがし、調理でも早く帰りたいんやろうとも誇れる親のために働く、栄養管理もと…がんばって下

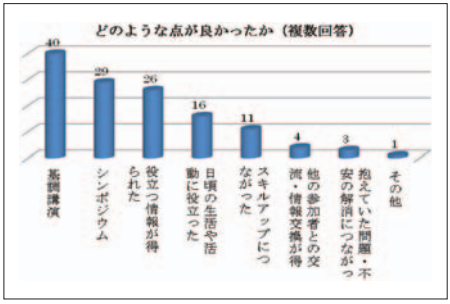
さい。長時間労働の人がたくさんいることに心痛む。企業が理解していても現場が無の理解あるのは日本の常態なのですね
・永田さん→海外など広い世界まで行動範囲を広げられてすばらしい取り組みでした
・他地域での活動の姿が見えてきた
・ありがとうございました。私も介護・看護・育児・療育そして仕事を両立させています。考え方、時間の使い方で意外と何とかなるもんだなと毎日楽しく過ごすようにしています。介護、療育もビジネスだなとつくづく感じています。ぜひ、時間生産性の向上に関する話を聞きたいと思います
・当事者の生の声を聞くことができ、大変心に響く内容でした
・介護の捉え方に対する考えが参考になった
・渥美さんの話、自分で実践していた点も有り。自信を持てました
・具体的なエピソードオンパレードの渥美氏の講演がすばらしかった。根底の人生観・死生観を共有できる人の数は限られているだろうが、本当によいお話を聴くことができて参加した甲斐があった。相手の笑顔につながるかかわりができたのであればまずよしとしようという自分なりのガイドラインが誤りではないような気もした
・渡辺氏が指摘した弱者切り捨て、中間層下端以下の棄民政策への対処を視野に入れないケアメンサミットとみなされるようなことがあるとすれば、富めるものの自己満的報告会に堕とさない舵取りを切実に願います
・自分にはたいした経験や体験がなく、人の話からしか問題を考えられないので、いろいろ話を聞けてすごく勉強になりました。交流はやりにくいです
・このようなフォーラムをもっと広げてもらいたい
・いろいろな方のリレートークと、フォーラムでの基調講演もご自身の体験を交え、わかりやすく感動的でした。まだまだわかりにくい制度や在宅介護の実態を多くの人に知ってもらいたいと思います

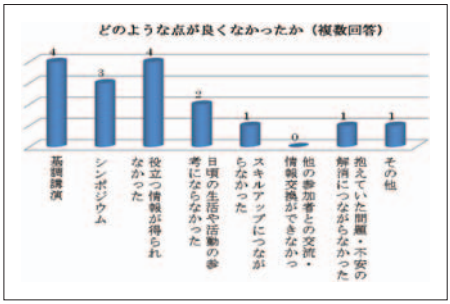
(4) シンポジウム「男性介護の可能性」

2014 年 3 月 8 日（土）13：00 ～ 16：30
場所：キャンパスプラザ京都
シンポジウム「男性介護の可能性」
アンケート回答数：60 人

「とても満足」31％、「満足」56％と 90％近くの支持があった。基調講演に多くの共感が集まった。「役立つ情報」について良かった、良くなかった双方の回答があり、介護者や日頃の活動に真に役立つ情報への渇望があるようだ。







［アンケート記述回答］

・ジェンダーギャップ指数が 105 位である理由が日本の経済発展してきた仕組みにある。超高齢者社会を最初に迎える日本は、世界の中で先駆事例になるとの話は興味深かった
・男性介護を中核に男性支援に関する様々な分野で活動されている方の話を聞くことができ、広がりがあってよかった
・語らない男性を語らす工夫、ほっこりサロンの取り組み
・地域情報がとてもよかった
・それぞれの立場の方々から具体

的な話がいくつも出てきてただ自身、会場に入ったのが16時頃だったので十分な話が聞けなかった分が残念でした
・関西での男性介護者支援の動きがわかった
・男女関係の変遷が知りえた、男性ならではの問題を再認識できた
・地域でのさまざまな取り組みを知りえた
・基調講演では支店の違う話しが聞けてよかった。親密圏、海外事例など
・なぜ男性の場が少ないのか、参加されないのかがわかりました。社会の中で異性として生きてきた人生があった事
・伊藤先生のお話は、われわれの実感やイメージをデータとして、学術的に提示してきたと言う点で意義があった。ただ、今後の展望と言う点では弱かった
・具体的情報、参考になった
・男女の違いがクリアになった
・考え方や取り組み方
・もう一度何らかの機会にゆっくりと戦線の話を是非聞きたい
・介護とはかたゆく考えがちだが、生活の一部、楽しんでやらなければ続かないことを確信した
・具体的な事例をあげてのご説明がとてもわかり易かった
・男性、女性を問わず、介護多世帯問題を地域でとらえていく多様な支援のモデルを知ることができた
・支援ある例としてのヒントか具体的が得られた
・介護に男女のちがいは無いが、なぜ男性に対する支援が必要なのか。私自身が男性介護の集いを毎月開いているが、＊精力的な支援が必要＊介護技術のスキルアップ＊日常生活の生活技術力の向上＊更に公共サービスの利用情報が希薄（情報不足）＊地域に溶け込む時の周囲の理解　が今日の中からヒントが得られました
・日頃皆さんと話をしている中で思っていたことを理論的に説明されたこと
・個人と地域のつながりの不足の改善等、地域連携の確立の実現に向けての活動をしていきたい。行政を含めての取り組み
・少子高齢化を実感！！意識の問題だけでは解決しないことを労働も含めて今こそ見直す時が来たのですね。また、男性介護者だけではなく、人とのふれ

あい？
・小林さんのできる男の別省に関する話は良かった
・内容多かったが、濃く過ぎて、吸収できない部分があった
・私たちのしていることは大きな実験であり、後世に伝えていかなければいけない大切なことであると認識しました
・基調講義の講師がわかりやすくまとまっていた。内容的には周知された内容ではあったが、データを用い、分析され、課題を再確認できた
・いずれにしても地域社会全体を巻き込むには、MAN も含めて、まだ時間が必要であると思います。ただ、その先見性には、脱帽いたしました
・なぜ「男性」が介護者として特別に取り上げられるのかが具体的な説明があり、かなり明確になったため、今後の活動で何を考えながら行えばよいか役に立った
・基調講義：大学教授という専門家がどういう具合に問題を受け止めているか聴く過程で介護の現場にいる非専門家の思いとの違う点が明らかになったこと。

シンポジウム：語らない男性の像のプレゼンを聞いているうちに（from 今井まゆり氏）語らないのではなく、語れない＝語る自分を把握できてないのだという私の観察とはずいぶん違うということがわかった
・男性介護者（OB）のつどいを持つ度に、どのようなデータが得られるかと…
・必ず人の話を聞いてこと
・心やすらかであることを学べたかな
・演者は意図的に他分野から招いたかと思うが、これから男性介護について議論が深まっていくようなイメージがわかなかった。「男性学」の研究会」ならこれでいいかも知れないが、交流会や情報共有、介護者支援に向けたとりくみをしていくほうが有意義と考える
・パネルディスカッションの質問のチョイスに疑問があった
・介護者本人に良い介護する必要があるのではないか？
・介護者本人が置き去りにされているのではないか
・今日の男性介護の主旨に合っている内容だった。しかし、男性、女性の特徴を分析した内容や今後の男性介護の取り組みの参考になった。
・第一回の渥美さんの話にくらべて何を伝えたいのか？？が伝わりにくく、中

身も、うすく感じました。介護と仕事と社会でのあり方、個人（介護者）の努力、社会（社会風土、法律）の努力について、渥美さんの話しを二回聞くのが良いと思いました。

・男性の特徴に関する一般論で、あまり心に響かなかった。男性介護者は既に意識が変わっている。人は生きてきたように老いるのだから、定年まで仕事以外にどのような生き方をしてきたのかが問われる

・マイノリティ（少数派）ムーブメント（運動）ジェンダー（男女平等）などの横文字が多く、分かりやすく PR して欲しい。その他は良かったです

・男性配偶者介護者の問題点が今まで一度もとりあげられたことがない。事実婚、離婚、内縁関係者のジェンダー介護男性の問題は介護プラス差別、偏見に置かれている

・介護とは関係ないテーマであり、他の事業で扱うテーマであった。世帯の連帯や世代を超えた連帯は誰からも語られなかった。指摘も無かった。時間の無駄でした

・我々団塊の世代は、それほど社会に向いているとは思えません。ゴルフ、小料展に出向いています。（私の知る限りですが）

・小林裕子氏のお話にあったが、「サービスを利用していない男性介護者」への周知についてはそういうサービスがあることを知らないために使わないというケースしか考慮されていないように感じた。現場にどっぷりの私の印象では「サービスがあるのを知っているけど使いたくない」というバリアーをどう壊すかという場合が多いと感じている

・虐待について。何が虐待に当たるのか、直面しそうな時、どうすればよいか

・地域情報が参考になるので、とても良かったので今後このような催しの時発表されるのを楽しみにしています

・介護をめぐる法律問題

・シングル介護者への手助け

・介護放棄の問題

・若い世代の介護者の集いのイベント、語り場、交流会

・遠距離介護者の集い

・介護休暇のあり方と運用の研究会

・学校教育と介護（ないし地域福祉援助）
・介護される側の意見、思いも取り入れて欲しい
・介護の質の問題を取り上げてください
・年に一度このようなサミットを開催して欲しい。男性介護のみならず、男性支援について考える会がなかなかないので是非またやって欲しい
・男性介護の会の運営事例、成功例と失敗例、両方知りたいです
・各地域で活動されている男性介護者グループによるディスカッションなどをより深く（活動の内容や実態をより深く知りたいため）
・介護離職対策×２名
・介護者の就労について
・渥美さんのような具体的な（現場の）話をもっと企業人から聞いてみたい
・一流企業の方だけではなく、中小の方ならではの視点の話も聞いてみたい
・ケアメンサミットのために、講演された方が団体代表として、何がどう結びつくから話をしました。というのが良くわからなかった
・ケアメンサミットを含めた活動と研究には感謝しています。ワーク・ライフ・バランスに取り組んでいる企業を知ることができればうれしい
・男性の深層心理（育児、介護、働き方などについて）、地域連携、ワーク・ライフ・バランス、家事
・介護する人、される人。誰でもいずれ、終末期を迎える。どう死にゆくか。これはされまでどう生きるかにつながるので、人生観、死生観が反映される。役に立つ情報とともに役に立たない情報にも目を向ける必要がある。荘子の「無用の用」である
・今回参加させていただき本当にありがとうございます。ヒントを沢山持ち帰るだけではなく、ネットワークとして何かできないのかと思います。（資金面でも一緒にできることは理想です。）
・男性配偶者介護者の問題点が今まで一度もとりあげられたことがない。事実婚、離婚、内縁関係者のジェンダー介護男性の問題は介護プラス差別、偏見に置かれている。という件についての男性配偶者の問題点
・介護うつの問題は介護者の重大問題
・「食べてへんのに払うんか」で奮闘された林さんは大きく言えば「男性介護

の社会を変えた」の一事例になると思います。個人ではなく、ネットワークとして介護問題の矛盾を集約して行政に伝え、改善していければ素晴らしいと思います。そういう取り組みはどうでしょうか
・介護退職の作戦以外にもと言う意味です
・認知症の親とのコミュニケーション
・地域社会に出来てない男性が出やすいように「場を設ける」説明があったが、それでも来ない、来られない、場の存在さえ知らない方達が実際には多い。この解決に具体的に対応して効果のあった事等知りたい

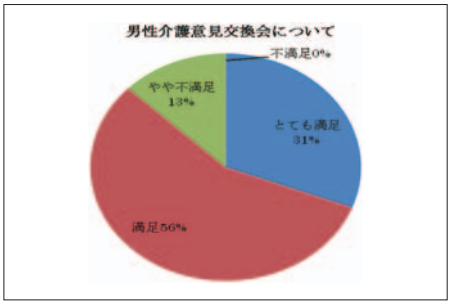
(5) 男性介護者意見交流会

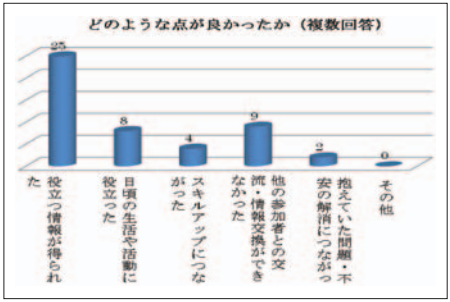
2014年3月8日（土）17：00～18：00
場所：キャンパスプラザ京都
アンケート回答数：39人

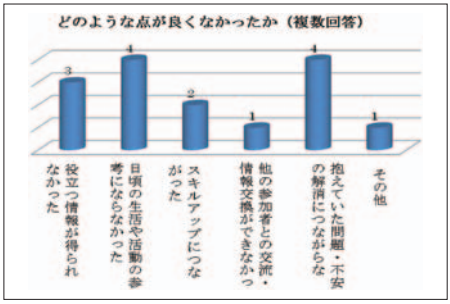
短い時間での交流会となったためか、「日頃の生活や活動の参考にならなかった」「抱えていた問題・不安の解消につながらない」など「やや不満」との回答が13%となったが、それでも「とても満足」「満足」との回答が80%を超え、意味のある意見交流となっていることがわかる。

［アンケート記述回答］
・全国から一同に色々な交流が出来ることはあらためて感謝します
・各地域の男女参画審議会やセンターが取り組んでいることを具体的に知ったこと
・政策提言まで考えている団体もあり頼もしい
・時間がもう少しあればと感じた
・他者の方の発言が地道に努力されている実情がわかりやすかった
・参加で出来る場を知ってもらうことが大切、そう広めるかが課題だと思います
・皆様がんばっていますし名を丁寧な内容でしっかりお話しておりましたすごい事です

・新しく参加された方々の力ある発表に敬服
・単なる報告で終わった
・終末期の対応･本人の(被介護者)気持ちと介護者の意思の「ソツウ」の事例、高齢化になって施設では対応できないその方向性を示して欲しかった
　＊皆さんと話していてそのことが痛烈に感じられることです。
・新規参加の紹介は、特長ある内容（時間限られているので）に特化されていると良かった
・もう少し具体的に知りたかった
・各活動団体の特に参考になる(一般的な共通の課題）ごとに特化した事例等を聞ける場所となるとより学習になります
・認知症治療薬の最先端情報
・意見交換会の時間を増やしていただければもっとお話しを聞きたいです







・介護中の体験（一人 15 分）とともに（介護体験者の）介護を通じて学んだこと、そしてそれを現在の生活にどう生かしているか
・プロフィールシートに感動しました。また、じっくり読ませていただきます
・昼食会又は、ブランチ、3 時のお茶会をして欲しい。夕方～夜は、介護のため帰宅しないといけないため

(6) 5周年記念式典

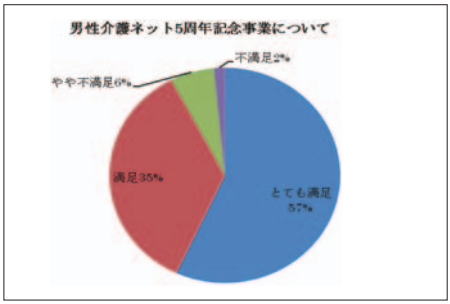
基調講演「ケアメンのこれから」

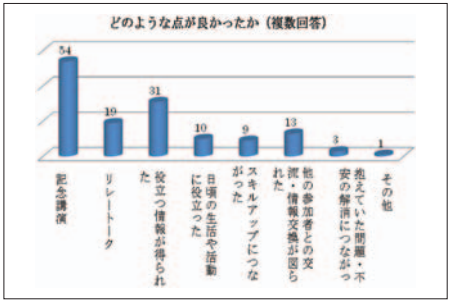
樋口恵子氏（NPO法人高齢社会を良くする女性の会代表）

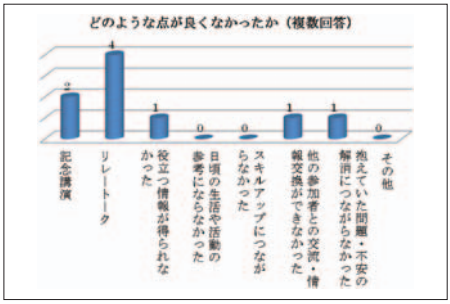
男性介護者リレートーク

アンケート回答数：64人

樋口恵子氏の基調講演に多くの共感の感想が寄せられたが、アンケート結果にはリレートークの時間不足の指摘も感じられる。







[アンケート記述回答]

- 具体的な数値をもとに社会現象の変化を課題抽出され、対象についても提言されていて非常によかったです
- ワークライフアンドケアはこれからの社会に非常に大切なことであり、日本の社会が救われるのですなかと思います。企業にとっても不利益がかいに出来る
- 歯切れのよい樋口先生の話感銘を受けました
- 樋口さんは良く知っている（他の機会に）切り口の素晴らしさそのものです
- とてもよかったです。少々時間が長すぎませんか？先生にお気の毒です
- 素晴らしい発展、敬意を示します

・時代が変わり、男性もケアをする側になった。先が見えないけれど続けていかないといけない事がわかりました
・大変役立つ、または重要な取り組みと思いました
・樋口先生の講演は良かった
・これまでの活動の確認になりこれからのやるべきことがはっきりした
・樋口先生の講演の中で「イギリスはシチズンシップ、日本はソルジャー」であるなら、日本におけるシチズンすなわち仕事・家庭・地域等に地域の再生のつくりをどのように取り組むかが課題。国の行政は最近「地域を」と唱えているが、具体性も無く財政上もない。ただただ介護は家族・地域の問題として位置づけて介護放置しているのがこれらの現状だ
・介護についての過去・現在・未来のことが理解できた。男性介護者増加の必然性・問題点・対策が浮き彫りになった。未来に希望が持てた
・樋口先生のお話が長すぎた。時々は他の先生でもいいのでは？
・いいお話ですが少し時間が長いかも。集中力が続きません
・今後の運営に関する意見交換
・参加者が気持ちを一つにして活発な意見を発表する機会があったこと
・各方面での現状を知り、大いに参考になりました。特に年齢構成の中での介護の姿の大きな変化に驚くかぎりでした
・会のこともよかったのですが、実際の介護されている立場でのお話があるとよいかと思います
・樋口先生のお話は簡潔でわかりやすく、ケアメンを支える必要性を強く感じました
・日本の社会が変わってきて、今の介護の課題があることを分かりやすく話していただいた。「不慮の事故」として出産を届け出た話は、印象的でした。
・「ながら介護で行こう」と言う話に共感しました
・「くるみん」のように介護に協力的な会社を判別することで、介護退職する可能性を低く、個人の選択で出来ることは絶対に良いものになると思いました。私も今から、作業療法士を目指し、リハビリと認知症のメンタルケアのプロとして存在することで親の介護の痛みと、仕事の両方を調和させるかもしれません。もう二度と、介護退職はしたくない

・日本の家族の有りようの変化が良くわかった。子を介護者に選ばないけれど、これでよいのか、子を介護者にしたいから介護離職を止めるのでは、ないだろうか。子に期待しないのなら、介護離職ゼロも不必要では。矛盾を感じる
・色々な情報が得られた
・介護離職ゼロ要望書がよかった
・介護と介護が抱える問題への熱意ある発言、同時代を生きる気持ちの共有と連携
・個人から団体、様々な取り組みをしていることがネットワークで繋がり、共有できる体制作りを期待しています
・活動内容の話も悪くないが介護体験と銘打っている以上はもっと実体験の話が聞きたいと思いました
・介護体験というより宣伝みたいであった。期待していた様子ではなかった。ただ最後のほうはよかった
・もっと説明なり事例が欲しかった
・80 歳の高齢で元気でお話ができることに敬意を示します。
・つどい等が使用している資料を集めて冊子のようなものを作っていただきたい
・介護保険と家族介護モデルを考える
・地域の中で関係団体と連携に取り組み等
・HP で講演の先生や演習課題を教えて欲しいです。告知
・参加者同士の交流サロン
・上野千鶴子さんの講演はいかがでしょうか。（上野先生は今立命館大学院教授だから最適でしょう）
・男性介護者支援の視点など。会を開くときの具体的な内容を全体の場で聞いてみたかった。なぜ男性同士なのか、男性同士のメリット・デメリット・特徴。当会は高齢男性のフォローで困っている
・介護離職に対する今後の取り組みや、対策をもっと深く知りたい。
・介護休暇に理解ある、影響力のある企業経営者の話。樋口先生に今後もお願いしたい。在宅医療・介護について。鎌田實先生の話
・「私の体験発表」でプロジェクター等を使って説明してほしい
・社会風土が変わるまでの間に個人の努力としてどういってメンタリティ、論

理で介護を自分の人生に調和させ肯定している、又は悩んだままなのか等が聞けたらうれしい

・例 1. 十年の介護に関わって、失った喜びを資産を自分のために使って遊びまくることで取り戻している

・例 2. 作業療法士のリハビリとメンタル（認知症）のケアのプロに転職することによって、親の介護を臨床と捉え、仕事も介護もリンクさせることで最大の理解者であり仕事にも集中できるメンタルコントロールをする

・例 3. 介護によって失ったエリート学生街道を逆に自分の売りにして不運な要素を個性と捉えメンタルをコントロールする

〈資料2〉「ケアメンサミットJAPAN Ⅰ・Ⅱ」参加団体一覧

地域	出席（Ⅰ）	出席（Ⅱ）	プロフィールシート	団体名
北海道	○	○	○	北海道男性介護者と支援者のつどい
北海道	○		○	東川町男性介護者の会ぼだい樹の会
宮城	○	○	○	認知症の人と家族の会宮城県支部　なごみの会
東京	○	○	○	荒川区男性介護者の会「オヤジの会」
東京		○	○	NPO法人介護者サポートネットワークセンター・アラジン つくし会
東京			○	かずらの会
東京	○	○	○	認知症ケア町田ネット
東京		○	○	みたか・認知症家族支援の会
東京	○	○	○	介護者のつどい東大和
東京	○	○	○	NPO法人杉並介護応援団
神奈川	○	○	○	川崎市認知症ネットワーク
山梨	○	○	○	山梨やろうの会
長野	○	○	○	シルバーバックの会
長野		○		長野県男女共同参画センター
静岡	○	○	○	NPO法人生き活き岳南クラブ ほっと
愛知		○	○	NPO法人てとりん
愛知			○	名古屋市南区社協
富山	○	○	○	男性介護者の会みやび
福井	○	○	○	ケアホームさいせい「男性介護者の集い」
福井	○	○	○	福井中央北包括支援センター
滋賀	○	○	○	男性介護者の集い「中北の家」
滋賀		○		甲賀市介護者の会男性介護者部会
京都	○	○	○	男性介護者を支援する会TOMO
京都	○	○	○	男性介護研究会

地域	出席（Ⅰ）	出席（Ⅱ）	プロフィールシート	団体名
京都			○	認知症の人と家族の会京都府支部男性介護者の集い
大阪	○	○	○	住吉区地域包括支援センター ほっこりサロン
大阪	○	○	○	豊中市老人介護者（家族）の会
大阪	○	○		福島男性介護者の会
大阪		○		妻を介護する男性介護者の会(準備会)
兵庫	○	○	○	ほっこり庵（NPO 法人スマイルウェイ）
兵庫	○	○	○	たつの市男性介護者の会
兵庫		○		宍粟市男性介護者の会
兵庫	○	○	○	男性介護者の会　ぼちぼち野郎
兵庫	○	○	○	伊丹市男性介護者きたいの会
兵庫	○	○		男性介護者支援ネットワークひょうご
岡山		○	○	岡山男性介護者の会
広島	○	○	○	男性介護者の会（福山）
広島	○		○	男性介護者４木（よんもく）の会
広島	○	○	○	広島市佐伯区健康長寿課
広島		○	○	広島市東区ケアメンの会
鳥取		○	○	男性介護者ネットワーク鳥取県
香川	○	○	○	社会福祉法人牧羊会　特別養護老人ホーム　シオンの丘ホーム
福岡	○	○	○	認知症の人と家族の会福岡県支部
福岡	○	○	○	筑紫野市介護を考える家族の会
福岡	○		○	直方市社会福祉協議会　認知症の人と家族の会直方
大分	○	○		認知症の人と家族の会大分県支部
宮崎		○		認知症の人と家族の会宮崎県支部
長崎	○	○	○	認知症の人と家族の会佐世保支部
	34 団体	42 団体	40 団体	

〈資料３〉「プロフィールシート」

「男性介護者の会／集い」プロフィールシート(2013／2014)

№.１　　(記入者：　　)

1.団体名	
2.代表者	
3.所在地	
4.連絡先	電話
	FAX
	E-mail
5.設立・活動時期 (貴会のチラシパンフ資料等を添付してください。)	①　　年　　月発足 ② 設立のきっかけ・動機 ③ 貴会のアピールポイントやスローガン、キャッチコピーなど
6.会員数	＊約(　　)人、(内、夫　　人、息子　人) ＊内訳:①介護当事者(　　)人、②介護者 OB(　　)人 ③支援者・専門職(　　)人、④その他　(　　)人 ＊専門職種[　　]
7.活動内容(チラシやパンフなどがあれば添付してください)	例会の開催日や大まかな内容(プログラム)
8.活動資金	会費［　有　・　無　］(有の場合　　円) 助成金［　有　・　無　］(有の場合　　円) その他［　有　・　無　］(有の場合　　円)
9.協力・連携団体	

№.2

10.これからやってみたいこと(活動や組織のこれからの方向性)
11. 他団体の活動について知りたいこと、聞いてみたいこと
12.男性介護ネットへの要望や意見

★お持ちのチラシやパンフレット、広報資料等をお送りください。「ケアメンサミット JAPANⅡ」の資料集を作成したいと思います。

送付先：男性介護ネット(同封の返信用封筒をご利用下さい)

インクルーシブ社会研究６
Studies for Inclusive Society 6

男性介護者支援の論理と根拠
―ケアが拓くコミュニティ―

The Logic and Grounds
of the Support for the Male Caregiver

編集担当：津止 正敏

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の＜学＝実＞連環型研究」
社会的包摂に向けた伴走的支援の研究チーム

2015年３月20日印刷　　2015年３月31日発行

発　　行　　立命館大学人間科学研究所
http://www.ritsumeihuman.com/
〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
ＴＥＬ（075）465-8358
ＦＡＸ（075）465-8245

印　　刷　　株式会社　田中プリント
〒600-8047　京都市下京区松原通麩屋町東入
ＴＥＬ（075）343-0006
ＦＡＸ（075）341-4476